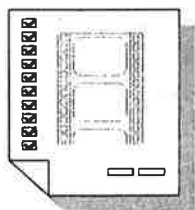


●学術 mini 情報誌・・・フットワークで集めた学術先端情報●

PS

JOURNAL

2007 第 10 号



PS
JOURNAL

特集: 研究者の現在区 人文・社会科学の、パ-ソケイフ 2

■ヨーロッパの帝国主義の東漸と東アジアの商人ネットワーク

京都大学人文科学研究所教授 籠谷 直人

■RG131 接收商社資料と空襲ターゲット選定

九州大学教授 三輪 宗弘

■一次資料との出会いと大学図書館いろいろ

釧路公立大学准教授 宮下 弘美

■地方鉄道史資料との出会い 中京学院大学講師

関谷 次博

■船舶保存の課題 千葉科学大学非常勤講師

中川 洋

■フィルムセンターにおける映画資料の収集と公開

東京国立近代美術館フィルムセンタ-主任研究員 入江 良郎

■大学図書館員が教える「情報を紡ぎ出す力」

同志社大学図書館員 井上 真琴

梶谷直人(京都大学人文科学研究所教授/日本経済史)

周知のように、近代日本がウエスタン・インパクトに対応しながら、その経済的主権の回復をめざした諸課題は、

- (1) 関税自主権の回復
- (2) 基礎通貨へのリンク(金本位制への移行)
- (3) 第一次産品(とくに石炭、銅、生糸)生産取引と、鉄道の敷設・経営からの外資排除

などであった。そして、これらの諸課題は、ヨーロッパ、とくにイギリス帝国主義にとってはその経済的本質を映し出していた。つまり、帝国主義はつぎの諸点をアジアに供与した。

- (a) 自由貿易原則の強制
- (b) 強い通貨の植民地への強制
- (c) 第一次産品供給地化と、第一次産品を自由貿易港へ引き出す放射線状型の鉄道の敷設

などである。

近代日本における関税自主権の回復は、1899年に達成されるが、開港(1859年)から約半世紀間において、日本は関税収入に期待できなかつた。日本にとっては、まさに自由貿易は強制された制度であった(a)。新しい政体にとっては、関税収入に期待できないなかで、いかに財政をまかなってゆくのが最大の課題となった。それゆえ、明治政府は、土地の私的所有権を認める土地改革(地租改正)に乗り出し、地税を通した国家財政収入を確保した。「海洋からの徴税」と「土地からの徴税」は、新しく建設されたアジアの小国家にとっては徴税戦略における機会選択肢であった。

しかしアジアにおける新しい政体にとっては、土地改革はそれほど容易ではなく、地税収入に期待できない場合が多かった。農民の土地の私的所有権を認め、徴税義務を課すことが土地改革の基本であったが、たとえば東南アジアでは土地の処分権は村落がもっており、納税も個人単位ではなく村落単位でなされた。そのために、村内民の納税負担には高低の差異が生じ、税額水準は低位に落ち着く傾向があり、納税額の向上は期待できなかつた。

そうした財政問題に直面した場合に、徴税コストをてっとりばやく引き下げる手法として案出されたのが、ベンガル産アヘン消費をめぐる徴税請負制(その後に専売制)であった。つまり、アジアにおいて新しく誕生した政体にとっては、関税、地税、アヘン消費税は、財政収入面でのレバートリーであった。なかでも土地改革がすまない植民地政府にとっては、アヘン取引からの徴税は重要な財源であり、シンガポールをはじめとする英領植民地政府の財政収入にとっては決定的であった。自由貿易を強制された新しい政体にとっては、その財政収入をめぐって、土地改革とアヘン取引が、徴税手段の選択肢であった。そして、アヘン取引の増加は、19世紀の広東系華僑の通商網の拡大とふかかわった。

まず、イギリス帝国主義が、第一次産品の生産と採掘(c)の担い手として強く期待した労働力は、現地人ではなく、中国人の移民労働者(ヒト)らであったことが重要であった。これは、オランダが、第一次産品生産の労働力を現地農民にふりむけた蘭印とは大きく異なる点であった。

英領海峡植民地で生産・採掘された第一次産品の種類も、蘭領のそれと大きく異なっていた。英領では、蘭領が関与したコーヒーや砂糖ではなく、東南アジア固有のスズ、ゴムなどの第一次産品を欧米に供給したからである。イギリスが関与したこれらの産品は、アメリカ大陸での産出が少なく、ほぼアジア植民地から供給された。アジアにおける植民地支

配をめぐってイギリスはオランダと異なり、アメリカ産品との競合のない第一次産品(錫とゴム)の生産に従事し、対アメリカ輸出に依存するようになる。

19世紀後半から、東南アジアに進出した中国人移民労働者の多くが、義勇会(広東省惠州)、海山会(広東省広州)といった広東系の秘密結社を通して供給されたように、広東語を共通の言語とする同郷性に裏付けられていた。広東系労働力の移動は、1842年に香港が割譲されて以降に拡大した。広東系華僑への厳しい移入制限を伴わなかったことは、東南アジアにおける彼らの人口増加と巨大な消費市場を実現させた。そして彼らの郷里(主に銀閩の華南)への送金(カネ)は、植民地通貨の割高な評価によって促進され、送金に「移民は有益」という情報をのせるならば、移民労働者の送り出しは一層刺激された。

中国人の移民労働者を中心とする巨大な消費市場の拡大は、東南アジアの経済に大きな影響をあたえた。もっとも重要な点は、この移民労働者の消費市場の拡大が、中継港建設をふくめた植民地経営のための政府収入の機会を提供したことであった。先述したように、自由貿易をかかげる英領植民地政府にとっては、その歳入を関税の引き上げに期待することはできなかった。それゆえ、政府はその歳入をこうした移民労働者のアヘン消費からの徴税請負に依存した。これは先述した18世紀のオランダが東南アジアで試みられた徴税収入方法であったが、イギリスがオランダと大きく異なるのは、徴税の対象を蘭印のように現地人農民ではなく、新たに移動してきて来た華僑移民労働者に求めたことであった。移民労働者が増加すれば、それにあわせて欧米向第一次産品生産がふえ、あわせてアヘン消費を通した財政収入(カネ)も増加する枠組みができあがった。アヘンをふくめた消費財(モノ)の供給増加も、消費習慣を熟知した華僑商人が担うことで、華僑通商網は拡大した。そして、19世紀の広東系華僑通商網の拡大が、消費財としてイギリス製品やインド産アヘンを選択し、これらをアジア市場にもちこめば、自由貿易体制そのものに実態をもたらすことになった。つまり自由貿易原則を行使しながら東漸したイギリス帝国主義は、広東系華僑の移民網(ヒト)、通商網(モノ)、送金網(カネ)、そして通信網(情報)の重なり合う関係的ネットワークの拡張を誘発した。あわせて香港やシンガポールなどの国際公財としての拠点形成は、華僑の移動に伴う抵抗感を低減させた。イギリス近代的帝国主義と華僑ネットワークの相互依存関係が成立したのであった。

さらに、ここで重要なのは、この広東系華僑通商網が日本との通商関係と深く関連しはじめたことである。そして、これらの華僑商人にとって取引先の選択に強い影響を与えたのが、植民地における通貨政策(b)と近代日本のそれとの差異の存在であった。

ヨーロッパ本国はアジア植民地の通貨を高めに修正し、固定する傾向があった。植民地の通貨を強くすることは、ヨーロッパ本国の工業製品の対植民地輸出を促す側面もあったが、さらに重要な経済的利益としては過去の投資から期待される利子、配当、年金などの植民地からの毎年の送金を円滑化することにその目的があった。英領インドでは軍事費負担でさえも「本国費」(ホーム・チャージ)として、本国への毎年の送金が義務づけられた。基礎通貨ポンドへの割高な設定を余儀なくされるアジア植民地と、自国通貨のポンドへの切り下げを選択しうる日本との間には、基礎通貨(ポンド)をめぐる通貨レート水準のギャップが生じた。こうしたギャップは日本からアジア植民地への輸出を促進させた。そして、この通貨政策の差異が顕著であったのが1890年代であり、この時期に華僑商人は対日本取引を活性化させた。つまり、ヨーロッパの近代帝国主義の東漸は、広東系を中心に通商ネットワークを伸張させ、近代日本にも市場秩序を提供した。

三輪宗弘(九州大学教授/日本経済史)

米国国立公文書館Ⅱに所蔵されている RG131 (接收文書) は大きく分けて 3 つの資料群から成り立っている。

- ①日本 (商社と銀行)、ドイツ、イタリア企業の在米支店の接收文書
- ②司法省戦時経済局 (Department of the Justice, Economic Warfare Section) の調査資料 (日独伊企業、日独伊と取引・資本関係のあった米国企業、日独伊占領地域の経済調査)
- ③第一次世界大戦時接收資料(主にドイツ)

RG131 の司法省戦時経済局調査関係資料の Records of the Japanese Research Project(entry 341)の 24 箱に手書きの草案や英訳を行うだけの価値があるとされた資料が残されている。司法省戦時経済局は、押収した日本の商社のニューヨーク支店 (三井物産、三菱商事、大倉商事、浅野物産、安宅産業) の資料を徹底的に分析し、日本の企業がどのような機械・装置を購入したのか、機械を据付けた工場の所在地はどこなのか、一点一点調べ上げた。機械や石油に特化していた大倉商事、浅野物産は資料がなくなるほど調べ上げられたようである。大倉と浅野の資料は戦時経済局の作成した調査レポートによって在米支店の活動および日米取引の実態を把握するしかないのが現状であるが、かなり研究がすすみそうである。

日本の基幹産業・軍需工場の設備が丸裸であり、日本への戦略爆撃ターゲット選定に有用なレポートになったであろう。例えば航空機燃料を精製する石油プラント関係の機械 (購入先、商社、納入先) に関しては、航空機ガソリンや四エチル鉛の製造企業約 50 社の機械・装置の導入や契約内容などに関しては以下の手書きのレポートが残されている。

- ①H. Glucks, Draft of Petroleum Report
- ②Fred S. Auty, Report on Synthetic Oil and Gasoline Industry Japan (1943 年 8 月 8 日作成)

陸軍造兵廠・海軍工廠 (横須賀、呉、舞鶴、航空本部、艦政本部など) はじめ日立金属、中島飛行機などの個別企業ごとに、機械の購入元 (メーカー)、販売商社名の詳細な調査記録が残っている。商社別の調査記録もある。例えば浅野物産、大倉商事、三井物産、三菱商事の資料から人造石油 (フィッシャー法、オイルシェール) に関する情報を収集したり、交通網を破壊する資料として鉄橋や港湾、高速道路などの情報収集するなど手抜かりはなかった。機械据付に派遣された米国企業の技師のインタビューや日本に滞在した宣教師からの

事情を聴取して作成されたレポートもある。

爆撃目標に選定された日本企業に関しては、9 冊からなる "Air target intelligence, Japanese War: target analysis by areas" が米国議会図書館の Geography & Map Reading Room に所蔵されている。Index も 1 冊あり、日本本土だけでなく、満州、朝鮮、台湾、インドシナ、中国なども幅広く目配りされており、ターゲットとすべき目標 (企業、鉄橋) が網羅されている。幸いにも米国戦略爆撃調査団のマイクロフィルムに収められており、国立国会図書館憲政資料室で閲覧できる。「接收された商社資料が日本爆撃にどのように利用されたのか、米国が日本の戦争遂行能力を低下させるためにどの企業を爆撃する必要があると考えていたのか」という問題を跡付けることで、接收された商社資料は斬新な視点・切り口を日本経済史研究や軍事史研究に照らしそうである。

米国国立公文書館Ⅱで、司法省 (Department of the Justice) の資料を探したところ RG60 の Central Correspondence の中に Entry 230: Records of the Economic Warfare Section 関連資料があり、戦時中の日本の戦争遂行能力に関する包括的な研究が行なわれ、プラスチック、軽金属、人造石油、化学産業、セメントなどの報告書が収められている。戦争末期になると、ドイツ、日本の賠償能力に関するレポートも作成されたようである。作成されたレポートは左記に配付された。

- ① BEW (British Economic Warfare)
- ② OSS (Office of Strategic Service)
- ③ MIS (Military Intelligence Service)
- ④ A-2—Far East Section(後の G-2)

さて、米国戦略爆撃調査団 (The United State Strategic Bombing Survey) 報告書マイクロフィルムが国立国会図書館憲政資料室で閲覧可能であるが、その中に、戦時中の司法省戦時経済局が作成したレポートが収められている。Entry 46: Security-Classified Intelligence Library, 1932-1947 の中の Section 6: Japanese Intelligence Library の中に戦時経済局が作成した 200 ものレポートがマイクロフィルムに所収されている。RG-65 (Entry 79 : P. File)および RG60 に点在する戦時経済局のレポートも寄せ集め、接收された商社資料分析から、どのような知見が得られるのか、現在調査中である。

一次資料との出会いと大学図書館いろいろ

宮下弘美(錦路公立大学准教授/日本経済史)

実証を必要とする研究者にとって、一次資料の存在と大学図書館とは、車の両輪のようなもので、この両者がそろってこそ研究がスタートできる。

私は今、北海道道東の中核都市、釧路市にある経済学部の単科大学、釧路公立大学に勤務して12年目になる。学生定員が1学年300名(経済学科200名、経営学科100名)の大学である。12年前のわたしは、教授、助教授、講師とつらなる40名ほどの教員の末席に名前をのせていただいた。あれから、定年を迎えた教授は釧路市を去り、あるいは割愛によって他大学へ移動となった教員のあとには、いずれも多くの場合30代、あるいは20代の若手研究者が着任し、私は年功序列でいえば、いつのまにかナンバー2准教授の身となって数年経ってしまった。

私が研究者を志したのはいつの頃だったのだろうか。学部、大学院と転々とした私はいくつかの大学図書館を利用してきた。学部生のときの専門ゼミでは、資本論、金融資本論といった古典と、最新の専門書を勉強した。3、4年生合同のゼミだったため、夕方までは古典を、そのあと協働食堂で皆で夕食兼休憩をとってから、ゼミの第2部がはじまり、さらにそのあとはコーヒーなど飲みながらトランプのナポレオンなどをしたものである。

1年生の頃の私はまだ、有斐閣の「ひ」が読めずに、当時4年生の女性の先輩から「あなた、経済学を勉強しようとしているのにその字も読めないの？」とあきれられたこともあった。彼女はイギリス銀行史か金融史を専攻していて、大学院進学をめざしていたが、その頃の北大の門戸は、外部の者にはまだまだとりわけ厳しかった。やがて、私は、研究生として大学に残り、指導教授の著作のお手伝いすることになった。忘れもしない大蔵省の銀行局年報などである。私が主に横浜正金銀行の為替の「向け」「受け」について作表し、同期のKさんが海關統計を担当した。春休みの時期だったが、毎日一次資料と首っ引きで、集計用紙と電卓を使った手作業での作表であった。数字をまちがえてはとんでもないことになるという責任感から、念には念を入れて計算していった。小島仁『日本の金本位制時代』(日本経済評論社、1981年)である。円以下銭厘までを意識して作表を担当した身では、数字のひとつひとつが愛おしくて愛着があるのに、実際に小島先生が完成された表では、千円単位に簡潔に作表されることが多かった。ひとつひとつの作業は地味でも、まとまったものになったとき、これまで明確でなかった事柄が明らかになるという実証のおもしろさに惹きつけられてしまった。あの頃、小島先生は地方都市で研究する困難さについて著書のあとがきに書かれている。

他大学の大学院マスターコースに入学したとき、まずはじめにしなければならなかったのが、修士課程のテーマを決めること、資料探しだった。私はなにか日本と対外関係をめぐる研究を継続したかったのだが、この頃すでに修士論文には一次資料がなければ論文として認められないような気運があり、たった2年で何が書けるのか苦しい思いをしていた。そんなある日、大学図書館、開発研究所の書庫を巡り歩いていたとき、1本の自家製マイクロフィルムに目がとまった。すでに雄松堂からは、営業報告書集成』

として、主要な会社資料がマイクロフィルムとして公開、市販されていたのだが、北海道炭鉱汽船株式会社の方は1905(明治38)年度からしか収録されていなかったのである。

私が手にしたマイクロフィルムには、いろんな北炭資料がごちゃごちゃと収められており、その中に忽然と「実際報告」の名で、開業以来の営業報告書が姿をあらわしたのであった。数年前にどなたかが北海道開拓記念館に所蔵されていた北炭資料の中から、めばしいものをマイクロ化してくれていたものであり、もしあのとき、あのマイクロフィルムを見る機会がなかったら、こんなに早くにテーマには出会えなかったと思う(現在は日本経済評論社から『明治期私鉄営業報告書集成』として刊行中)。当時、故田中修先生が官営時代の北炭論文を執筆中だったこともあり、私は迷わず、北炭がこれまで通説とされてきた、官営事業の払い下げをうけて設立したという視点よりも、日本を縦断する幹線鉄道を敷設したいとする明治政府との関係を重視しながら、同社の設立の経緯と創業期の経営の特徴についてまとめることができた。

西川博史先生の研究室には、いつも山ほど文献、資料が積み上げられており、私が作表をして中間報告にうかがうと、いつも、「表」は簡潔にということをとくとくと教えていただいた。自分がその「表」から何を伝えたいのか、その「表」を読んだ人が電卓をたいて読み取るようなものではなく、意味がないことである。確かに、実証研究とはいえ、「表」は、資料集そのものではないのだから、自分で集約して、さらに指数やパーセンテージなどを組み込むことによって、あくまで、「表」が自説をとるための「手段」としての役割を果たさなければならない。

博士課程に進学してからも、相変わらず北炭の営業報告書とは首っ引きであった。当時、限られた人しか目にすることがなかった資料を自由にあやつり、当時の日本の経済状況に思いを馳せていく。こんなに楽しく、こんなに幸せなことがほかに見つかるのだろうか。修士課程のとき、私は夜学のコースで、図書館司書の資格をとった。多くの先生方が、日本の図書館事情についてなげいていらした。図書館司書と行政司書が混同される、大学図書館の参考業務がないがしろにされている、アメリカでは図書館が暮らしに根付いている……と。図書館職員は決して本の番兵ではない。あれから20年が経つが、私が所属している大学図書館に専門の参考業務の司書はおかれていない。常勤3名、嘱託数名の小さな図書館である。

これだけ情報化が進むと、医学や工学、理学の分野であれば、常に最先端の情報を求めつつ、実験をおこないながら研究をすすめていけそうであるが、歴史研究の場合、古い資料は廃棄処分危険性にさらされながら、私たち研究者は、まだまだ一次資料を求めなければならぬ。あの大学図書館のあの司書のところに行けば、資料のことはなんでもわかる、という夢のようなことはまだまだ夢のようである。恩師長岡新吉先生が、「歴史研究は努力賞に値するよ」と言われた言葉をかみしめながら、ノロノロと歩いていくしかなさそうである。

地方鉄道史資料との出会い

関谷次博（中京学院大学講師／経営史）

私は2006年度より中京学院大学に専任講師として着任した。中京学院大学は岐阜県中津川市に位置する。中津川市は中央アルプスを望み、近世には、馬籠宿、妻籠宿、中津川宿といった中山道の宿場町が栄えるなど歴史的にも由緒ある土地柄である。この地に赴任して間もなく、地元商工会議所の仕事をつうじて、北恵那交通株式会社代表取締役社長の清水武氏と知り合った。そこで清水氏から、同社が所蔵する創業時からの資料があることを聞いた。

ここで北恵那交通の歴史について簡単に触れておきたい。北恵那交通の創立は1922（大正11）年までさかのぼる。北恵那鉄道株式会社として、現在のJR中央線中津川駅に隣接する位置に中津町駅を設け、下付知までの22.1kmの鉄道を敷設し運行を開始した。同社の鉄道営業は1978（昭和53）年に廃止されたが、その時に社名も現在の北恵那交通に改称され、以降バス路線を中心とした事業を営んでいる。同社の鉄道が開業したきっかけは、大同電力株式会社（現在の関西電力）の水力開発にともなう河川の使用に際して、この地の「川狩り」（河川を使つての木材の輸送）が不可能となったため、その代替輸送手段としての鉄道を敷設したことによる。したがって、北恵那鉄道の大株主は第二次大戦前をつうじて大同電力であり、同社の社長で「電力王」として知られる福沢桃介が、北恵那鉄道の創立から1928（昭和3）年まで社長をつとめた。

さて、清水氏にお会いして早々に北恵那交通を訪ねた。資料は北恵那交通の本社があるところから少し離れ、JR中津川駅裏手の同社所有の倉庫に所蔵してあった。その倉庫は旧鉄道営業時代のものらしく、木造立てで見ると古めかしい倉庫であった。しかしながら、倉庫の中をのぞくと、膨大な資料が倉庫一杯に眠っていた。経営史・経済史の研究者は総じて古文書の類を見ると心躍るのだが、それがほぼ手つかずのままの一次資料となると、そうしたものを見る機会はめったになく、遺跡を掘り当てたような感動と迫力を感じるのである。その資料は、清水氏のご厚意により寄贈していただいた。清水氏をはじめ、同社の方々のご協力により埃まみれになりながら、資料を運び出した。資料が所蔵してあった倉庫は中津川駅前の駐車場整備ということで2007年のゴールデンウィーク明けには取り壊しが決まっている。まさに間一髪のところであった。この資料はこの世から姿を消していたかもしれないのである。

ところで、数点の資料を見たなかで感じたことをここで簡単に述べておきたいと思う。この地方の人々は北恵那鉄道をどのような目で見ていたのか、どれほど必要としたの

か、どのような関わりをもったのか。近年の地方鉄道史研究では、明治期以降の地方での鉄道敷設にあたり、「地域社会」との関わりが一つのキーワードとなっている。地域振興という最大公約数的な到達目標に向けての地域住民らの分担関係（渡邊恵一『浅野セメントの物流史—近代日本の産業発展と輸送—』有斐閣、2005年）、地方政治家の敷設誘致活動（松下孝昭『鉄道建設と地方政治』日本経済評論社、2005年）、が指摘されるほか、経済史の枠にとらわれず、株主となった地域住民らは「村ぐるみの半強制的な出資割り当て」にあった（青木栄一編『日本の地方民鉄と地域社会』古今書院、2006年）といったユニークな捉え方もされている。それでは、いまの地方鉄道（しばしばローカル線と称される。）を「地域社会」との関わりの中で捉えるとすれば果たしてどうなるだろうか。例えば、第三セクター鉄道の経営は多くが危機的状況にあるなか、経営者や一部の支援者がいくら存続を訴えても、地域住民がそれを利用したいと思わなければ存続は難しいと言わざるを得ない。やはり「地域社会」といかに調和するかが鍵であるように思われる。鉄道と「地域社会」の関わりについては、資料をもとに丹念な分析を積み重ね、解明していくことは歴史研究をおこなっているものの使命であろう。

こうしていま私は、もっぱら北恵那鉄道の資料をつかった地方鉄道史の研究、ならびに徐々にではあるが同資料整理をすすめている。当然のことながら、この資料に巡り会うまでは、北恵那鉄道の存在も知らなければ、同社の歴史を知る由もなかった。そう考えるとこのたびは大変に貴重な資料に巡り会えた。ところで、最近、親しくおつきあいをさせていただいている先輩から、「関谷君は運が良い」という言葉を投げかけられた。たしかに、今回の資料との巡り合わせは偶然に偶然が重なったかのようである。地元商工会議所の仕事を引き受けなければ清水氏と知り合うこともなかったし、そもそもこの地に赴任してこなければ北恵那鉄道の存在すら知らなかったわけである。当初から自分の思い描いていた通りに事が運ぶわけではないことは世の常であるが、思い通りにいかなかったところにこそ新たな発見、思いもよらない出会いがあるものである。ここにたどり着くまでには自分かなりの回り道をしてきた。そのときには苛立ちさえ覚えたが、実は研究の近道であったのかもしれない。最短距離で研究成果を出すことのできる研究者はすばらしく、ときには羨ましく思う一方で、「急がば回れ」という言葉があるが、経営史・経済史はまさに「急がば回れ」の研究であるような気がする。私の座右の銘として、これからも資料の偶然の巡り合わせを求めて地道な研究活動に励みたいと思う。

船舶保存の現状と課題

中川 洋(千葉科学大学非常勤講師/歴史学)

日本文化の潮流には、改めて述べるまでもなく、海とのかわかりが色濃く反映されている。古代から現代の日常生活にいたるまで、海運はわれわれの生活の基盤を支えてきた。しかし、日本人のなかに海や船を大切にする気持ちが培われてきているとは、とても言い難い。四方を海に囲まれた世界屈指の海運国、造船国であるにもかかわらず、船への関心はこのほか低いと言わざるを得ない。日本には、ヨーロッパ諸国には必ずある国立海事博物館(National maritime museum)もないし、海事関連の産業遺産や伝統的な造船技術を継承するための基金も施設も見あたらない。

船舶の保存について、これまで計画的系統的になされてきたことはなく、ほとんどの船が何の躊躇もなくスクラップにされ、また海外に売船されていった。このことは、同じ海事遺産でも所有・管理者がひとつ(海上保安庁)である灯台が相当数大事に保存されてきていることと対照的である。

現在、意図して保存展示されている船舶が全国におよそ50隻あるが、端的に言ってその数は減る一方である。別府港に係留保存され公開されていた英国豪華客船「オリアナ」、鳥羽の移民船「ぶらじる丸」や、稲毛海岸に陸揚げされていた先の大戦唯一の生き残り、元海防艦「こじま」などは、歴史的にも貴重な船だったが惜しまれつつスクラップになってしまった。ここ数年の間だけでも、長崎でホテル「ヴィクトリア」として営業していた元青函連絡船「大雪丸」が営業を取りやめ、西伊豆のフローティングホテル「スカンジナビア」こと「ステラ・ポラリス」にいたっては、海外に売船され曳航中に沈没するという悲しい最期を目のあたりにすることになった。昨年暮れ、横浜山下公園の「氷川丸」営業休止の報道には「氷川丸よ、お前もか」と慄然としたものである。

船舶、とくに大型の船舶は保存公開のための改造工事とメンテナンスに莫大な費用がかかるため、その維持が非常に困難になっている。従って「生き残っている」保存船の大半は沿岸漁業の漁船、各種実験船、巡視艇など極めて小さなものであり、1,000トンを超えるものは数えるほどしかない。横須賀の記念艦「三笠」、先述の「氷川丸」が10,000トン超で突出しているほかは、青函連絡船(函館の「摩周丸」、青森の「八甲田丸」、東京・船の科学館の「羊蹄丸」)、南極観測船(船の科学館の「宗谷」、名古屋港の「ふじ」、練習帆船(東京海洋大の重要文化財「明治丸」、横浜の「日本丸」、富山新港の「海王丸」)くらいのものである。これらはいずれも、比較的財政

基盤のしっかりした組織によって、なんとか維持されてきたのである。

保存されている船種にも偏りがある。実数が一番多い漁船は、捕鯨関係の博物館に捕鯨船(キャッチャーボート)が、また水産高校の実習船が保存されている程度で、特殊な事情で残った「第五福竜丸」を筆頭とする木造小型船以外に保存例はきわめて少ない。また、艦船の保存例も少なく、旧軍時代の艦艇は「三笠」を除いて、いわゆる特攻兵器である「咬龍」「甲標的」などが残るだけである。

船舶の保存公開にあたっては、消防法や建築基準法など陸上施設の法律が適用されるため、大改造を余儀なくされる。また、洋上に浮かべておく波浪の影響で船体が傷むために、陸揚げして船体下部を埋めたり取り除いたりする例も多い。そこまでして、観客がたくさん押し寄せるかということ、公開当初はそこそこ集まるものの、次第に忘れ去られてしまう。あの「氷川丸」でさえ、1970年代には年間50万人の観覧者があったのに、昨年度は15万人にまで落ち込んでいるのだ。

保存船を、文化財、産業遺産としてきちんと位置づけて、学校教育・生涯教育などにも活用し、あわせて関係法令の整備をすすめる必要がある。第一にできるだけオリジナルの姿のまま、保存公開ができるようにするべきである。スクリーを外さなくてはだめ、などという現在の規定は時代錯誤の産物である。第二には、一定の基準に沿った保存制度を設けるべきである。鉄道の世界では、かつて国鉄時代に「鉄道記念物」の制度を作って、国鉄私鉄のものを問わず「鉄道記念物」「準鉄道記念物」を定めた。これには、車両や鉄道施設ばかりでなく、エドモンドモレルの墓であるとか、野辺地の鉄道防雪原林であるとかいったものも指定されているし、本線を走っている機関車でも指定を受けている。このような「海事遺産(記念物)」制度を早急に確立する必要がある。第三には(もっとも大事なのだが)、安定的な財源の確保である。船の保存、メンテナンス費用は、見学料などでペイできるようなものではなく、公的または半公的の財政支援が望まれる。英国などでは、「保存船宝くじ」などが発売されているが、わが国でもこうした取り組みが必要であろう。また、海運会社や造船会社を主な出資者とする保存船ファンドがあっても良いだろう。

百聞は一見にしかず。次の世代に、日本の海の文化と思想、船の文化と技術を目に見える形で遺し伝えていくことは、我々の責務であると考えている。

フィルムセンターにおける映画資料の収集と公開

入江良郎（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）

東京国立近代美術館フィルムセンターは、我が国では唯一の《国立レベル》の映画保存機関である（東京国立近代美術館は現在、独立行政法人国立美術館に属する5つの美術館の一つ）。現在の所蔵フィルムは約46,000本。収集の対象は劇映画にとどまらず、文化・記録映画やニュース映画、産業PR映画までを広く網羅するものであり、また上映用のプリントはもちろん、民間の映画会社にとって大きな負担となりつつあるネガなど原版類の保存管理も重要な位置を占めている。フィルムセンターは美術館に所属しているが、こうした網羅的収集のポリシーは美術館の世界における選択的な収集とは対照的である。我が国の映画史は散逸の歴史でもあり、例えば、無声映画の残存率はわずか数%と考えられている。映画一つの芸術とみなすことはもちろん、それにとどまらずひろく歴史資料として文化財として恒久的な保存をはかることが大きな課題となっているのである。

ところで、この映画フィルムの保存と並んでフィルムセンターの業務の根幹をなしているのが、いわゆる映画関連資料の収集である。コレクションは主なものだけでも映画文献約30,000冊、シナリオ約30,000点、ポスター約43,000点、スチル写真約410,000点、技術資料450点にのぼる。美術館が美術品を、工芸館が工芸品を一義的な収集対象としているように、フィルムセンターは映画フィルムを一義的な収集対象としているが、世界のフィルム・アーカイブと同様、フィルムセンターは「映画に関わるフィルム以外のあらゆる資料」を収集することを標榜している。しばしば「ノンフィルム・マテリアル」とも総称されるこれらの雑多で膨大な資料は、数量だけをとってもこれを副次的なコレクションと呼ぶにはあまりにも大きな存在感を主張するものであり、他の美術館などにおける場合とはかなり趣を異にするものであるが、こうした現象は映画そのもののユニークな性質にも起因している。

すなわちそれは集団による創作物であることから、シナリオ、絵コンテ、美術デザインなど、一本の映画ができるまでの各プロセス、各パートで大変数の資料を産み落とすことになる。また映画づくりは産業であり個々の作品は商品でもあることから、完成した映画の周囲でもポスターやチラシ、スチル写真など、実に多種多様な宣伝素材が産み落とされる。さらに、映画は近代のテクノロジーに依存するメディアであることから、撮影、現像、焼付、映写といった工程のそれぞれに関わる技術資料が極めて重要な意味を担うことになる。これらの資料は、あるときは永久に失われたフィルムの代用にもなり、またあるときはフィルムを取り巻く歴史的コンテクストを伝えてくれるであろう。

もっとも、美術館や博物館、図書館といった他の文化施設と較べたときに、映画の保存に関わる機関の規模、数は限られたものといわざるを得ない。しかも、映画の歴史そのものが（シネマトグラフの公開から数えて）既に111年目を迎えた現在、

映画人や収集家の世界が相次いでいること、映画産業の衰退やデジタル技術の台頭に伴うアナログ技術の衰退も資料の散逸に拍車をかけるかたちとなっている。《映画文化》の保存はいま再び重要な節目を迎えているというべきであろう。

なお、収集されたコレクションの全てが公開を前提としていることはいうまでもない。フィルムセンターでは図書室における図書閲覧サービスや展示室における展覧会の実施といった来館者サービスのほか、博物館等の展示施設に対するコレクションの貸与、出版や放送に対する図版提供などを行ってきたが、ようやく平成12年度には現在の情報資料室が独立したセクションとして設置されたこともあり、従来にはなかった新たな資料公開の試みも含め、枠組みの拡大に向けて新たな一歩を踏み出したところである。今回はそのなかからひとつだけ、図書室の蔵書を対象に昨年度から始まった資料複製の実例を紹介していきたい。

国内で刊行された映画に関する図書の70~80%を所蔵するフィルムセンターの図書室は、これまでも様々な複製図書の刊行に原本提供を行ってきた。日本最古の映画雑誌といわれる「活動写真界」など明治期の映画文献から「キネマ・レコード」、「映画検閲時報」などの基礎文献を挙げるができるが、さらに今度はフィルムセンターが企画の中心となり最も重要なコレクションを広く公開していこうというものであり、その第一弾が「キネマ旬報」の対極をなした戦前の業界通信史「国際映画新聞」全282号の複製、第二弾となったのが先ごろ刊行された「戦時下映画資料 映画年鑑 昭和18・19・20年」である。

いわゆる「映画年鑑」の刊行は大正14年以降の歴史を持ち、古くは朝日新聞社、国際映画通信社、大同社などを経て現在は時事通信社から刊行が続けられている。記録を中心にした映画に関わる基礎文献中の基礎文献であるが、戦中は悪化する戦況の中で「昭和十八年版」（17年度中の情報、記録を収録）を最後に刊行が中断。かつて日本図書センターが行った「映画年鑑」の複製でも、「18年版」のあと「25年版」までの6年分はプラントとなっている。

この間の欠落を埋める資料となるのが今回の「映画年鑑 昭和18・19・20年」であるが、その底本となった資料は当時映画年鑑の編纂者であった津田時雄のもとに保管されていた直筆原稿「昭和十八年・十九年・二十年 映画年鑑」で、昭和18年から20年の占領期まで3年間にわたる映画界の動きが克明に書き記されている。ちなみにこの間、映画年鑑の編集は映画雑誌統制の影響を受けて日本映画雑誌協会から社団法人日本映画協会、社団法人映画公社へと引き継がれている。同資料はフィルムライブラリー（フィルムセンターの前身）が設置された1952年に寄贈されたものであるが、終戦後までこれらの原稿を散逸から守り、刊行の機会をうかがいつつ密かに記録の更新を続けていたという編纂者の執念は、時代の趨勢と真つ向から対立するものであったであろう。先に触れた映画雑誌の統合により（昭和16年に第一次統合、18年に第二次統合）映画雑誌のタイトルは減少を続け、昭和20年の春には完全に廃刊に追い込まれてしまうのであるから、手書きの映画年鑑が後世に及ぼす史料価値は絶大である。

大学図書館員が教える「情報を紡ぎ出す力」

—私の実践する情報リテラシー教育—

井上真琴(同志社大学図書館員/図書館学)

2004年、図書館利用の啓蒙を意図して『図書館に訊け!』(ちくま新書)を上梓した。資料や情報を“点”でも“線”でもなく、“面”として立ち上がらせるためには図書館をどう使えばよいのか。その考え方を平易に説いた。斯界からは予期せぬ反響があり、それ以来、毎年各地から多くの講演依頼をいただいている。また勤務する同志社大学では、社会学部嘱託講師として「学術情報利用教育論」なる専門科目を担当することにもなった。この講義では、大学図書館機能の理解を前提に、学術情報の性格、その生産から流通、情報の探索方法・評価方法を教えている。

講義に参加する学生を前にして痛感するのは、“情報が読めない”ということである。インターネットの断片情報を“糊と鉄”で切り貼りすることに慣れ、書物や論文など著作物を通読する機会が少い。このため、せっかくなしした情報のつながりや関係性を見通せず、新たな情報を紡ぎ出す方法がない。

体系的な知識を読み込んでいなければ、情報を咀嚼して探求する主題世界のコンテクストに位置づけることは難しい。要するに情報を知識へと変換させる思考の道筋を知らず、得た情報は情報のまま存む。知識の集積を担ってきた大学図書館が、彼(彼女)らにとっては単なる紙の断片情報の倉庫に過ぎないというのも、むべなることである。

こうした状況下、大学図書館が学生の学習支援にどう関わるかという議論が盛んである。なかでも声高に叫ばれているのは、情報リテラシー教育への図書館の参画であろう。確かにこれは大切である。

基礎演習の時間に図書館員が外向き、スポットで情報探索法を説明するもの。正課科目として情報リテラシー科目を設置し、図書館員が教えて単位を与えるもの。あるいは課外で図書館が探索講習会を開催するもの。その実施形態は様々である。しかし、実践の多くは「こんなよい事典があります」「このデータベースが便利です」といった情報源の紹介か、その単発な操作法におわりがちである。

私が担当する「学術情報利用教育論」は、学術情報の見つけ方と取り扱い方を中心として、情報リテラシー能力の体得を講義の目標に含む。

ここで実例中継をしてみよう。学生が「ほお〜」と目を輝かせるのは、例えば、初歩的な百科事典の活用法である。

よく百科事典は索引から引け、と言われる。そうしないと見出し項目になっていない事柄が、他の見出し項目の中で解説されていて見落としてしまう。なるほどその通りだ。しかしもう一歩突っ込み、自分がいまいちろうとする事項が、世の森羅万象の中で他のどの事柄と関係をもっているのか、それを発見する道具として索引を使ってみよう。

近頃、定評のある百科事典は、契約データベースとしてインターネットで検索できる。私の講義では、小学館の『日本大百科全書』を含むデータベース・ジャパンナレッジを検索実習に使っている。

今年度講義に使った事例のひとつは、樋口一葉の調査である。百科事典データベースを検索させると、多くの受講生は「見出し項目」で樋口一葉を検索し、伝記的概要を知ることご満悦であ

る。しかし、これでは学術情報利用の初歩には至っていない。ここで私は言う。「見出し項目だけを対象にするのではなく、全文検索で検索してみるんだ。百科事典の全記述のなかで、“樋口一葉”というキーワードが現れる見出し項目を洗い出せ。そうすると違ったものが見えてくる」と、データベースの『日本大百科全書』ではかなりの見出し項目に“樋口一葉”が含まれる。

《井原西鶴》《貨幣》《新派劇》《コミックス》《手紙》《同人雑誌》……。別巻索引を引くのと同じことだ。

これらの見出し項目の解説記述に、“樋口一葉”というキーワードが存在するのを、全文検索は簡単に示してくれる。ここに至って学生をこぼく。「百科事典の《貨幣》の項目に何で樋口一葉がヒットすると思う? 予測がつかうぞ、えっ!」。しばらくして、「五千円札と関係があるかも」と返答がある。

「じゃあ、井原西鶴はどうなんだ!」と別の学生に凄む。「ひょっとして、井原西鶴の文学が樋口一葉に影響しているなんてことありますか……」と自信なさげに答える。《井原西鶴》の項をクリックしてデータベース画面を確認すると、してやっつたり、「西鶴の文学は近代の作家たちにもさまざまな影響を与え続ける。

(中略) 樋口一葉(ひぐいちちよう)も『大つごもり』(1894)、『たけくらべ』(1895)に西鶴調を生かした」とある。

樋口一葉をテーマにレポートを書けといわれれば、「一葉における西鶴の影響」という切り口で、国文学系雑誌記事で肉付けすれば4000字くらいの文章は書けるのではないかと。また「手紙」の項は、おそらくは一葉が手紙の名手であったとするのではないかと。だとすれば「手紙の名手としての一葉」という視点でも文章が書ける。「俺ら、新聞社から樋口一葉について毎月エッセイを連載してみないか誘われた場合、この百科事典の全文検索結果を確認しただけで引受ける。第1回は「コミックに描かれた一葉」、第2回は「新派劇と一葉」、簡単だろう」と豪語しながら学生を鼓舞する。百科事典には知らないことを調べるだけではなくて、発想する道具として使わなければ意味がない、とさらに傲を飛ばす。そのうえで、編集方法や世界観が異なる他の事典類を複数比較させ、索引づけの違いなども認識させる。これらは図書館がなければできない作業だ。こうした実習を骨身にしみこませるように半年行う。これだけで、学生の情報力に広がりがある。だが情報リテラシー能力を身につける旅は、長く遠い。講義では情報世界へ出立する際の草鞋を履かせる程度の指導に終わる。

情報世界を泳ぎ回る訓練に、大学図書館は重要な役割を果たす。そしてそれが最も重要な学習支援であることを、学生を教えながら痛感する。いま新年度に向けて教材の洗い出しを始めているが、講義の成果はミネルヴ書房から単行本で問う予定である。関心のある向きはご期待いただきたい。

■編集後記 ■学術ミニ情報誌「PS JOURNAL」第10号をお届け致します。

◆第10号です。些か原稿集めに苦勞しました。その甲斐あってか人文・社会科学分野の研究者の刺激的な小論が揃ったと思います。また、今回のように史・資料の収集・展示・公開に携わる専門家にも登場してもらってさらに議論の場を広げていきたいと思つています。この号は一部中川先生とのコラボレーションで出来上がりました。この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。ご一読下さい。(K)

PS journal 2007 第10号 2007年5月20日発行

●発行・編集:日本図書センターP&S PS journal 刊行委員会

PS journal 編集部 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-10-6

TEL:03-5940-5474 FAX:03-5940-5476 e-mail:ns2@nihonsho.co.jp

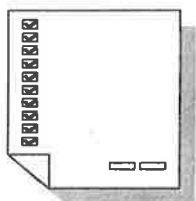
©記事の無断複製、転載を禁じます。

●学術 mini 情報誌・・・フットワークで集めた学術先端情報●

PS

JOURNAL

2006 第9号



PS
JOURNAL

特集：研究者の現在Ⅷ 人文・社会科学の、パ・スペクティブ

- 復古政府と身分問題 京都大学名誉教授 佐々木 克
- 最初の現地調査－「掃苔録」第1冊から－
佛教大学教授 原田 敬一
- 総合科学と歴史学 広島大学助教授 布川 弘
- 宮沢賢治の造語「イーハトヴ」について
福島大学教授 九頭見 和夫
- 作品の力がものを言う記号－中国における谷川俊太郎－
東京大学外国人研究員 田 原
- 「自立」途上にある韓国の植民地期経済史研究
江陵大学講師 呂寅満
- 資本市場研究について 東京大学教授 伊藤 正直

復古政府と身分問題

佐々木 克(京都大学名誉教授/日本近代史)

王政復古の政変当日(慶応3年12月9日)禁裏御所の小御所で3回会議が行われた。前夜から徹夜で続けられた朝廷の会議(朝議)と、それが終わってからなされた政変による新政府樹立のための会議(新政府成立会議)、そして最初の新政府会議(三職会議)である。新政府の二回の会議には、大久保利通(薩摩藩士)、後藤象二郎(土佐藩士)、中根雪江(福井藩士)らの無職(参与就任は12日)かつ無位無官の者も出席し、親王や公家そして彼等の主人(諸侯)の前で、激しく議論し堂々と主張していた。

無位無官の武家が小御所の座敷にあがって、国家の最高会議に出席。これは朝廷・禁裏御所の歴史の上で希有的なことであった。生麦事件の後、攘夷を決行したヒーローとして京都市民に迎えられた島津久光であったが、報告のために参内した久光が通されたのは、長橋の局の執務室の外の廊下で、無位無官であったがゆえに、座敷にも上がることが許されなかったのである。このことからしても新政府の小御所会議は、まさに革命会議だった。しかしこのような会議形態は続かなかった。12月14日、嘉彰親王が、政府中枢(総裁・議定・参与の三職)の間にも尊卑上下の別があるべきで、身分の低い者(具体的には藩士の参与)の上位者にたいする礼を欠いた言動が目につくといい、かつ無位無官の者が禁裏御所内に自由に入出入りするのを制限するべきであると建議し、これに基いて翌15日、公家の参与を上、藩士の参与を下とする区別がなされ、かつ無位無官の下の参与の詰所を禁裏御所の外の一乗院里坊としたのである。

そして身分差別はさらに進められ、12月23日の政府会議(小御所で行われる)からは、下の参与の出席が除外された。除外を提言したのが議定松平春嶽と同山内容堂だと大久保利通が述べている。春嶽と容堂にとっては大久保が目障りな存在だったことは確かだろうが、それに加えて家来である藩士身分の者と同席して議論することを嫌っていたのである。朝廷の伝統と武家の伝統のなかで、下の参与にたいする差別が政府内で進行していた。

ところがこれにくわえてもう一つの陰湿な差別があった。岩倉が、公家のなかには武家を「奴僕」視する者があると反省したように、武家は一段下の身分の者とするのが公家の伝統的認識の世界であった。御所内に勤仕する公家が、太政官の役人(武家)を「仇讐」のごとくに見ていると大久保がいったのは、このような背景があったのであり、春嶽や容堂も御所のなかでは差別の視線にさらされていたのである。

誕生したばかりの王政復古新政府は、慶喜の処分(辞官・

納地)問題で対立していただけではなく、伝統のしがらみのなかでギクシャクし、きわめて鬱屈気な悪い状態になっていたのだ。正月が明けた1月13日に、政府(太政官代=臨時の太政官)を禁裏御所から九条邸に移し、同時に参与役所(詰所)も九条邸に移したのは、以上のような状態を改めることを意図した政府改革の一つであったと思う。そして21日には、執務規則が定められ、政府の最高会議には大久保らの下の参与も出席することになった。

この間、政府は17日に三職七科の制を設置して組織を整え、政府役人の大幅な増員もなされた。九条邸は公家の中でも最も広い邸宅であるが、手狭になったに違いない。それが主な理由であろうが1月27日に、政府(太政官代)が二条城に移された。政府役人の増加分は、大多数が無位無官の武家出身の者であったから、なにかとうるさい公家の家よりも、京都における武家の本拠であった二条城に政府を移したほうが、彼等にとっても望ましいものであったことだろう。こうして新政府は1月下旬になって、ようやくノーマルな実体をともなった政府として機能し始めたのである。

ところが閏4月21日に、政府(太政官代)は再び禁裏御所に移され、無位無官の者が出席する会議も小御所で行われるようになった。この大変革にはもちろんその前提があった。3月23日から閏4月7日まで天皇が大坂に行幸したが、その行幸先の行在所(本願寺津村別院)で、天皇は大久保利通、木戸孝允、後藤象二郎を玉座の前に呼んで、時局や海外事情などについて下問し意見を述べさせた。大久保は藩士が天皇と対面したのは初めての事と日記に記したが、無位無官の者が公の席で、天皇と対面して直接発言した、おそらく史上最初の例であろう。行幸先だからできたことであるが、天皇・朝廷・公家の伝統をくつがえす空前の大変革がなされていたのである。

この実事の重みの前では、頑迷な公家や諸侯の差別意見も力を失わざるを得なかった。とはいえ、彼等の差別観・差別認識が一挙に消え去ったわけではない。根深く様々な局面で、問題の芽がでてくる。明治新政府は四民平等をスローガンとする前に、政府上層部における<平等>問題に直面していたのである。たとえば明治2年6月17日に、公卿諸侯の称を廃止して、彼等を華族と称すると命じた(行政官達)のは、公家と武家に身分意識の解消を求めたものであったように思う。

明治維新の激動する政治局面で、はからずも公家と武家は、一緒に考え行動しなければならぬ場に投げ込まれた。その時、それぞれの伝統にもとづいた思考と行動様式が、おもわぬ摩擦を生み出していたのである。これまでほとんど触れられることのなかったこの問題について、これから少し踏み込んで検討してみようと思っている。

最初の現地調査―「掃苔録」第1冊から―

原田敏一（佛敎大学文学部教授／日本近代史）

国内に現存する軍事遺跡を系統的に訪ね始めて、もう10年になる。「掃苔録」と名づけたフィールドノートの第1冊は1996年3月20日に、ある先生を見舞うため国立療養所近畿中央病院（大阪府堺市）を訪れた頁から始まっている。全国の国立病院は、戦前の陸軍病院・海軍病院・療養所を継承したところが多い。この病院も同じで、部隊駐屯地も連続していたので、病院の一角には「忠魂」碑が立っていた。輜重兵第四聯隊の帰還者で構成する「錦城輜友会」が1965年3月に建立したものである。輜重兵第四聯隊は、15年戦争下の秘匿名を中部第三十一部隊、中部第五十五部隊と言い、1934年3月22日に大阪市東区法門坂町から南河内郡金岡村に移転した、と碑裏に記してあった。この時、与謝野晶子が非戦詩を綴った堺市は「軍都」に変身したわけである。この時期、用地開発に余裕のあった大阪府南部一帯は、軍用地としての接收が続いていた。1940年には大阪陸軍幼年学校が再建されるが、1922年廃校まであった大阪市東区ではなく、南河内郡千代田村（現河内長野市千代田）に設置される。幼年学校は中学校相当施設であるが、英語は教えず、ドイツ語・フランス語・ロシア語を教えていた。仮想敵国に「米国」を入れていながら、実際はロシア（ソ連）などとの戦争を想定していたことが反映しているし、アメリカとの戦争に自信がなかったことを物語っている。

なおお見舞いした先生は手術も終え、無事退院され、2006年3月に定年退職を迎えられ、現在、堺市の短大の学長として活躍されている。

続けて「掃苔録」を見ると、お見舞いの翌日は北九州市、22日には熊本県立図書館の調査に出かけている。森嶋外の旧居など見ようと、小倉経由で向かったため、1914年竣工の旧門司駅（現在の門司港駅）という九州で最初に作られた鉄道駅を見学した。私鉄の九州鉄道が始発駅として設けたもので、1988年12月国の重要文化財指定を受けた。門司駅周辺には優雅な建物が現存している。1926年7月に起工し、翌1927年10月竣工した郵船ビルディング（日本郵船門司支店）は4階建てのコンクリートだった。施工は大林組。大阪に本拠を置く大林組は、鉄道などの公共事業や財閥系の事務所ビルなどを手がけ、大きく成長していったが、初代の大林大五郎は、人集めともめ事の処理のため、大阪の侠客から杯を貰っていた（拙稿「侠客の社会史―小林佐兵衛と大阪の近代」、佐々木克編『それぞれの明治維新―変革期の生き方』所収、吉川弘文館、2000年8月）。鉄道や港湾、さらに日清戦争や日露戦争など、大量の人手を必要とする土木業界は、侠客とのつきあひなしには運営できない。これまでの産業史に、もう一つの光を当ててみる必要がある。

大阪商船も門司港で営業している。日清戦争前の1891年門司営業所として開き、日清・日露戦争を経て、第一次世界大戦真っ最中の1917年支店に昇格した。この頃には一ヶ月に60隻の社船を扱っている。支店昇格時の1917年に建築された大阪商船支店ビルは、河合幾次の設計による木造二階建てだが、一部コンクリート造で、オレンジタイルの貼ってある八角塔を持つきれいな建物だった。発展した大阪商船は、港に専用埠頭を確保し、支店の一階は待合室として使用していた。二階の事務所部分は、現在海事資料室としてさまざまな営業活動を展示してい

る。大日本帝国のアジアとの連絡を示す資料室として重要である。ここには1911年、1924年、1934年の門司市街図が残されており、港湾の発展と市街地の拡張がよくわかる。1921年の大阪商船ポスターには「大阪商船株式会社定期航路一覧」があり、「大阪仁川線 毎週式回」「大阪清津線 毎週参回」「大阪大連線 毎週式回」「神戸基隆線 毎月四回」などと記されており、仁川・清津の朝鮮半島、租借地である大連などとの往来が最も盛んで、台湾との連絡密度の数倍になっていることがわかった。

同様の材料は、1917年の日本郵船ポスターからも得られた。これには「所有汽船数 101艘、此総噸数四十七万噸」とあり、平均五〇〇噸近い大型船の所有で他の汽船会社を凌駕していることを誇っていた。航路の説明では、「外国航路」として「欧州線二週一回」「大阪神戸上海線毎週一回」「大阪青島線毎月二回」「大阪天津線毎月二回」と、日本郵船でも中国との連絡輸送で大きな役割を果たしたことが明らかである。「神戸北支那線（冬期休航）毎六日一回」は、神戸―大連―牛莊―天津を結ぶ線で、大阪商船の大阪大連線に対抗する意図を持ち、また中国本部との連絡という国家的意味を持たされる線であった。「内国航路」としては、「神戸基隆線毎週一回」「横浜台湾線毎月四回」などがあつた。

他にも門司三井倶楽部のビルなど見るべきものは多いのだが、海事資料室の絵巻書展示を見ていると、老松公園の忠魂碑と、正蓮寺の軍馬塚、というのが見つかった。九州地方の軍隊が出帆する門司港とその周辺は当然調査しなければならない。早速赴くことにした。

『北九州市史』近代・現代（行政・社会編）によれば、動員された軍隊の集結地点は老松公園であった。老松公園には、「昭和七年十月十日建設」と台石（右側面）に刻まれた忠魂碑が確かにあつた。左側面のプレートにははずして、コンクリートで埋めてある。前にある石の鳥居は、「昭和十三年十二月」「奉獻 草野宗市」とある。忠魂碑の前には灯籠が二基あり、「昭和八年」と刻まれている。旗の掲揚台は「昭和九年紀元節建立」とある。台石の上にも灯籠が二基あるが、これは1965年の寄進。戦後は「忠魂碑」の上に「慰靈碑 門司区」というプレートを貼ってある。忠魂碑の再利用とすべきか、「忠魂」という名称を避け、中立的な名称を選択した門司市民の見識と言うべきか。いずれにしても、この公園からさまざまな戦争に兵士が出ていき、再び帰って来るのがだった。

門司区の正蓮寺に具場塚があり、1896年に建立された。軍馬塚として最も古いものと考えられる。日清戦争が終わり、1895年6月25日歩兵第六聯隊が御馳し、門司港に帰ってきたが、第二大隊本部と第四中隊が乗船していた門司丸が、門司港内で東洋丸と接触し沈没。その際軍馬57頭が船と運命を共にした。それを悼んだ第六聯隊の樋口匡直少佐が、後に追悼のため軍馬塚を建立した。正蓮寺には、満州事変後の1934年に建立された「日支事変殉難 軍馬之碑」もあり、こうした「美談」は、郷土史でも注目され、中山主膳『正蓮寺軍馬塚のはなし』（門司郷土会、1999.9）という出版物もある。さて、軍馬に対するこのような話を「美談」とのみ評価してよいのかどうか、もう少し材料が必要だ。

私の現地調査は、準備を充分してからというよりも不十分のまま出発して、現地で気が付いたり、教えられたり、ということになる。どうも「掃苔録」第一冊から見ると、この態度は当初からのものだったようだ。

布川 弘 (広島大学助教授/日本近現代史)

私が今所属している広島大学総合科学部は、30年余の歴史を経て、今年4月大学院総合科学研究科を発足させる。総合科学部は、設立当初から文理を融合した学際的・総合的な学問の樹立をめざしてきたが、総合科学研究科の新たな設立は、総合科学を具体的に樹立していくことを使命とし、その過程を研究と教育の両面に生かしていこうという大胆な試みである。私はこの大学院を設立する作業メンバーの末席を汚していたこともあり、総合科学というものへの思い入れを人一倍強く抱くことになった。私自身の性格が没主体的なこともあり、研究への志向が自分の所属する集団の環境に強く規定されたと言ったほうが正直かもしれない。

広島大学総合科学部に赴任して間もない頃から、周囲のスタッフに誘われる形で、広島県域を対象とした学際的な地域研究に関わってきた。私の同僚で日本史学を専門とする佐竹昭先生、地理学を専門とする浅野敏久先生らがリーダーとなり、宗教人類学、文学、群集生態学、環境地形学、砂防学など、文理を超えた多様なスタッフが参加している。私自身が非力なせいもあり、それらの多様なスタッフから実に興味深い意見を聞く機会が多くあったにも関わらず、自分なりに学際性を高めていく努力を怠ってきた。

しかし、一つの転機が訪れた。ちょうど総合科学研究科設立の作業が佳境に差し掛かった頃、神戸商工会議所から神戸に関わった著名人について原稿を書くようにという依頼が来た。以前にもそうした依頼があり、その折は、自分が以前研究したことのある山陽鉄道会社に関わって、中上川彦次郎を取り上げて拙文を書いた。しかし、今回はねた切れで困り果てた挙句、以前から一度読んでみたいと思っていた小説『細雪』を読んでみることにし、それにかこつけて谷崎潤一郎を取り上げることにした。

『細雪』は、新潮文庫で上中下三巻の大作である。太平洋戦争を間近に控えた昭和10年代、大阪の商家に生まれた三姉妹を中心に、神戸・阪神間を舞台として、人々の生活の有り様や文化、風土を見事に描いた名作である。新潮文庫の細江光氏の懇切な注解にも助けられ、私は史料では味わえないある時代の文化や風土の豊かさを実感できたのである。とりわけ、1938(昭和13)年7月の大水害の描写は、とても興味深いものであった。神戸の東部を中国の大河川のような幅でおおった水流、人家をおもちゃのように押し流し、巨岩を運んできた山津波。淡々とした描写の中に、自然の猛威が浮かび上がってくる。一方で、そうした大水害に向き合う人々の姿は何故か取り乱したところがない。水害をやり過ぐすと、何

食わぬ顔をして日常の風情を楽しむ。

神戸・阪神間に住む人々は、古来頻発する水害と付き合いながら歴史を積み上げてきた。それは、古代から物流の動脈として都市が発展してきた瀬戸内海地域に共通する特色でもある。私は『細雪』を読みながら、『新修神戸市史歴史編1 自然・考古』を紐解き、自然科学者の説明に瞠目した。山地の地質と傾斜、上昇気流のあり様、流れ出る天井川と扇状地の特質等々、恥ずかしながら平素見向きもしなかった問題が具体的に提示されている。

しかも、明治以降の都市形成のあり方が、それ以前の時代と比較すれば何倍ものスピードと規模で水害リスクを高めていることに気づいた。私はそれを「災害と都市化のスパイラル」と名づけた。水害対策のために主な天井川を付け替えると、その川底と周辺部がたちまち密集住宅になると、その付け替えた川がもとの流路に戻って大きな水害となり、密集住宅を洗い流していく。それを防ぐために砂防ダムを沢山築き、一旦水害から免れ、100万都市が形成されていく。しかし、その砂防ダムが潜在的な水害を防いできたため、現在は土石に埋ってしまっている。

そうした趣旨の話を神戸史談会でする機会があった。聴衆のある方が、「阪神大水害、神戸空襲、阪神大震災の犠牲となった地域はすべて同じだ」という趣旨の発言をされた。私は一瞬自分が凍りつくようなショックを受けた。それは、私たちの学問領域において、それぞれが別々に語られてきたがゆえに、全く考えもしなかったことであった。むしろ、市民の方がはるかに総合科学的な視野をもっていたのである。「関東大震災、東京空襲、きたるべき?の犠牲となった地域がすべて同じだ」という発言がどこからか聞こえてくるような気がした。

分類してみせることは学問の基本的な前提とされ、個別細分化はとどまることを知らない。むしろ、それが奨励されてきている。確かに、そうした傾向は必要不可欠なことではあろう。しかし現在、例えば「人間の安全保障」といった角度から差し迫った課題に応えようとしたとき、個別専門分野の学者がそれぞれの視点から別々にアプローチしたのでは、全く意味をなさない段階に来ているのではなからうか。市民が今それに気づき始めている。そうした状況に鋭敏に反応する部分がなければ、歴史学をはじめ、学問自体が活性化しないし、むしろ、市民や社会の痛罵を浴びるだけになるのではなからうか。

宮沢賢治の造語「イーハトヴ」について

九頭見和夫 (福島大学教授/比較文学)

賢治文学解明の重要なポイントの一つに、豊かな教養から生み出された賢治独特の造語がある。中でも特に重視しなければならないのは地名「イーハトヴ」であろう。

この「イーハトヴ」の表記については、賢治自身の中で揺れ動いたのか一定せず、最も早く登場する詩「イーハトヴの水霧」(1923年11月頃)から始まって全部で7種類存在する。(1)「イーハトヴ」(前述の詩の他に、童話「毒蛾」)、(2)「イーハトヴ」(童話「水河鼠の毛皮」、童話「ボランの広場」、童話「注文の多い料理店」の表紙)、(3)「イーハトボー」(童話「イーハトボー農学校」)、(4)「イェハトヴ」(「注文の多い料理店」の広告葉書)、(5)「イーハトーヴ」(詩「遠足統率」、童話「グスコブドリの伝記」)、(6)「イーハトーヴォ」(童話「ポラーノの広場」)、(7)「イーハトープ」(詩「さあれ十月イーハトープ」、童話「グスコブドリの伝記」)。まずこの造語の意味・内容についてであるが、賢治自身が「注文の多い料理店」の広告の中で解説している。

イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求めるならばそれは、大小クラウスたちの耕してゐた、野原や、少女アリスが辿つた鏡の国と同じ世界の中、テナンタール砂漠の遙か北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。実にこれは著者の心象中に、この様な状態をもつて実在したドリームランドとしての日本岩手県である。そこではあらゆる事が可能である。人は一瞬にして水雲の上に飛躍し大循環の風を従へて北に旅する事もあれば、赤い花杯の下を行く蟻と語ることもできる。

しかしこの「イーハトヴ」の具体的な場所となると、賢治が愛読したアンデルセンの童話「小クラウスと大クラウス」やルイス・キャロルの童話『不思議の国のアリスの冒険』の人物が登場したりして、「ドリームランドとしての岩手県」、すなわち現在の、賢治が生活していた大正・昭和初期の岩手県そのものではないということがわかる程度で、地球上の、それも賢治の愛読する童話に登場する人物が活躍する場所であればどこでも可能と思われるほど漠然としてつかまえどころがない。

つぎに「イーハトヴ」の語源についてであるが、賢治の広範囲にわたる外国語能力とも微妙に関係することから、説得力のある学説は存在していない。強いてあげれば恩田逸夫の説である。

これらの造語は<イーハト、イーハト、イーハト>など、長音の有無の別はあるが、基本的には「イーハト」で、「いはて(岩手)」に由来すると推定される。……つまり、「岩手」の歴史的仮名づかい、「いはて」に基づいて<いはて ihate>の te を、エスペラントの名詞の語尾づくりのように母音 O で終わる語として<ihate→ihato イハト>としたのであろう。そして岩手県の「県」に当たるところは、ドイツ語で「場所」を意味する<wo ヴォ>をつけて、イハトヴォ(=岩手とい

うところ=岩手県)>と造語したのであろう。「ヴ・ブ・ボ」を「ヴォ」と同じに用いていることは、いうまでもない。

賢治は、堀尾青史作成の「年譜」によれば、1922年の1月にドイツ語とエスペラント語の独習を始めている。また第清六による賢治の蔵書目録にもドイツ語やエスペラント語の本が掲載されている。恩田の指摘のように、「イーハトヴ」がエスペラント語と関係のある造語であることは、以下に述べるエスペラント語の特徴を考慮すればほぼまちがいないと思われる。

まず第一に、「岩手」を「イーハト」と表記した点については、エスペラント語の文字もローマ字であるが、エスペラント語のアルファベットには<W,X,Y>の文字が存在しないため<iwate>ではなくて<ihate>と表記し、ついでエスペラント語の品詞は語尾で決定されるので名詞の語尾 O をつけて<ihato>となったと推測される。なお<ihate>のままだと副詞である。おそらくはこの<ihato>に意味から判断すると、<urbo(都市)、orbo(円、地球)、ovo(卵、卵形のもの)>のいずれかのエスペラント語の名詞が付加されたものと推測され、発音も加味すると<ovo>が有力である。以上のことを整理すると、<ihato+ovo>となり、これを複合名詞にすると、例えば<suno(太陽)>と<bano(水浴)>を複合名詞にすると<sunbano(日光浴)>と前の名詞の語尾 O が省略されるので、<ihatovo(「イーハトヴォ」)>となる。試みに岩手県を地図で見ると、卵を立てたような形をしている。なおアクセントは、エスペラント語はすべて後ろから2番目にあるので、「トー」を強く発音することになる。第二は、賢治の用いた「イーハトヴ」の表記がすでに述べたように7種類ある、要約すると「イ」と「ト」に長音と短音が存在する点、例えば「イーハトヴ」と「イーハトーヴ」など、に関してであるが、エスペラント語の場合長音でも短音でも意味は全く変わらないことである。例えば動詞<kovri(「おおう」)>は、「コブリ」と発音しても「コーブリ」と発音しても意味は全く変わらない。第三は、語尾が「ヴ」と「ヴォ」、「ブ」と「ボ」と O が語尾につく場合(vo,bo)とつかない場合(v,b)とが存在することであるが、このことは、名詞をあらわす語尾 O がなくてもエスペラント語の場合品詞はわからないが単語の意味は推測できるので、賢治はおそらくその時々々の語感に基づいて O を付加したり省略したのであろう。

ここで「イーハトヴ」とほぼ同じ頃に作られた造語、童話「やまなし」に登場する「クラムボン」について触れてみたい。結論を記すと、この造語の語源は英語で、<crab(カニ)>に<born(bearの過去分詞)>を付加して作った<crab born(カニが生まれた)>ではない。具体的には、谷川にすむサワガニの生態と童話の内容から判断して、おそらくは母ガニが孵化し腹部に抱いていたカニの幼生(生まれたばかりの兄弟ガニ)と思われる。

以上のように賢治の使用する造語は奥が深い。一つ一つの言葉を大切に賢治の姿勢が、「イーハトヴ」の表記を7度も変えさせたのであろう。

作品の力がものを言う
——中国における谷川俊太郎——

ディアン コアン
田原 (東京大学外国人研究員)

中国語を母国語としない外国詩人が、その国籍や使用している言語が何であれまた何かの文学賞受賞者であるかどうかもさておき、その詩作が中国に翻訳紹介される場合、作品自体が優れた質や普遍的精神意義に欠けるものであれば、真の共感と大きな反響を引き起こすことはきわめて難しい。八〇年代以降、中国改革開放による経済の急成長に従って、政治が文学に干渉する力はだんだん弱くなっており、文学の民主化が日増しに強まり、読者の文学を見る目ますます厳しくなっている。谷川俊太郎はまさに、中国読者の審美意識が絶えず更新され、厳しい目で文学を見つめるようになった状況の中で中国詩壇に登場したのである。

谷川が重要な対象として初めて中国に翻訳紹介されたのは一九九九年であった。半世紀もの創作経験を持ち、六〇余の優れた詩集を刊行したこの詩人は、中国現代詩壇において「遅れてきたお客さん」といわねばならない。しかし、一時大いに名をあげたがすぐに姿が消えた一部の外国詩人と比べると、谷川はまるで「遅れたが上座についた貴賓」である——彼の中国語訳作品は百余りの文芸雑誌や詩誌や新聞に相次いで掲載され、中国の読者や詩人、学者に注目され続けているし、近年に出版された世界詩人選集にも入集した。一人の外国詩人を、権威のある刊行物をはじめ、このように枚数を惜しまずに何回も紹介したという現象は、中国現代文壇においてはごく稀なことである。中国詩壇の氏への重視度及び中国読者のその作品に対する共感の強烈度はここから見られるであろう。

中国における日本現代詩の翻訳紹介は、一九二〇年七月二日の『晨报』副刊に掲載され、周作人が「仲密」というペンネームで翻訳した石川啄木「はてしなき議論の後」という詩作に始まったとされている。その後の戦争や激動した中国の社会情勢、それから、建国後毛沢東時代に行われた一連の政治運動及び長期にわたる日本への敵視によって、日本文学に対するまともな翻訳紹介はほとんどされなかった。改革開放以来、何人かの日本詩人が中国に紹介されたが、残念なことに、中国の読者や詩人にあまり重視されなかった。日本現代詩についての軽視は谷川俊太郎の中国詩壇登場まで続いていたのである。

谷川の作品が中国における日本現代詩の印象を一変したことは争う余地のない事実である。氏はその作品自体の力によって中国に受け入れられたのである。このことは、二〇〇三年七月、北京大学で行われた中国語版『谷川俊太郎詩選』の出版シンポジウムで、すでに多くの詩人や評論家に言及された。谷川俊太郎の中国上陸は、小説家・理論家の M・クンデラが中国に翻訳紹介されたときとよく似ている。つまり、二人ともノーベル賞の受賞者ではないし、それから、何らかの名声を伴って、ある

いはマスコミの力を借りて中国に入ったのではなく、彼らはその作品の実力によって中国の読者を征服したのである。彼らの作品自体の力こそ絶対的なものであるといわざるをえない。

私はかつて発表した論文において、谷川詩の特徴を次のようにまとめた。その作品精神と創作法の「東洋化」、日本及び日本語の独特な文化的情緒；日本の抒情と西洋の抒情の融合；作品主体の表現の鮮明さと「第一次性」及び鋭敏な感受性；人生、人間性、生命、生活及び大自然の謳歌を主旋律にし、ヒューマニズム精神に満ちた作品全体の獨創性；詩としての芸術上の純粋性と高度な調和・統一性；作品構造の読解可能性と「やさしさの重み」のある言葉の平易さ、洗練さ、活発さ、深み及び内在的・外在的リズムの音楽性；感性、イマジネーション、思想、メタファー、哲学、技術などがみごとなバランスで詩句に内蔵されていること；多元的創作手法の併用、その作品に溢れた探索精神と普遍的意義；表現空間の広さ及びテキスト構成の多なさ。これらが中国が谷川俊太郎を受容した主な要素ではないかと思う。それから去年編集した『谷川俊太郎詩選集』（三巻・集英社文庫）の解説に、年代順で谷川の作品を分けて次のように考えている。「五〇年代は本能の爆発期、六〇年代は純粹詩の創作、七〇年代は変容が芽生える時期、八〇年代は言語の変遷期、九〇年代は生命と現実と直視し回帰する時期、そして二十一世紀は昇華し結晶する時期である」。

二〇〇四年の初めころ、谷川俊太郎はまた「二十世紀世界詩人五〇人翻訳シリーズ」という出版計画に組み入れられた。日本詩人として入選したのは彼だけである。氏は「中国の読者へ」というその詩集の自序において、「詩は理解するものというよりは、味わうものだと私は考えています。美味しい詩、それがいい詩なのです」と書いた。それは氏が一貫にして強調している詩歌価値観であり、中国全土で放送されるテレビ番組に出演した際に述べた「いかなる権威の文学賞でも読者の共感に僕にもたらす楽しさには及ばない」という考え方も通底している。読者との共感。これこそ詩人谷川俊太郎が読者と交流する手段ではなからうか。

今年の夏に、氏の三冊目の中国語訳詩集『谷川俊太郎総集』が刊行される予定になっている。これらの出版によって、谷川は中国読者が日本現代詩を知るための窓口にもなっている。この窓口を通して、更なる多くの中国詩人や読者は日本現代詩に一種の信頼感を覚え、今までの日本現代詩に対する偏見と軽視を打ち消した。筆者はかつてある文章で、「ある意味でいえば、日本現代詩は谷川俊太郎の詩作品によって救われた」と指摘し、谷川詩はきっと中国詩人に大きな影響を及ぼすだろうと予言したことがある。谷川俊太郎が中国においてますます注目されるにつれて、中国における日本現代詩の翻訳紹介・研究がより高いレベルに躍進できる、と信じている。そのとき、数少なくない日本の優秀詩人が、谷川俊太郎のように、中国詩人や読者に敬愛されるに違いない。永久な価値をもつ作品こそが全人類の共同的財産であるのだから。

「自」途上にある韓国の植民地期経済史研究

白賀 潤 (江陵大学社会科学部講師/経済史)

韓国での日本研究の動向を紹介するのが与えられたテーマであるが、筆者のジョブ・サーチ過程で分かった韓国での日本研究者の分布と、筆者の専攻分野である経済史の研究現況を一瞥することにしたい。

よく知られていることだろうが、韓国で大学教員の国外学位取得国は圧倒的にアメリカが多い。今年下期に採用された 874 名を対象とした調べによると、海外からの取得者は 413 名だが、そのうち 280 名がアメリカからのものであり、日本は 2 位ではあるものの 41 名にすぎなかった。とりわけ、経済学部では日本帰りの研究者の採用比率が非常に少ないので、筆者も当初から経済学科の応募は諦めていた。

一方、非アメリカ帰りの研究者たちによりチャンスのあるところが国際学部あるいは地域学部という学部である。この学部は十年前の頃から「国際化」ブームによって相次いで設置されているが、中国、日本、ロシア学科が中心となっている。なかには「アメリカ学科」「ヨーロッパ学科」さえもある。これら国際学科は人文科学部・社会科学部に所属しているケースと国際学部として独立しているケースが並存している。

やや古いデータではあるが、手元の資料（ソウル大学国際地域院『韓国の日本研究』2001 年）から韓国における日本学科の現況を紹介してみよう。2001 年現在、日本学科が設けられている大学は全国で 25 箇所ある。韓国には約 370 大学（短大 170 を含む）があるので決して多くはなく、またほとんどが地方に所在している。所属学部は人文学部が 10 と最も多く、国際学部 8、社会学部 3 の順となっている。96 名の専任教員を専攻別にみると、語学・文学が 45 名でトップであり、社会・文化（14）、歴史（12）、経済（10）、政治（8）の順になっている。語学・文学専攻者が多いのは、もともと日本学科の母体がそれまでの日本語学科だったことを物語っている。また、専任教員の最終学位取得国については、データはないが、やっぱり日本が最も多いようである。ところが、最近では英語での講義能力を重視するようになり、アメリカ大学出身者の採用も多くなると聞く。

つぎに、日本経済史の研究現況をみておこう。現在韓国では、少数の経済学部の経済史講座や日本学科の経済・歴史講座の教員を中心に日本経済史の研究・教育が行われている。では、これらの人をすべて網羅した韓国での日本経済史研究者の数は学会会員名簿から推測することができる。現在、韓国で最も有名な経済史関係の学会としては「経済史学会」がある。全会員数は約 200 名で、韓国では中間規模である。その会員の中、専攻が日本経済史となっているのはわずかに数人にすぎない。

また、年 2 回刊行される学会誌たる「経済史学」に日本経済史の論文はほとんどない実情である。それに比べて西洋 4 カ国（イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ）の研究者及び論文は相当の比率を占めている。ところが、この現状は日本もそう変わらないのではなかろうか。ただし、韓国の場合、ロシア及び中国の経済史研究も相当貧弱であることが目立つ。

しかし、この数字が直ちに韓国における日本経済史研究の状

況のすべてを語っているわけではないことに注意しなければならない。日本と同じく、現在韓国での経済史研究の主な対象時期は戦前だが、その時期は日本帝国主義による植民地朝鮮の時期でもあった。つまり、植民地期を対象とする韓国経済史の研究はそのまま日本経済史の一部でもあり、現在韓国にはそれに対して相当の研究者が活躍している。

ところで、1970 年代までの植民地期朝鮮に関する研究は、史料の所在による要因もあって、日本の研究者が中心であり、韓国の研究者はどちらかといえば少数派であった。この状況に変化が生じたのは 80 年代以降であるが、それには韓国内での研究者だけでなく、日本留学生・研修者たちの研究の蓄積が重要な役割を果たしたという。その成果が最近現れた韓国（朝鮮）の長期統計である。これは、「落星台研究所」という研究グループが中心となって、日本の研究者の力を借りずに成し遂げたものである。

これらの研究を基に朝鮮後期から植民地朝鮮時代までの数量経済史研究が活発に行われ、植民地期の「近代化」をめぐる論争も新しい局面を迎えている。この問題に関しては、従来主に韓国史学界からの「植民地収奪論」と経済史学界の「成長論」が対立してきた。しかし、両者の論争は実証研究によって進展してきたというよりはややイデオロギックで不毛な対立に傾く傾向にあった。ところが、今年経済史学界から『開発なき開発』（許幹列）が刊行され、波紋を引き起こした。本書は、一方で植民地期の成長・開発を認めつつも、それは「日本人の、日本人による、日本人のための開発」にすぎなかったと主張している。この主張は従来の収奪論と同じだが、朝鮮人一戸当たりの平均所得推計の推移を提示するなど実証的な研究だったことに画期的と評価されている。もちろん、『日本帝国主義下の朝鮮経済』（東大出版会）の著者たる金洛年氏を中心に直ちに反論が提起されているが、その過程で人口、土地生産性の推計方法などより具体的な論争に発展していくことと予想される。

この本は、おからの「独島（竹島）問題」と絡んで、学界だけでなく一般市民にも有名となった。もちろん、著者の意図とは関係なく、本書は多くの人々に「収奪論」を実証したものと受け入れられた。植民地期研究に関する「国民的感情」をまたもや感じさせられたのである。しかし、本書及びそれに触発されて行われている今回の論争は、これまでと違って、韓国内での「自生的」であることに研究史的に大きな意味を持つと筆者には思われる。もちろん、許さんは京都大学で客員研究院として、金さんは東京大学の留学生として、それぞれ日本での経験を持っているが、今回の論争にはこれまでの韓国での研究蓄積が最も大きかったと思われるからである。

一方、韓国での戦後経済研究史はかなり薄い。これは日本も同じだが、日本と異なるのは、産業史・経営史に対する関心も相対的に弱いことである。その最大の理由は史料の制約にあるものの、研究傾向とも関係があるように思われる。最近になって漸くその研究動向が現れはじめて、筆者もそれに参加している。ここには、戦後日本経済史・経営史の研究で行われた知見・方法論を紹介し、また韓国経済史の研究で得られる問題意識などを通じて日本経済史を捉え直す、日韓経済史研究の架け橋の役割が期待されている。

伊藤正直(東京大学経済学部教授/日本経済論)

本誌第4号で名古屋市立大学横山さんが触れられていたが、3年ほど前、日本の資本市場に関する研究プロジェクトを立ち上げた。プロジェクトを立ち上げた理由はいくつかあるが、直接のきっかけは、筆者が、『東京証券取引所50年史』、『山一證券百年史』の執筆責任者をつとめたことにあった。後者は、残念ながら、1997年11月の同社破綻によって刊行されずに終わったが、この両書の執筆を進めるなかで、日本の資本市場に対する研究が著しく立ち遅れており、**基礎的データの整備**すらほとんどなされてこなかったことを痛感した。

金融史の領域では、これまでの研究は、**圧倒的に銀行金融機関**の分析、**預金・貸出市場**を中心とする**金融市場の検討**に集中してきた。筆者自身も、主たる関心は**銀行金融機関**にあり、**金融市場**の分析も**金融政策**の分析もそうした視角から検討してきた。証券や保険に関心がなかった訳ではないが、十分に射程が届いていなかったのである。

実際、日本の資本市場についての研究史をみると、戦前については、**明治期殖産業**を対象とした野田正徳、**戦間期**の**社債市場**を柱に置いた志村嘉一、**証券業の展開**をトレースした小林和子、二上季代司など数えるほどであり、**戦後**の資本市場についても、銀行部門ないし狭義の**金融市場**に対する研究が到達した水準に比べると、なお部分的・各論的な段階にとどまっている。これに対し、欧米においては、証券市場の研究は、理論的には、モジリアーニ・ミラー、フェルドシュタイン以来、**戦前**の**国際連盟**の諸調査以来かなりの**蓄積**があり、資本市場の構造と動態についての研究密度もかなりの水準に達している。

このように日本の資本市場分析が立ち遅れてきた理由はいくつかあげることができるが、一般的には、1980年代の**金融自由化・国際化・証券化**の進展以前には、**間接金融優位**の構造が存在し、資本市場の側の展開が低位に止まっていた、**金融仲介機関**としての**銀行**の地位は歴史的にも**圧倒的**であり、それゆえ**資金供給側**の**金融資産選択**も**預金**に偏倚したという、**広義の金融市場**の構造、**金融仲介機関**のあり方、**投資主体の金融資産選択**行動のあり方が、資本市場に対する関心を低位に置いてきたことによると考えることが出来る。分析のレベルを、**銀行部門**と同一の水準にまで引き上げることがまず必要なのである。

もうひとつのきっかけは、1990年代の**金融システム不安定**と**金融システム改革**の提唱である。1996年に、橋本内閣の下で**金融ビッグバン**が提唱され、その後、様々な領域で**金融システム改革**が進行したが、そのなかで**最重要の課題**の一つとされたのが証

券市場改革であった。このことは1998年に成立した**金融システム改革法**の中核が、**証券取引法改正**にあったことから知る事ができる。しかし、こうした法改正にもかかわらず**金融不安**はおさまらず、その後も**金融・証券界の経営悪化**と**組織再編**が続いた。

1997年夏からの**アジア通貨・金融危機**においても、**金融システム**の脆弱性が**強調**され、**金融システム改革**の**重要な柱**として、**資本市場改革**が提示された。アジア諸国では、**マレーシア**を除いて一般に**銀行システム**への**依存度**が高く、**資本市場**の**発展**は立ち遅れていた。このため危機後、**銀行システム**と**資本市場**の**均衡的発展**が叫ばれ、**資本市場**とくに**債券市場**の**育成振興**が急ピッチで進められ、**取引所・発行市場・流通市場全般**に及ぶ**制度改革**が進行し始めた。

このように、日本の**金融システム改革**、**アジアのシステム改革**いずれにおいても、**資本市場**の**改革**は、その**中核的柱**とされた。しかしながら、現在までのところ、わが国においては**資本市場改革**が一定進展したにも拘らず、**資本市場**の**活性化**も**順調**に実現されているとは必ずしもいいがたい。1,400兆円にも達するという**個人金融資産**は、現在でもなおその大半は**銀行等**に**蓄積**されたままである。こうした現状を適切に改善するためには、現時点での**市場**の**欠陥**を検出する作業だけでは**決定的に不十分**であり、わが**国金融市場**の**歴史的性質**と**連関**させた分析が不可欠であろう。

以上の2点が、このプロジェクトをスタートさせた主たる理由である。したがって、研究の主たる視角は、①日本の**資本市場**を、**明治維新**以来**現在**に至る**長期的・歴史的把握**と**アジア・欧米諸国**との**比較**という**縦と横**の両者の**パースペクティブ**から捉え直すこと、②**預金・貸出市場**、**短期金融市場**、**資本市場**、**外国為替市場**など、**広義の金融市場**相互の**関連**に留意すること、③**市場**の**構成主体**(**資金の供給者**と**需要者**、**仲介者**)の**あり方**を重視すること、④そこで**取引**される**諸証券**や**証券取引制度**の特徴を検出することなどを通じて、その**日本的構造**と**特徴**、**日本**における**株式**や**債券**の**価格形成メカニズム**を明らかにすること、に置いている。この前提の第一は、**基礎的なデータの整備**であり、個別経営のレベルにまで立ち入った分析である。これらに関する**資料**の**収集**も**相当進んだ**。学界や一般社会の**共有財産**となるように、資料の整理・公開を目指しての作業にも、今後いっそうの力を注ぎたい。

■編集後記■学術mini情報誌「PS JOURNAL」第9号をお届け致します。

今回は歴史学、文学、経済史の分野で活躍の研究者7名です。シャープな小論考をご一読下さい。(K)

PS Journal 2006 第9号 2006年6月20日 発行

●発行・編集:日本図書センター・P&S PS Journal 刊行委員会

PS JOURNAL 編集部 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-10-6

TEL:03-5940-5474 FAX:03-5940-5476 e-mail:nps@nihontosho.co.jp

©記事の無断複製、転載を禁じます。

● *Academic mini high information magazine* ●

PS

JOURNAL

Special issue 2006



*PS
JOURNAL*

Focus : Cross-cultural aspect

■ *Drago Unuk :*

A linguist came from a small country, Slovenia.

*This is the first time that Slovene's essay on Japan
and Japanese in English appears in our PS Journal.*

Here is the first part of two volumes —editor.

Drago Unuk, docent for Slovene literary language at the Faculty of Education in Maribor, Slovenia, recipient of the JSPS (Japan Society for the Promotion of Science) Postdoctoral Fellowship for Foreign Researches to conduct linguistics research in Japan for a period of 12 months, under the leadership of Professor Keiko Mitani (Faculty of Integrated Human Studies, Graduate School of Human and Environmental Studies - Kyoto University).

I was a lot younger, when I sort of began to see that things are not as we see them and not nearly as they appear to be ... How much different could Japan and the Japanese be, while observing those entities with the eyes of a foreigner, who hails from a small, a pocket European country so to speak, which does not count more than 2 million inhabitants, measures a good 20000 square kilometres, gained its independence some 15 years ago and up to this date remains quite an enigma in the European and virtually unknown in the consciousness of the worldly mind ?

As I had to decide where to conduct my studies, I thought about the USA at first, but after carefully thinking through the corpus of possibilities and expectations, changed my sights to Japan and came to a final decision within mere moments; the decisive arguments being Japan's role as the leading research and developmental power of the world. Although to a sensitive and resourceful mind, all arrows pointed to "Yes", the surroundings I hail from understood my choice as a highly unusual one. It surely raised a lot of interest and, as for myself, represented a significant change in life. Our culture is full of stereotypical notions about Japan: it is regarded as a country based on futuristic development and ancient tradition, decent efficiency on one side and adaptability to the leading economic and other significant demands of the western world. The current image of Japan perceived by where I come from is a mosaic of incorporated information about traditional architecture, geishas and haiku poetry. It's basically the picture an average European gets through watching TV, surfing the Internet; summa summarum, broadening his or her mind.

Conscious of not wanting to rely on such a thwarted image, I gained some crucial practical information from a guidebook, willing to get acquainted to where I landed on the spot. Well, one year is quite a substantial amount of time to gain insight and process as much information about the surroundings you ought to become one with.

I caught the first glimpse of what I was to expect, as I, despite being awake all through the flight, admired the sun rise over Japan and while taking a closer look, ran my eye over the shape of Japan's coast, the ships and Kansai Airport, which was getting oh so close. As a new day dawned, I smilingly thought to myself: "Well, some romantic ideas about the country I am about to live in for a while do seem to be true."

Japan may be far away, but is it really so different and obstinate as our culture is made to believe? The formalities at the airport let had let me know what I should encounter a lot during the following days, namely the exceptional friendliness, consistency and efficiency of the Japanese.

I left Slovenia in mid-winter conditions with 5 inches of snow covering the landscape, that's why I got to sweat a lot because I arrived dressed up perfectly for winter conditions (and I was advised to do so in the handbook) and was greeted by autumn temperatures. "This mild climate is really appealing," are the words that cross my mind while I admire the surroundings through the train window.

My newfound residence is the Kyoto International Student House, Sakyo-ku, and with regards to my previous travel experience through Europe, I have to admit that students do not encounter very much luxury at all. The apartment interiors are old and worn out and there is no sign of technological wonders; "they have a computer room and one ADSL line for guests", but what raises my hopes are ideal research conditions my host faculty has to offer.

Wintertime falls over us during the next days, but there is no central heating, or at least not the kind we are used to in Slovenia. The heating system does not work, yet I receive the friendly assistance of an electrical heater and an extra blanket, which are not much of a

help since it is windy and cold to the bone outside. Where is the mild climate now?!

As one takes a walk through the streets, one can see so much: things are so near and there are a whole lot of them but there are also certain small matters that catch the eye. It is always best to look at trees and not see the forest, then the other way around, that is, strolling around Kyoto and getting acquainted with it step by step, while at the same time grasping the image of where I actually am.

The buildings. Of course, they are most frequent things I see – some of them are old, traditional, remains of the past woven into the city; the others are contemporary constructions, also divided into two groups, the first being low, private houses and the other encompassing higher multi-story buildings (on a side-note; there do not seem to be any mind-bogglingly high skyscrapers in Kyoto), which as it appears to me point out an interesting interaction between low and high buildings, giving the city quite a lively appearance. The promenades are as wide as they are in Europe and the back streets branch into many smaller ones, where there are mostly private houses. What is more, many buildings appear box-shaped; the advantage being on the side of functionality.

There is a magnificent forest that spreads on the outskirts of the city. I am very much surprised by the leafiness of the trees at autumn's end and even more by their splendid colors, spreading from sunshine-yellow to Bordeaux-red. Since I still am a bit cautious, my main interest lies in exploring the nearest surroundings. I am glad to be living near the outskirts of the city, amidst private houses, which seem to be sort of connected, and the alleys spread around homeliness; there is lots and lots of greenness, blooming pot plants and small backyards. Very much like home!

When there is sunshine, it is especially pleasant to investigate what more there is around me – an amazing number of shops (flower shops, dry cleaners and laundrettes, small restaurants, fish markets, stationers' and jewelers' shops). It appears that many of Kyoto's inhabitants are self-employed and services are the main source of income. Such a neighborhood is a

quite rounded up and an apparently self-sufficient unit, since you have everything at reach – from schools to the pharmacist's. I am curious how one can earn enough in such a secluded unit, how profitable are the shops, respectively.

There seems to be one of the prevailing food shops every half mile (24/7 shops), so there are fewer department stores than one comes across in my hometown. I have also not yet encountered a mob on a shopping spree. As probably every foreigner, I miss the morning paper and the European tobacco shops; there are just vendors and drink dispensers and if one is persistent enough, one can find a specialized cigarette shop carrying smoking utensils. Luckily, I came across *The Japan Times* in English, satisfying, as I do not watch TV.

It has to be pointed out, that Japanese are very good neighbors. It is always a privilege to find how eager they are to help, how free they are to give any kind of information, although many cannot speak English and I cannot speak Japanese. Europeans find the Japanese very strict and earnest people. When they do not smile, they appear to us, as if they were angry – but that is just a picture living in the minds of the European population. I must emphasize that I have never ever before met such friendly people, and they are not only friendly to strange foreigners such as I may be, but to each other as well. Their encounters appear to me as rituals of politeness. One does not have to master the language to see that there are special and unique forms of conversation going on. Despite being foreign, I have not yet had the feeling of being redundant in any place, everyone I have met up to this point made me feel welcome.

Another aspect of the culture I landed in is cleanliness. Nowhere in Europe have I ever seen such pedantry when it comes to “keeping one's threshold clean”. There is a sense in the air that keeping the streets, the homes, the whole environment clean is a leading aspect of everyday life. It reflects how one respects oneself and others.

And then there is the traffic, an overwhelming and important thing for a foreigner, because it has its specifics. As I got a cab soon after landing, I needed a

couple of minutes to adjust to the new regime. The driver was sitting on my right but after another couple of minutes of fighting off the jet lag, the penny dropped: it is the same traffic regime as in Britain. Well, a normal thing, after you are finally fully aware of the differences. But until one reaches this point, some small encounters, such as crossing the road, waiting for the bus on the wrong side, etc., precede the "assimilation". Fortunately, I am not driving a car here yet.

The basic regime (signs, lights) is the same as in Slovenia. The promenades appear the same as in all big cities. They seem equally long and wide, and the buildings on either side look very much alike. There is another slight problem though – language; signs are mostly in Japanese writing and because there are so many, one easily overlooks the fact that the names of roads and streets are also written in Latin letters. The countless signs do not appear as advertisements to me. They basically do not affect nor address me since I am illiterate when it comes to *kanji*, *hiragana* or *katakana*, yet I find the manner of writing very esthetic and appealing.

I am delighted about the pavements, which on main streets are fully paved, and to my amazement even the roads are smooth and well-surfaced. There are no crowds or traffic jams, no stress and no rage. I have this strange feeling that there is a lot less traffic than in my hometown, which counts no more than 100,000 inhabitants. How is this possible?

I must admit I was expecting to see many vehicles of indigenous production. Here and there we see a Peugeot, maybe a Mercedes, but that is about it. I have fancied Japanese cars for some time now, and I am glad to have the opportunity to get a close look. I was a bit surprised though, to see so many new and well cared for vehicles. It may not be more than five years ago when faculty colleagues and I admired a small Japanese one-seater, parked in front of the main building. The car stunned everyone with its shape and functionality, something we were not accustomed to. "But there are a lot of them here", I say to myself as I pass by smilingly. Three or four manufacturers appear to prevail. It looks like Mazdas are expensive even here.

I find the palette of colors very unusual: black, white, gray and every other in between. No bright choice, if somebody should ask me. I am almost shocked to think that Mazda surprised the European market with very lively colors and daring combinations. After all I have seen up to now, I am not at all surprised to see no bumped or otherwise damaged cars, something, that is a frequent and not at all pleasant experience in my hometown, especially, when one goes to the supermarket. The Japanese impress me as patient, cultured and polite drivers,

I was furthermore expecting to see numerous motorbikes, scooters and vespas, mostly because I have grown fond of the image of fast and strong Japanese bikes. Another revelation was that there are not that many of them around here. Some of them are, if I may express myself in such a manner, old. The first, not very pleasant impression I got, involved a couple of bicycle-riders. A bike seems to be the most appropriate means of transportation for many students I met here on campus. Although his or her style of driving may appear aggressive, no one seems to get hurt or violated in any way. You may get a bit of a scare, though.

The bus is also a practical means of transportation. It is reliable, cheap and practical. Although I detect many who express displeasure about its unpunctuality, I personally like to use it, first and foremost, to look around. I finally got fond of it, after I figured out how to pay for the ticket. A foreigner always thinks of novelties as something peculiar, but when the adaptation is complete, he or she accepts them the way the natives do. At least I hope so.

It is often said that too much good is not good at all. To be more precise – I have to write about something that I rather would not have experienced. Sadly.

A couple of days ago, I stood at a pedestrian crossing, waiting for the traffic light to change. A man and his young son stood near by and the boy just could not take his eyes off my face. When his father became aware of that, he pulled him aside and began explaining something very intensively. A child of his age normally finds strange and foreign things and people quite interesting, and he kept staring at me, while his father

was telling him I do not know what kinds of things and giving him who knows what crucial advice and facts about the presence of foreigners. This is what I presume, after seeing the father holding his son's arm very tightly, while I at the same time found the situation getting more and more embarrassing for me. Well, a bad experience.

There is also a commentary or an article in the daily newspaper about homicides of children, the last one just occurring in Kyoto. As I already knew and had experienced in the past weeks, Japanese families tend to take special care of their children, and also it is understandable that the statistics of violent deaths of children, which have recently risen up to 30 per year, arouse much worry. I hail from a country where there is a yearly average of 30 children dying in traffic accidents (we are a nation of just under 2 million inhabitants), but at the same time we have the lowest birth rate in Europe. I thoroughly read all the news about that topic.

Experts in different fields are in constant search for explanations and solutions. The matter is serious and difficult to explain. Children are dependent and the weakest members or links of our society. The more traditional a society is, the more it focuses on caring for its frail offspring. Contemporary societies also frequently generate paradoxical phenomena, such as: sexual and other kinds of violence against children, encompassing horrid murders, torture of children and elder people, etc. These homicides are arousing extra concern, while sadly becoming more frequent. As I can obtain from articles about trials, the culprits are mainly adult males, and only one stands out among them – a deranged foreigner, giving rise to (by fault of TV correspondence, as it says in newspapers) an absurd campaign against foreigners, who are all branded possible perpetrators. The fact is, that all of those criminals are mentally and differently unstable, and thus a certain question forces itself into the open: what is the reason for this horridness and what can be done to prevent and ultimately stop it?

I started the topic of children by acknowledging that they are helpless when compared to adults. What will follow, as thoughts of someone who is merely an observer on the side, may not please the reader. Japan is known worldwide for its craze for comic – read not only by young people but adult men as well, and almost anywhere: in restaurants, shops, bookstores ... Among these comics is a special kind, emphasizing female characters, who are very childlike in appearance, and those comics feature sexual content. The male characters are portrayed performing different kinds of sexual acts on the female ones, the latter mostly being subordinate and exploited, while violence appears to be the background. What is more, the female characters look like children in every way (the exception being sexual attributes, which can be seen in front of or in a bookstore, where there is a special compartment with such comics, whose content is initially visible on the covers). But let us leave aside the fact that the circle of “readers” is rather limited and that the comics are taped together, so they can be purchased exclusively by adults and one can understand that they are some sort of means of living out sexual frustrations.

Something like that would not be possible in Europe, where communities are keen to protect children against sexual and other kind of violence, and at the same time a hunt is taking place against pedophiles. The notions sex, violence and children do not have a common denominator.

It is important in Japanese comics that the portrayed characters have the appearance of children who are being sexually and mentally traumatized, and the message of all of that is: they cannot defend themselves. There are sick deviants lurking in every community devoted to and a long special chapter could be spent when describing how they interpret the background message of such comics.

Even the “Cartoons” section in *The Japan Times* makes one think, with features showing how “most guys perceive Japanese women”, or how “we are all schoolgirls, animé princesses and demure geishas...”

Since I am a foreigner, I am doing just that, while observing what is usually looked at, but not seen.

The Japanese are very polite people indeed; it has been a month or so since my arrival and I still have not changed my mind about what I just said in the introductory columns, no matter what everyday encounter I was involved in with representatives of my host nation. Speaking of every day, my daily routine has steadily become more and more monotonous. I even figured out that there are currently 128 million inhabitants in this country, myself being included in that figure as a foreigner about to spend a whole year amidst them.

The temperatures have risen, and so the temperature in my apartment went up as well. If I put it a bit sarcastically, the warm air invaded my housing, driving the temperature in my room to room temperature. Yet I am still a bit unhappy about the heating system; no matter how hard I try, I cannot adjust to the fact that there is no central heating; this being the reason one feels cold all the time. I became acquainted with many Japanese things, yet it still remains a mystery to me why the indigenous solutions to this problem do not work (for us foreigners, that is). Is there anything wrong with the central heating system we use in Europe? I was given an electric blanket, thus I no longer have to sleep alone. I often read that several other Europeans who spend their time here complain about the same thing. Although I now have this "heating companion", that does not mean I shiver any less.

In my previous column, I wrote about superficial knowledge about Japan, but I have to make it very clear that Japan is very present in the life and minds of the Europeans, a lot more than the Japanese would ever expect it to be. What I wanted to point out is, how big the difference between reading or hearing about something respectively and actually experiencing it really is. Personally, I am referring to Japan.

You may get the image of me being a shivery creature, but for my defence, I was "fortunate" enough to visit Japan during the coldest winter since 1946. People at home are constantly asking me, via e-mail, how I cope when there is up to 12 feet of snow in certain areas of the country and constant news about people freezing to death. Unfortunately, this wintertime is an unpleasant exception and a part of Japan was hit very hard by it. To my questionable fortune I am about to

visit that part, more precisely Sapporo, for a couple of days in February, and thus have the opportunity to see the true picture for myself.

One who finds himself in a new environment has to accustom himself to new circumstances, drop certain habits and expectations and take on new ones. To do the first, meaning, utterly destroying a system of already acquired habits, is far from easy, far from being possible to do in a short period of time, while the other demands even more time and struggle. And when you find yourself being caught between those two phases, you are somewhat stuck in a desert ... Why, this is exactly what happened to me. I have just experienced a time of countless holidays and celebrations that brought along a lot of free time and many possibilities to really spend it.

Christmas is basically a holiday of Christian descent and I expected that it would just be acknowledged as a holiday that is celebrated in other parts of the world. This is where I was wrong! Just like McDonald's, it made its way over the "big pond". Well, there were no heavily decorated Christmas trees of all sizes, no twaddle ornaments, no "Santas" standing in front of the entrance of each and every shopping centre, but there were loads of "Merry Christmas" signs and Christmastime-type formulations all over the place, which surprised me even more than scarcely decorated streets before New Year's Eve.

It is not that I miss the countless variations of Christmas trees or snowflake-shaped symbols respectively, which in Europe tend to thwart the whole image and exceed the boundaries of good taste (but I must say all of that is getting better and better each year where I come from). No, it is just that I am used to all that jazz letting me know in November, that Christmas is just around the corner ... Here - it is obviously a different tune. I do not regard the "Merry Christmas" signs as some sort of a western style invasion of the Japanese traditions, but more as a lack of content or conceptual emptiness of the whole linguistic construct; all that matters is celebrating it (even the English-speaking community has long forgotten the initial meaning of the first part of that syntagm and thus does not regard the holiday any differently). The signs are therefore more noticeable and because of the

difference in writing look a lot like some sort of decoration or a commercial poster. All that put aside, it was nice to be able to buy a Christmas wreath and hang it on the door (the symbol itself originated far before Christianity, but nobody seems to care!), although it meant something totally different to me than to the shop owners who casually put it on display in their shop windows. It may sound funny, but I never expected Christmas to take over Asia as well.

One day I attended a musical performance by school children, which was staged in front of a shopping centre. It was freezing (yes, I know, I've written that dozens of times already), but their music was very pleasant and the people in attendance were overwhelmed by what they had heard, so the conducting teacher had to thoroughly explain to them that the concert had ended. The children, dressed in their school uniforms, slightly cold and some even shivering, looked very happy when they were allowed to leave. This wonderful performance reminded me of the time when I was their age, the times of socialist youth, but it seemed that all the other visitors were more nostalgic about their childhood. At least that is what I presume.

Let us switch back to New Year. The decoration was of course of such nature that it did not catch the eye immediately (especially if one's eye is used to usually perceiving something sparkling), but it popped up after I started to look for it carefully. I expected it to be out there somewhere. That was truly the fact and for me it was yet another novelty. Although, as I was told, New Year is regarded as the most important holiday, the decoration itself is a bit homely considering its appearance, the materials it is made of and the perception of it. Only the largest streets are decorated, while there is nothing like that on the outskirts. This was another big surprise. Expectations are of course an important part of us, they spring in our minds and grow within them, so there is nothing new for a foreigner to expect something he or she links to previous experience. What is more, I did not notice any pre-holiday fever or gift-shopping sprees at all. Everything occurs in a different tempo, a different way even: calm, unnoticeable, modest; as I later found after midnight, something specifically Japanese.

Because I did not attend the Christmas party which the students prepared for their nearest and dearest (many residents including myself have ours thousands of miles away), I decided to await the New Year at the so-called main square. We Europeans presume that cities have such squares and that they are usually situated in the old town, representing the city centre. Of course, Kyoto does not have such a square but only crossings, while the old town of the city is clearly noticeable.

Well, after I was killing time for a while in a completely undecorated coffee shop, hoping to catch a glimpse at how the Japanese await the New Year and in the end concluding that they actually do celebrate it differently, I mixed with the crowd gathering in the main street. Having had enough time to do so, I prepared for something new. It was my first time awaiting the New Year outdoors. It is difficult to say: "Hooray, it's here!" when you are stuck in the middle of the crowd and at the same time I cannot say that I got lost in it either, since my head was lingering high above everybody. Many of them were even curious if I stood on something... I was standing behind three young ladies who wore traditional gowns, and was getting ready for a once-in-a-lifetime experience. I was wrong yet again. The ladies took out their cigarettes, exchanged couple of short messages on their cell phones and went back to the dorm. The romantic part of the celebrations was cancelled unexpectedly. I stayed and eagerly waited for the people to start the final countdown, for the firecrackers to start popping and a huge firework to enlighten the sky, but instead of all of that there was nothing but silence. Everyone was turned towards the sanctuary, talking silently and waiting. Just before 2006 dawned upon the world, some ten people started counting down silently, almost like they were talking to themselves. If they had not done it, I would not have known that 2005 was actually over in this part of the world. To avoid being impolite, I had previously removed my glove to shake hands with the people and wish them all the best, but that was unnecessary. Nobody moved, and after some time, a female voice echoed from the sanctuary. At first, I thought that somebody was wishing the crowd a Happy New Year - wrong again! As it became clear to me a bit later, the

voice was presumably instructing us how to enter the sanctuary. Wishing people a Happy New Year is different as well. No shouting, no banging, no fireworks; no handshakes, no kissing, no floods of congratulations ... Only polite bows exchanged between people standing near to each other. Now it was clear. I was alone and nobody was going to wish me "all the luck in the world". Resigned and a bit disappointed, I thought about it for a while and came to the conclusion that, as a foreigner, I cannot force myself into their customs, their exclusive family circles. A group of young ladies standing next to me seemed to have noticed that I was really on my own out there. To my pleasant surprise, they decided to bow to me as well. It was a nice experience, especially when, only moments before, I did not have a clue what was going on around me.

Still stuck in the middle of the crowd, I waited for what was about to happen. Since nothing happened up to that certain point, I figured that something ought to from that point on, but nobody moved, not even an inch. Again, it took me a lot of time to recognise that everybody was about to go to the sanctuary, but those who were standing where I was would not reach it for another couple of hours. The limitless patience of those present overwhelmed me. After about two hours, I finally found a way to withdraw from the crowd and head home. I visited the sanctuary two days later, when it was a bit less crowded. Somebody enlightened me what was going on there on New Year's Day.

It ended up being a special and unforgettable celebration. Japan in its "Japaneseness", is very different from what I had previously expected. The eye sees, but does not know...

Money, owing, to unfortunate circumstances, I was left without money on my birthday (the word "unfortunate" does not refer to the fact that my birthday is so soon after New Year's Day). It is thoroughly impractical for a foreigner not to be able to read Japanese writing, that is why I did not understand the note on the local bank's entrance, that it and its ATM would be closed, not operating respectively, until January 4th. I presumed that the ATM would be accessible; I did not know that its accessibility depended on the bank being open for business. And

Europeans tend to think that the ever-growing complex mass monetary operating with so-called "plastic money" was invented by the Japanese. Wrong again! If you are penniless or unable to get any money during the holidays, you, as a foreigner, are definitely lost. I bumped into a student I got to know during my stay and told him about my situation. Without asking, he offered to lend me some money to get by for a couple of days. How unexpected, and very polite!

Even the whole relationship to money seems to be extremely polite in these parts. In the beginning, the abundance of gestures in relationship to giving or receiving money surprised me a lot and even bothered me a bit. Yep, one does learn on a constant basis ... As it is surprising how much trouble the abundance of coins brings to the Dutch and the Germans (inversely proportioned to the nations), it also surprised me to see how one can here get that "rid" of coins without complications. As are all other, the things connected with money are regulated very practically and even a foreigner can adapt to them quite soon. I often get the feeling that it is unnecessary to be thinking too much about how to cope with things, since everything is taken care of as optimally as possible.(to be continued)

イギリス人名資料事典

編集責任: マイク・クラフター (イギリス文化情報) | 全16巻

- ◆定価: 494.550円号 (原水49471,000円号) (送料別)
- ◆体裁: 155判・1巻・総約8,350頁 (各巻平均約520頁) (送料別)

■編集後記 ■学術 mini 情報誌「PS JOURNAL」特別号をお届け致します。
◆今回は今までの小輪とは些か趣が違います。英文です。サッカー日本代表のオシム監督の隣国、スロヴェニアから在外研究で日本に来た Drago Unuk 氏に人を介して原稿を依頼しました。シュリーマンではありませんが、現代版日本印象記と言ったところでしょうか。異文化体験を母国語でない外国語で綴る、しかも初めて東洋の日本のことを書く、これは「異文化の位相」というテーマにぴったりです。この特別号は、中国、日本、イギリスの方々そしてもちろんスロヴェニア人の著者と人の和で出来上がりました。諸事情により大分遅れての掲載ですが、ここに謝して2回に分けて全文掲載致します。日本語訳は次号です。ご一読下さい。(k)

PS journal 2006 特別号 2006年11月30日 発行

●発行・編集: 日本図書センター-P&S PS Journal 刊行委員会

PS Journal 編集部 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-10-6

TEL:03-5940-5474 FAX:03-5940-5476 e-mail:nps2@nihontoshokyo.co.jp

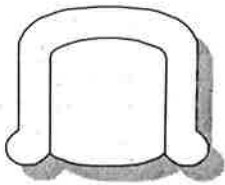
◎記事の無断複製、転載を禁じます。

●学術 mini 情報誌・・・フットワークで集めた学術先端情報●

PS

JOURNAL

2006 第8号



PS
JOURNAL

特集：研究者の現在Ⅶ 女性学研究最前線

- | | | |
|---------------------------|----------------|-------|
| ■中国女性学の最新動向 | 中華女子学院大学客員教授 | 大浜 慶子 |
| ■ジェンダ-統計に関する研究 | 日本女子大学助教授 | 天野 晴子 |
| ■ジェンダ-研究とセクシュアリティ研究の交差 | | |
| | 女子栄養大学専任講師 | 田代美江子 |
| ■NPO と女性の学習 | 市原看護学校非常勤講師 | 山澤 和子 |
| ■学校女性管理職の研究 | 日本女子大学助手 | 高野 良子 |
| ■「家庭教育」の歴史研究について | | |
| | 彰栄保育福祉専門学校専任講師 | 藤枝 充子 |
| ■戦後(1970年代まで)の女子教育研究をめぐって | | |
| | 日本女子大学教授 | 真橋美智子 |

大浜 麗子(中華女子学院大学客員教授/ 女子教育)

去る2005年10月18日より三日間、湖南省長沙市で中国婦女研究会婦女教育専門委員会主催の「女性教育と女性発展国際シンポジウム」が盛大に催され、私も参加する機会に恵まれた。

湖南省は偉大な革命家毛沢東を生んだ省である。最近では、地元テレビ局の制作した大衆娯楽番組が次々と記録的ヒットを飛ばすなど、新規事業への取組も活発で、また女性の活動もめざましいものがあった。今回の大会の運営、実行を買って出たのも、新生女子大学として注目を浴びつつある湖南女子職業大学であった。

大会では同省出身者で、全国婦女連の莫文秀副主席、教育部の呉啓達副部長らの報告があり、中国の今後の発展を見据えた、マクロな視点での男女平等の課題や女性教育の目標が述べられた。分科会では「女性幹部教育と女性の発展」、「女性の発展と和谐社会」、「女性学体系の構築」、「女性高等教育の歴史的現状、国際化の趨勢と対策」などのテーマをめぐる、各地で女性教育の最前線に立って活躍している専門家や実践家たちが互いの経験を語り、意見を交換し合い、結束を固める光景が随所に見られた。

ところが今回の会議に出席して分かったことが、主催者である中国婦女研究会婦女教育専門委員会は、上は全国婦女連の幹部から下は地方の女性幹部学校や大学教員に至るまで、強力なネットワークと動員力を有する組織であった。会の紹介によると、同委員会は中国婦女研究会の傘下にあり、女性教育事業に専門に取り組む二級学会という位置づけで2003年に発足している。一方、委員会の母体である中国婦女研究会は「女性理論と実践について研究する全国区の学術団体」として1999年に設立された。こちらは彭珮雲全国婦女連名誉主席を会長とし、女性学分野で実績をもつ多くの精鋭を擁する、中国に現存する最大にして主流の女性学会である。要するに、先に女性問題やその理論構築に取り組む全国的な専門家組織、中国婦女研究会が形成され、その次なる要請から、婦女教育専門委員会が内部に醸成されたと考えられる。そして、こういった動きを把握することが、中国の女性学発展の大きな流れをつかむ一つのカギといえようである。

中国の女性学の誕生は80年代に遡る。改革開放への政治路線転換によって、効率優先の経済政策がとられるようになったが、これに伴ってレイオフされる女性労働者が増大、女性の家庭への回帰が叫ばれる等、新たな課題に直面するようになった。まさにこういった流れに平行して、一部の女性たちは女性性を極端に否定し、男性並の平等を図ろうとした60、70年代の反動と見直しから、自然体の自分を探し求めるようになった。この間、中国の学術界は長い空白と閉塞状態から一挙に解き放たれ、知的飢えを急進的な思想で満たすようになり、女性研究分野においては「有性論」を唱えた李小江という個性的な、土着の女性学者を排出するに至った。李小江はマルクス主義の中から生まれたとある研究者は分析するように、この時期は、従来の男性並悪平等への問い直しから中国女性学という新興

学問を生み出すことに寄与したが、それはあくまでも中国内部で生起する変質枠組の中で進行し、主流としての中国の伝統的マルクス主義婦人運動の権威性そのものまでを揺るがすものではなかったといえよう。

大きな転機は、世界的な一大イベントとなる第四回世界女性大会への準備段階で訪れた。世界中の女性の目が中国に注がれ、首都北京が国際的な女性運動の象徴、求心力となるにつれて、否応なしに中国もその歯車に組み込まれ、そして自身もまた変革を見たのである。それは自国の社会主義女性運動とは別系統の女性運動との出会いであり、また西側発の異質な運動の成果を内部に取り込む過程であった。「北京宣言」、「行動綱領」のコア概念「ジェンダー視角」は中国語版では「性別観点」と訳され、以後国内政策に反映されることになる。「中国婦女発展綱要(2001-2010)」作成に当たっては、さらに明瞭な「社会性別意識」という訳語が当てられるようになり、「女性と教育」の項目では、高等教育において女性学、マルクス主義女性観、ジェンダーと発展等の科目を開設し、教師や学生のジェンダー視角を強化することが明記された。即ち中国独自の社会主義の女性運動と国際的なフェミニズムの成果の両方を生かして、男女平等の社会を構築していこうという試みがなされているのであり、ここに理論上の突破を見、中国女性学の新たな地平が切り開かれたといえる。

現在、中国女性学は第三の発展期に入っている。北京会議以降、中国の女性学・ジェンダー研究は飛躍的に伸展しているが、そればかりではない。北京会議の勢いに乗って女性研究センターが全国各地に生まれ、市場経済の発展に後押しされる形で、歴史から姿を消していた由緒ある女子大学が再生を果たしたり、新中国成立後、各地に設けられた女性幹部学校が女子大学に昇格したり、総合大学の中に女子学院が設置されたりと組織単位で独立発展し、女子高等教育機関が相次いで形成される局面を迎えている。

中国女性学の次なる目標は、いかにして学問の規範化、体制化を図っていくかである。この課題と呼応して、これら全国に新設された女子大学・女子学院や既存の女性幹部学校を同じ目標の下に連携させ、女性学構築、普及の先鋒隊として位置づけ、女性特有の心理や性質に基づいて女性の潜在的能力を引き出すカリキュラム、教育方法を開発し、女性の人材育成、率先して社会の男女平等推進事業に貢献していこうという運動が活発化している。中国婦女研究会婦女教育専門委員会はこのようなプロセスに置いて発足し、今後その役割が期待されようである。

また今回の大会で、私の発表に熱心に耳を傾けて下さった大勢の専門家たちと向き合いながら感じたことは、日本を含めた海外の女子教育や女性学の実践に対する関心が中国内で非常に高まっているという事実であった。

百年余り中断することなく発展してきた日本の女性高等教育や女性学の経験は、中国に何を伝えられるのか、存続自体が問われている日本の女子大学と新生の中国の女子大学は果たしてどのような建設的対話が可能かといった問題について改めて考えさせられた会議であった。

天野晴子（日本女子大学助教授/生活経営学）

はじめに

社会における女性と男性に関する現状と問題を反映して作成されるジェンダー統計は、統計作成、統計分析、統計の提供・配布と貯蔵のすべての段階においてメインストーリーミングされることで、ジェンダー問題の実情の客観的な把握、問題解決のための政策、プログラム、プロジェクトの基礎を提供し、政策の進捗（進み具合）を監視し、男女平等に向けて社会を変革していく「道具」[Hedman et al. 1996]となる。ジェンダー統計の必要性に対する認識は、特に第四回世界女性会議以降広がり、北京行動綱領には多くの指針に具体化されて盛り込まれ、UNECE（国連ヨーロッパ経済委員会）や各国における先進的な取り組みも急速に展開しつつある。

独立行政法人国立女性教育会館（以下、NVEC）は、ここ数年ジェンダー統計の推進に大きな役割を果たしており、2001年に2年間にわたる「ジェンダーの視点に立った統計データの内容、提供の方法等について研究し、その成果としてデータ集を作成する」ことを意図して、「ジェンダー統計調査研究会」が設置され、私もメンバーの一人として参加してきた。ここでは、国際的なジェンダー統計論議と統計の品質論の今日的水準をふまえ、ジェンダー統計性と「統計利用者の使いやすさ」（user-friendliness：ユーザフレンドリネス）が重視される。前者のジェンダー統計性については、「統計が性別区分をもっているか」のみを問題とするのではなく、「日本の政府統計がジェンダー問題を明示できる統計になっているか」にポイントが置かれる。すなわち、女性と男性についての統計ではなく、ジェンダー問題の現状が客観的に把握できること、この現状をもたらししている原因・要因などの背景と、この現状がうみ出している影響・結果をも統計で示すことができるかが重要である。このことによって、ジェンダー統計は問題解決に向けての説得力となり、そのための計画・政策の立案に役立ち、数値目標を導入すればその政策に具体性が伴い、実施可能性が期待できるし、さらにその政策の実施や効果を継続的に評価していくことにも役立つからである。

ジェンダー統計に関する理論と運動は国際的に長い歴史を有するが、1990年代は第4回世界女性会議の行動綱領におけるジェンダー統計充実の要求をはじめ、国連諸機関のジェンダー統計への取り組みが活発化し、ジェンダー統計の基本的テキスト（Hedman et al. 1996及び各国語翻訳版）の出版も特徴的であった。2000年には国連統計部により*The World's Women 2000*が刊行され、国連諸機関における統計のメインストーリーミングの継続的取り組みと、これらのバックアップによる途上国や世界各地におけるジェンダー統計書の作成が進

められてきた。ここ10年の動向をみると、国連ミレニアム開発目標で示された課題や各種の国際会議・国際的・地域会議でとりあげられた諸課題にジェンダー視角の広がりがみられ、その内容や決議文書には各課題に対応したジェンダー統計の必要性が盛り込まれるようになってきている。

アジアに注目すれば、APEC（アジア太平洋経済協力会議）やUNESCAP（国連アジア太平洋経済社会委員会）統計部等を中心とするジェンダー統計推進活動が活発化している。

上記のような国際的な進捗状況に照らすと、日本は先進国の中ではジェンダー統計に関して出遅れ気味であったが、ここ数年で注目すべき大きな進展がみられ、ジェンダー統計に関しては一つの画期をなしたといえる。

まずは、政府関連機関においてジェンダー統計強化への取り組みがはじまったことである。男女共同参画会議 苦情処理・監視専門調査会は、2002年度後半からの主要テーマとして「男女共同参画にかかわる情報の収集・整備・提供」の実施状況の監視をとりあげ、筆者もヒアリングを受けた。統計機関においても注目すべき前進があった。すなわち、2003年、「各府省統計主管部局長等会議」の『統計行政の新たな展開方向』においてジェンダー統計がうたいこまれた。『統計行政の新たな展開方向』では、「社会・経済の変化に対応した統計の整備」の第9項目に「ジェンダー統計の整備」が掲げられている。内容は、「背景・現状」として国際動向と先の男女共同参画会議との関連に言及し、「基本方向」では、「①事業所・企業を対象とする統計調査において、その調査目的に照らしつつ、可能な限り従業者等の性別を把握するよう努める ②調査結果の表章に当たっては、原則として性別データの表章を行うとともに、可能な限り、データの利便性に配慮した表章方法を採用よう努める」の2点が明記され、「具体的方策」では各府省における実施と留意点が示されている。実質的に今後の統計行政に大きな影響を持つ同会議の文書でジェンダー統計が位置づけられたことは、今後の統計行政におけるジェンダー統計のメインストーリーミングに根拠を与えるものとなる。

研究分野では、すでに全国研究総会でジェンダー統計セッションを設置してきた経済統計学会に2002年3月、「ジェンダー統計研究部会」が設置され、活動を強化し始めた。

日本におけるジェンダー統計推進活動は、今後UNECEウェブサイトや諸機関のジェンダー統計推進活動とのリンクや、統計行政におけるジェンダー統計のメインストーリーミング実質化、これらを通してアジアを含む国際的連携の中で貢献が求められているといえる。

ジェンダー研究とセクシュアリティ研究の交差

田代美江子 (女子栄養大学専任講師/教育学・性教育史研究)

(セクシュアリティという概念)

日本において、性の問題を取りあげる際にセクシュアリティという用語が使われるようになったのは、1980年代頃からである。90年代に入るとセクシュアリティ研究の勢いは増し、現在、社会学、社会史、女性史、ジェンダー研究などの諸分野において、セクシュアリティの問題は最重要課題となっており、すでに多くの研究成果が蓄積されつつある。性をめぐる研究は、それ以前にも、性科学、性心理学といった分野でなされてきたが、このような人文・社会科学の分野でのセクシュアリティ研究の隆盛には、1976年に著されたミシェル・フーコーの『性の歴史1知への意志』（渡辺守章訳、新潮社、1986年）の影響が大きいと言われている。

以来、セックス、ジェンダー、セクシュアリティ概念の区分や関係性も含め、セクシュアリティの定義については多くの議論が積み重ねられてきた。しかし、現在にいたっても、共通の厳密な概念定義がなされていないというのが一般的な見解である。セクシュアリティの定義をめぐってよく取りあげられるのが、1964年に設立されたアメリカ性情報・教育協議会(SIECUS)の中心メンバーであったカークエンダールのセクシュアリティ概念であろう。それは、「セックスとは、身体部分や、それに関わる行動の総称として考えてきたが、セクシュアリティでは、人間の身体の一部としての性器や性行動の他に、他人との人間的なつながりや愛情、友情、融和感、思いやり、包容力など、およそ人間関係における社会的・心理的側面や、その背景にある生育環境などもすべて含まれる」(『現代性科学・性教育事典』小学館、1995年)というものである。同じSIECUSの設立メンバーの一人であったカルデロンは、セクシュアリティを「性教育において最も重要な概念」として位置づけた。これは、Sex educationからSexuality educationへの転換を意味するものでもあった。ここで重要なことは、セックスという概念で扱われてこなかった性をめぐる人間関係や社会的背景を性教育の問題として位置づけていくという積極的な意図を持って、セクシュアリティが定義されたことにある。

(セクシュアリティ研究とは)

セクシュアリティは、ジェンダーの対概念とされている生物学的な性を表すセックスと非常に近接するというイメージがあるため、きわめて本質主義的なもの、つまり、生物学的な雄・雌といった性差に規定されるものとして捉えられがちである。しかし、セクシュアリティはむしろ、ジェンダー概念と同様に、社会的・文化的に

つくられた性のあり方を明らかにしていくために生み出された概念である。

比較的早い時期からセクシュアリティをめぐって多くの発言をしてきた上野千鶴子は、『岩波女性学事典』（岩波書店、2002年）において「セクシュアリティ」を次のように定義している。「性に関わる欲望と観念の集合。最初日本に紹介されたときは「性的欲望」と翻訳されたが、のちに性にかかわる現象の総体を示す用語として「性現象」と呼ばれるようになった」と。そして、セクシュアリティは「自然」と「本能」にではなく「文化」と「歴史」に属するのだと指摘している。セクシュアリティを社会科学の問題としてどう対象化していくかという立場にたつとき、最も重要な点は、セクシュアリティの社会構築性にある。つまり、セクシュアリティ研究とは、セクシュアリティがジェンダーと同様、社会的・文化的につくられてきたものであるという前提にたち、それがどのように語られ、考えられ、つくられてきたのか、あるいはつくられてきた「セクシュアリティ」がどのような役割を果たしてきたのかなどについて、その歴史的背景や社会状況との関連で解明していくことなのである。

(セクシュアリティの視座)

最終的には、ジェンダー研究とセクシュアリティ研究の厳密なすみわけは不要だと筆者は考えている。実際、女性史研究を始めとしたジェンダー研究の分野では、セクシュアリティは不可欠の重要な課題となっている。しかし、セクシュアリティという概念の登場とその意識化によって、それまでのジェンダーの視座からは見えにくかったところに光が当てられたことも事実であろう。それはどのようなテーマだったのだろうか。それは、フーコーが問題にした性的欲望、あるいは性愛、情動的・身体的快楽の領域、そして近年のセクシュアリティ研究の中心課題である性自認、性的指向の問題などである。そこには、性同一性障害、トランス・セクシュアル・トランス・ジェンダー、インターセックス、ホモセクシュアル・ヘテロセクシュアル・バイセクシュアルなどの問題が含まれる。もちろんその他にも、セクシュアリティの概念が登場する以前から、民俗学や歴史学の中で積み重ねられてきた婚姻や生殖、買売春、(戦時も含む)性暴力といった領域もセクシュアリティ研究のテーマとして位置づけられるであろう。

ジェンダーとセックスが対概念として定着しているのに比較し、セクシュアリティとセックスの関係が親密なものとなされる傾向を考えると、より「生物学的」性だと信じられてきた部分の社会構築性に踏み込むことを指向したのが、セクシュアリティの視座なのではないだろうか。だとすれば、ジェンダーとセクシュアリティは、相互補完的に「性の社会構築性を解明する」といった目的に寄与する概念であり、視座なのである。

山澤和子(日本女子大学院生/市原看護学校非常勤講師)

現在、女性たちは大学、社会教育施設、カルチャーセンターなど様々な成人教育の場で学習をする機会に恵まれているが、NPO もそのひとつである。1998年にNPO法(特定非営利活動法)が成立してから、年々NPO法人の数は増加し、2005年9月現在では23,603のNPO法人が全国で活動している。活動分野別に見ると、保健・医療・福祉、社会教育、学術・文化・芸術・スポーツ、国際協力、環境の保全、男女共同参画社会の形成、子どもの健全育成など多岐にわたっている。その割合は保健・医療・福祉56.8%、社会教育47.1%、学術・文化・芸術・スポーツ32.1%、国際協力21.5%、環境の保全28.9%、男女共同参画社会の形成9.0%、子どもの健全育成39.5%などである。女性達だけで運営するNPO法人も増えており、ジェンダーの視点で、女性の自立をめざしているNPO法人(特定非営利活動法人)4団体を紹介する。

神奈川県にある「WE21 ジャパン」は国際援助活動を目的とし、30～50代の主婦たちがリサイクルショップを運営するNPO法人である。その収益金をアジアの女性たちの、生活の向上と自立を助けるために、アジアのNGOなどに寄付をしている。1998年に第1店舗を開店し4年間で48店舗と増加を遂げているのは画期的である。WEは「Women's Empowerment」の略で、女性の力を高め、市民と市民の交流の中から、アジアの平和を築くというビジョンを表している。会員や地域住民を対象とした、ショップ開店のための講座やNGOについての学習、各国の料理教室などの学習機会を提供している。支援先の調査や人々との交流のために、タイやカンボジア、フィリピンなどへのスタディーツアーもおこなっている。講座での学習や現地の人々と寝食を共にするスタディーツアーは異文化への理解を深め、女性たちの意識変容を促している。寄付や会費にだけに頼らず、女性たちが自ら事業を起こし、その収益によって活動を拡大している理由は、中年期の女性たちがそれまでに培ってきたネットワークにあるといえよう。

一方、名古屋では、子育て中の専業主婦たちが託児所つきコンサートの企画、運営をおこなうNPO法人「SKIP」が活動している。名古屋市女性会館の講座で出会った、子育て中の4人の母親たちが、子育てをしながらもクラシック音楽を聴きたいと、1994年に全国初、朝の託児付き本格的クラシックコンサートを開催した。スタッフの「子育て中も私らしく輝きたい」という願いが、多くの同世代の母親たちに共感を与え、コンサートは成功したのである。子どもたちは成長するため、主要スタッフは随時代交代をしているのがこのNPO法人の特徴だ。2001年には「ママたちのモーニングコンサート」と題する本も出版した。活動の意味を考える、女性学を学びたい、自分のことを話したいとの希望により講座の企画を兼ねた学習会をおこなっている。彼女たちは「専業主婦、子育て」というスキルは専門性であると考えている。家事や子育ては仕事とはみなされない現在の社会状況下で、この考えは注目すべきであろう。1998年の男女雇用機会均等法が施行されたところに、総合職としてOLを経験し、男性と対等に仕事をしてきた能力を、今度は芸術・子育て活動にと発揮しているのである。

大阪では、ジェンダーフリーな社会の実現をめざし、ジェンダー教育を社会に浸透させるために、学校や行政に出前講座をおこなっているNPO法人「アートフル・エフ」が活動している。子どもたちは常にメディア(TV・ラジオ・新聞・絵本・雑誌など)や教科書からジェンダーのすり込みが行われており、幼児期からのジェンダー教育は特に必要である。「アートフル・エフ」は性差にこだわらず、「自分らしく」生きるための社会の実現を、市民の立場から推進している。ジェンダーフリー教育プロジェクトを立ち上げ、幼稚園、小学校、保健所などで、子どもや保護者たちに出前講座による学習機会の提供をしている。オリジナルな人形や紙芝居教材を作成し、ゲーム・ロールプレイなどの方法を取り込みながら、自主公演を行っている。大人向けには市、公民館、女性センターとの共催の講座の開講、市民の意識啓発のための情報誌の発行、助成金事業、教職員研修や講座に講師を派遣する活動もおこなっている。全国的な取り組みへの発展にも意欲的である。

スポーツ分野でも女性の地位は低く、茨城県に本部を置く「ジュース」は1998年に男女平等をめざして、日本初のNPO法人となった。女性の地位の向上のために、女性指導者・研究者などへの支援事業、男女共同参画社会とスポーツをテーマとした啓発事業、女性スポーツに関する国際会議などの開催事業などをおこなっている。日本にとどまらず世界的に活動しているNPO法人である。行政や大企業(博報堂、全日空、NIKEなど)との関係が深いことが世界規模な活動を可能にしている。男性たちのサポートを得ているのも特色である。2001年にアジア女性スポーツ会議を大阪で開催し、シドニーオリンピック委員会へも会員を派遣した。2006年には熊本市の賛同を得て、第4回世界女性スポーツ会議を日本で開催予定である。国内では女性のスポーツ振興のためのワークショップや、女性指導者セミナーなどを開講している。2001年の文部科学省委嘱事業(女性のエンパワメントのための男女共同参画学習促進事業)などの研究活動も行っている大規模なNPO法人である。

取り上げたNPOは、活動の分野は異なるが、スタッフのジェンダーに対する思いが、活動の起爆剤になっている。家族や男性たちも理解をしめし始めており、これらの活動や学習は、女性の立場・視点から生活、団体、社会を変えようとするもので、女性たちのエンパワメントになっている。

取り上げたNPOは、活動の分野は異なるが、スタッフのジェンダーに対する思いが、活動の起爆剤になっている。家族や男性たちも理解をしめし始めており、これらの活動や学習は、女性の立場・視点から生活、団体、社会を変えようとするもので、女性たちのエンパワメントになっている。

学校女性管理職の研究

高野良子(日本女子大学助手/女子教育)

女性の職域の拡大や社会的地位の向上は、「女性初」という表現と共にこれまで数多く報告されてきている。ところで、教育の場における「女性初」、例えば、各都府県における戦後初の女性公立小学校長はいつ、どのようにして誕生したのであろうか。

学校教育の場も社会の縮図的側面を多分に持ち、学校段階や管理職や校務分掌における教員配置にも性別構成の不均衡が存在し、長い間、学校管理職は男性で占められてきた。文部科学省「学校基本調査報告書」各年度版により、女性公立小学校長数と比率の推移を追ってみると、戦後まもなく各県に2人前後の女性公立小学校長が配置され、1949(昭和24)年度には男性20,566人に対して女性校長は108人、女性の比率は0.5%であった。1953-1964(昭和28-昭和39)年代にはやや減少し80人前後の0.4%台で推移するが、再び上昇に転じ、1969(昭和44)年度(152人)から1988(昭和63)年度(595人)まで女性校長は毎年全体で20人前後増え、1989(平成元)年度的女性校長比率は3.1%(731人)、1996(平成8)年度には1割(10.8% 2533人)を超えた。そして、2005(平成17)年度「学校基本調査速報」によると、2004年度より学校数が249校減少する中において、男性校長は250人少ない18,149人に留まるものの、女性校長は1人増えて4,028人、その比率は18.2%に達している。女性の校長占有率は依然低率であり、すでに6割を超えて久しい女性教師率とのアンバランスは否めないが、戦後すぐの比率と比べ隔世の感がある。

今日まで、女性教師を対象とした研究の成果は蓄積されているものの、学校女性管理職の登用とキャリア形成過程を質的、量的かつ歴史的に明らかにした実証的な研究は極めて少ない。それでは、女性にとって前人未踏に等しい「管理職」という男性の聖域に足を踏み入れた先人たちはどのようなキャリアを持ち、パイオニアとしての役割をどう受割したのであろうか。

筆者は、このような問題意識を出発点として、戦前・戦後の女性公立小学校長の草創期から漸次的に女性校長数の拡大が進む1980年代までを、統計上における量的変化に着目し、戦前期、戦後第Ⅰ期1946-1952(昭和21-27)年、第Ⅱ期1953-1964(昭和28-39)年、第Ⅲ期1965-1988(昭和40-63)年の4期に時期区分し、戦前と戦後における2府県を除く45都道府県的女性校長第一号、そして後続した女性校長の登用とキャリア形成を中心に、各県教育史、地方新聞などの資(史)料および校長経験者を中心とした41人への聞き取り調査に基づき、〈教職ジェンダー〉というフィルターをとおして、女性校長の量的拡大過程を歴史的に照射することを意図した研究をおこなってきた。

ここでは、戦後第Ⅰ期1946-1952(昭和21-27)年にみる、女性校長第一号の登用事例を一つ紹介しておきたい。昭和20年代の女性校長とは、各県における戦後初の女性校長たちといってよい。GHQの占領政策の基本方針における一連の教育の民主化政策に導かれて、GHQ・CI&E(民間情報教育局)の地方

軍政部教育課の手により小学校を中心に女性校長が登用されていた。新潟県は他県に先駆けて4人の女性校長第一号の登用をおこなった県である。そのうちの一人長谷川マサは、1946(昭和21)年、下条国民学校に校長として着任した日に次のような歌を詠んでいる(渡辺紀子「長谷川マサ」新潟女性史クラブ『雪華の時をききむ』ユック舎、1989年。)

泣き濡れて 神に祈りし 幾夜をか 過ぎて心の すがしこの朝

女性校長第一号としての不安な気持ちと覚悟の心情が32文字に吐露されている。新潟県を始め各県における戦後の女性校長第一号登用は、婦人解放や教育刷新を始めとする一連の占領政策の一環ともたらされたものであり、女性教師の覚醒に先んじて、教育行政機関の主導によって女性校長は実現を見たのである。しかし、この全国的な女性校長第一号の誕生は、「時代が変わり、女の校長先生が出きたそうだが、それにしても女の校長の下で働く男の先生の顔がみたい」とか、「女の校長で俺たちの村が損をした」あるいは「ポツダム校長」などと揶揄する声がある中での船出であった。上述の長谷川マサも例外に漏れず、就任当初は敵陣に一人放りこまれたようなものだったが、「自主的学習」の県指定研究校引き受けなどの取り組みが教職員の力量を高めることに繋がり、教職員の協働体制を整えるとともに、村民の教育への関心や理解を高いものにしていき、女性校長への不安を払拭させている(『前掲書』)。新潟県の長谷川マサ校長同様第一号の大半は、日露戦争開戦の年、明治37年頃に生まれた気骨ある女性たちであった。

前述のように女性校長比率は、50数年の歴史を経て、0.5%の超低率段階からしばらく18.2%まで拡大した。では、今世紀に次の段階へと駒を進めるためには、女性教師側とそれを取り巻く社会の側に更に何が必要とされるのか。その鍵は、女性校長のキャリア形成過程を歴史的に明らかにすることのなかから見いだされるのではないだろうか。そしてこの問い直し作業は、男女共同参画社会を男性と共に担う性、すなわち、もう一方の自律的な担い手であるべき女性の更なる向上に資するものと考えている。

「家庭教育」の歴史研究について

藤枝充子(彰栄保育福祉専門学校専任講師/家庭教育史)

家族が、その子どもに対して、生活の中で行う教育的営みの、近代日本におけるあり方とその歴史の変遷に興味を持っている。1890年代以降は、さまざまな社会的要因を背景に、家族内で読まれることを主たる目的とした、家庭における教育の目的、内容や方法を体系的に論じている単行本形式の著作物(以下、「家庭教育書」と表記する。)が、数多く出版されるようになった。筆者は、これまで、家庭教育と学校教育との関係などの視点から、それら「家庭教育書」を分析し、そこに展開される家庭教育論の内容を明らかにしてきた。これは、「家庭教育書」が、頂点的思想家や教育学者の言説と日常の家族生活の中間にあり、従来とは異なる子どもに対する教育的営みのあり方を普及させる点で、一定の社会的役割を果たしたと考えるためである。

ところで、家庭教育といっても、その語に込める意味は、使う者の立場によって異なる。歴史研究について述べれば、近代家族に関する社会史研究は、アリエスの研究に代表されるように、子どもや家族などの自明とされていた事柄の歴史性を明らかにしてきた。それまで、家庭教育を当然あるものとし、自伝や回想録から家庭教育の実態を解明すること、思想家や教育家の家庭教育観を分析することが中心であった家庭教育の歴史研究も、社会史研究の影響を受け、家庭教育とは何かや家庭教育という概念の成立過程が検討されるようになる¹⁾。それらの研究により、家庭教育が、近代以降に成立した学校教育の対概念として登場し使用されはじめた語であること、したがって、その意味するところは、家庭で行う学校教育、学校教育を補完するために家庭で行う教育であることが明らかになった。そして、「家庭教育書」でも、この意味で家庭教育という語をほぼ使用している。このように家庭教育は、近代以降に成立した概念であり、家族がその子どもに対して行う教育的営みの一部分を表すに過ぎない。さらに、現実の子どもは、学校教育とそれを補完する家庭教育のみを受けて成長するのではもちろんない。そこで、主に近代以前の子どもに生活に着目し、あらゆる生活場面で見られる、大人から子どもへの働きかけとその工夫を、例えば、しつけや子育て、あるいは「家族のおこなう教育」や産育と表現し、子どもの人間形成の実態を解明しようとする歴史研究が行われるようになった²⁾。筆者は、家族がその子どもに対して、学校も含めた生活の中で行う教育的営みを、「家庭教育」と表記し、学校とそれに関わる教育以外の教育的営みを重視していきたい。

また、現在は、一人ひとりの生き方や男女の役割、そして家族のあり方が変化すると同時に多様化してきている。加えて、子どもの育ちをめぐる状況に目を向けた時、育児不安や虐待をはじめ種々の問題が生じている。そのような中で、これまで母親に比べ取り上げられることの少なかった父親が取り上げられるようになった。例えば、心理学の領域では、アンドロジニーが最も望ましい発達であるという人間観、発達観に基づき、母親のみが子どもの養育の担当者とする従来の研究を批判、男性性と女性性とを備えた父親が、子どもの発達に果たす役割を明

らかにする研究³⁾、そして、社会学の領域では、現在の家庭の中で父親の育児参加の実態を解明する研究などである。さらに、歴史研究では、ジェンダーの視点から、近代的性別役割分業が成立する時期の父親や父性に関する言説研究が行われるようになった⁴⁾。

ここまで、家庭教育に関する研究の現状を説明してきたが、最後に、近代以降の「家庭教育」の歴史研究に求められることを、筆者の関心にひきつけて述べておきたい。第一は、子どもに対する教育的営みの実態史研究である。これは、学校教育とその補完としての家庭教育を含みつつ、これまで充分に取り組まれているとは言えないそれ以外の教育的営みの実態を明らかにすることである。しかし、子どもの生活は、家族以外の人々、共同体や地域社会へと広がっており、その意味で、先の「家庭教育」では、子どもへの教育的営みを捉えきれない。この点については、史料の問題とあわせて、家族、共同体、地域社会についての理解を深めることが必要であり、今後の課題となっている。第二は、言説研究についてである。近年の研究動向として、父親や父性の役割が注目されるようになったことは先述した通りである。しかし、未だ、近代日本の「家庭教育書」の中で論じられている父親や父性が明らかになったとは言えない。そこで、近代日本の「家庭教育書」に描かれている父親や父性の役割の解明を進めることが必要になる。加えて、子どもの性別による「家庭教育」の違いに着目する必要があると考えている。これは、近代的性別役割の習得が子どもへの教育的営みの中でどのように目指されたのか、あるいは、目指すべきとされたのかを明らかにする視点である。第三には、実態史研究と言説研究の双方でさらに深めるべき視点として、子どもを中心に、母子や父子、父母、きょうだいの関係に注目することで、子どもの性別による教育的営みの違いなどがより明らかになると考えている。

- 1) 例えば、小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1992年、そして、山本敏子「明治期における〈家庭教育〉意識の展開」日本教育史研究会『日本教育史研究』第11号、1992年がある。
- 2) 代表的な研究に、中内敏夫「家族と家族のおこなう教育—日本・17世紀～20世紀—」一橋大学『一橋論叢』第97巻第4号、1987年、「産育と教育の社会史」編集委員会『叢書〈産育と教育の社会史〉』全5巻、新評論、1983年から1985年、そして、中内敏夫、田嶋一他『叢書〈産む・育てる・教える—匿名の教育史〉』全5巻、藤原書店、1990年から1995年がある。
- 3) 柏木恵子編『父親の発達心理学—父性の現在とその周辺』川島書店、1993年。
- 4) 最近の研究として、海妻怪子『近代日本の父性論とジェンダー—ポリティクス』作品社、2004年がある。

戦後（1970年代まで）の女子教育研究をめぐって

眞橋美智子（日本女子大学教授・女子教育）

戦後教育改革で、すべての国民に対する教育の機会均等、男女共学などが実現し、明治以来の男女差別的な教育は制度上は解消されたものの、その後も女子教育は多くの問題や課題を抱えつつ推移した。特に敗戦から、1970年代頃までは日本の社会・経済の急激な変化を受け、女子教育政策にも改革から見直し、逆コースともいえる状況がみられた。一方、女子の大学進学者の急激な増加など実態面での変化やそれに伴う問題・矛盾なども表面化した。そのなかで女子教育研究も徐々に本格化したのが、2004年か2005年にかけて刊行された『現代日本女子教育研究文献集』全30巻・別巻（日本図書センター）はまさにその時代の代表的な女子教育研究文献を収録している。

その後の女子教育研究は、単に女子教育という枠に限定せず、ジェンダーの視点から広く研究が進められるようになった。90年代頃からは「学校教育とジェンダー」研究やジェンダーフリー教育の実践が広がりをみせた。その一方で、近年、ジェンダーフリー教育に対して、一部に「性差を否定する」「人間の中性化を目指す」教育などの批判もあり、論議を呼んでいる。こうした現代の状況を検討する上でも、70年代頃までの戦後前半期における女子教育研究は重要と思われる。

戦後70年代までの女子教育研究は大きく三期に分けられる。第一期は敗戦から50年代を中心とする時期。第二期は60年代、第三期は70年代を中心とする。一期はまさに戦後教育改革が実施され、その一方で早くも「占領行政・政策の行き過ぎの是正」として教育政策の全面的な見直しが始まった時期である。この期の女子教育研究でも最も特徴的なものとして男女共学に関する研究がある。その背景には、戦後の新教育への転換の象徴として男女共学が受け止められたことや、同時に中等教育以降では全く未経験な男女共学に関する理論的・実践的研究が必要に迫られた課題であったためと考えられる。また戦後新しく誕生した家庭科に関する研究も多くみられる。50年代には徐々に中学校や高等学校の家庭科が女子に比重を重くし、女子向き教科に位置づけられていくが、それに関連した研究やその基礎となる歴史研究が目される。また占領下では成人教育に位置づけられた婦人教育も、50年代後半には婦人学級開設委嘱が開始され、婦人学級を中心に婦人教育の実態が拡大していく。婦人教育拡大を背景に婦人教育や学習、婦人学級に関する研究が本格化した。

第二期は1960年代を中心とする、まさに経済の高度成長期で、この時期の女性雇用政策、保育政策、人づくり政策、家庭重視政策などは性別役割分業を前提としており、こうした政策を背景に、学校教育では50年代から始まった家庭科の女子向き教科への転換が徹底され、「女子の特性教育」が強調され、婦人教育でも家庭教育学習に重点が置かれるなど、戦後の女子教育政策の転換が明確となる。女子教育研究はさらに活発になり、家庭科教育関係では教科理論研究が本格化している。また女子学生の急激な増加や「女子学生亡国論」などを背景に、女子大学や女子学生に関する研究や調査報告が目目される。とりわけ女子学生の生活や意識、職業観、生き方など女子学生の現実と将来などが幅広く検討されている。なお60年代は女性教員の増加を

背景に、その歴史研究、女教師論、男女教員の比較研究、生活・労働の実態・意識など多様な研究がみられる。この時期最も多いのは婦人教育に関する研究で、60年代の流れを引き継ぎながら、64年の家庭教育学級開設以降は家庭教育との関連や家庭教育学級関連研究も増加している。

第三期では75年の国際婦人年、その後の「国連婦人の十年」が女子教育政策や婦人の教育や活動に強い影響を与えることになった。70年代前半に高等学校の「家庭一般」が女子のみ四単位完全必修、男子は体育と男女別科目編成が徹底される。80年代には女子差別撤廃条約の批准との関連で見直しを迫られるが、すでに70年代に「女子のみ必修」への批判も強まり、74年には「家庭科の男女共修をすすめる会」が発足し、共修実現に向けて運動を展開していく。研究面では共修運動の活発化を背景に、男女共修や男女平等の観点からの家庭科研究が目される。また二期に引き続き、女性教員研究が活発であるが、その背景には女性教員の増加だけでなく、ジャーナリズムなどの「主観的・体験的」女性教員批判があり、女性教員問題の科学的・実証的な研究につながったともいえる。女子高等教育研究では、女子学生の生活や意識に加えて、女子短期大学の教育や問題点の研究などもみられる。国際婦人年、「国連婦人の十年」を機に婦人教育・学習に関する研究は活発で、なかでも婦人学級・家庭教育学級の自主化運動や女性の学習権と公民館保育室などの研究、女性の生涯学習、女性のライフサイクルと学習などの研究がこの時期の特徴的研究である。

70年代には戦後の民主主義女子教育、機会均等主義の教育がどのような女性を育ててきたのかが問われ、改めて男女平等や女性の主体性などの視点からそれまでの教育が両面直され、その後の女子教育の方向が学校教育・社会教育の両面から提言された。おりしも70年代後半にフェミニズムの視点にたつ女性学研究が始まり、そこから生み出されたジェンダー概念がその後の研究に強い影響を与えることになった。

■編集後記■ 学術 mini 情報誌「PS JOURNAL」第8号をお届け致します。今回のテーマは「女性学の最前線」。女性学の現状が、ピリッとした小論として纏まっております。偏に多忙の中、コーディネーターをお引き頂きました日本女子大学の眞橋美智子先生に感謝です。ありがとうございました。ご一読下さい。(k)

PS journal 2006 第8号 2006年1月20日 発行

●発行・編集：日本図書センター・P&S PS journal 刊行委員会

PS journal 編集部 〒112-0012 東京都文京区大塚3-10-6

TEL: 03-5940-5474 FAX: 03-5940-5476 e-mail: nps@nihontoshou.co.jp

© 記事の無断複製、転載を禁じます。

●学術 mini 情報誌・・・フットワークで集めた学術先端情報●

PS

JOURNAL

2005 第7号



PS
JOURNAL

特集：研究者の現在VI 越境する日本文化

- | | | |
|-------------------------------|-------------------|-------------|
| ■E-ゼは「伯林賤女」に非ず | 金沢大学教授 | 上田 正行 |
| ■プリンストン大学東アジア図書館日本語コレクションについて | プリンストン大学東アジア図書館司書 | 牧野 泰子 |
| ■ドイツ・エル福特大学東アジア史研究室の概要 | エル福特大学教授 | ライナルト・ツェルター |
| ■コライ 2 世日記 挫折と再読 | 大阪学院大学助教授 | 広野 好彦 |
| ■市民と大学生にとっての歴史展示の意味 | | |
| - 「軍事郵便」の運命を危惧して | 専修大学教授 | 新井 勝紘 |
| ■中原中也、新聞を読む | 梅光学院大学講師 | 加藤 邦彦 |
| ■「情報公開法」と「近代史料学」 | 駒澤大学講師 | 熊本 史雄 |

エリーゼは「伯林賤女」に非ず

上田正行(金沢大学教授/日本近代文学)

小池正直の石黒忠憲宛書簡(明治22年4月16日付)が見つかり紙面を賑わせた。森林太郎を追いかけて、はるばる極東の島国までやって来たドイツ人女性、エリーゼ・ヴィーゲルトの正体が何か分かったように思われたからである。この女性の謎に迫ろうと既に数冊の本が刊行されているが、研究者以外でもこの女性に惹かれる人は多いようだ。

今回の騒ぎで残念だったのは、そこに書かれていた「伯林賤女」と「手切、森の「天狗之鼻」が三題断のように結びつけられてしまっ、あたかもエリーゼが「伯林賤女」であったかの如き先人観を認者に与えてしまったことである。いけなかったのは本年2月24日の「朝日新聞」(大阪版)に載った山崎國紀氏の一文である。その紙面で書簡発見者の高橋陽一氏の「日本医事新報」(平成16年6月12日)掲載の記事を知ったが、論旨は山崎氏と全く同じであった。

これに対して、同じく7月6日付「朝日新聞」に『鴉外と手切れ』に異論が載り、『仮面の人・森鴉外』の著者、林尚孝氏の反論が紹介されていたが、論旨が一貫しており私も林説を支持するものである。

林説の眼目は原文に二つの「○」印が付されており、この書簡が三つの部分から成り立っているというところにある。始めにロツツベッキ(小池の他の書簡ではロツツベッキ)と菊池常三郎のことが触れられ、次に橋本綱常の息、春(長男長勝の幼名、『橋本綱常先生』による)の話題となり、最後に森林太郎のことに及んでいるのであり、この文脈で書簡は読まなければならない。

問題は第二と第三の段落にある。まず前者であるが、ヴェルツブルグからやってきた春がベルリンの「賤女」と続いていた関係を、小池の度重なる忠告で漸く断念し、これで手切れになりそうで一安心だと、その経緯を春の父親に報告しようとしているのが趣旨である。綱常も小池から報告を受けて息子と女性とのことを気にしていたのであろう。山崎氏は「文芸春秋」(平17・6)の記事でベルリン・ヴェルツブルグ間の距離を問題にしているが、恐らく春に暫くのベルリン滞在期間があったか、ヴェルツブルグから出かけた折に知り合った玄人の女性がいたと考えれば済むことである。

小池に「烏城紀行」(「中外医事新報」212号、213号 明22・1・25、2・10)があるが、小池がヴェルツブルグを訪れたのは明治21年10月26日から28日の三日間で、旅行の目的を「私事ヲ以テ烏城ニ赴ク」としている。しかし、春の寄寓先を宿としているので春に会うのが最大の目的と考えてよい。紙数の関係で詳述できないが、当然、女性との関係が話題の中心となったことは間違いない。

今一つ考えなくてはならないのは森と小池との関係である。明治22年に入って二人の関係が急速に冷え込む事態になりつつあり(特に小池が森のことを快く思っていない)、とても小池が森のために一肌脱ぐような心理状態ではなかったことである。又、22年4月の時点で既にエリス事件は決着を見ており、ここで「手切金」など出ようはずがない。ベルリンに戻ったエリーゼが、今更、「手切」などと言いつつどこで誰が相手にするのであ

うか。小池は明治21年5月20日にベルリンに入り、6月にはミュンヘンに移っており、それこそ、どうして見ず知らずのエリーゼの苦情を開けるのであろうか。エリーゼが日本を発つ前に、滞在費や旅費を含めて何がしかの手切れに相当するものが森家から支払われたと考えるのが大人の常識であろう。(小金井喜美子の「次ぎの兄」の中には「旅費、旅行券、皆取り揃へて、主人が持つていつて渡したさうです」とある)文脈から言っても「伯林賤女之一件」とは橋本春に関わることは明白であるが、このことを決定付けるのが第三段落である。

小池は森宛の書簡をわざわざ開封して石黒に読ませ、読了後に貼附して森に転送するように頼んでいるのである。何のためか。「天狗之鼻」を控くためであるが、これには石黒も同意してくれるであろうという読みがあった。何をさして「天狗之鼻」というのであろうか。それは、直前の「同人ト争フ氣ハ少モ無之候得とも」と関わる。

二人の間に争い(意見の対立)があったのであり、この争いを知るには明治22年前半の「中外医事新報」と「東京医事新誌」を見なくてはならない。最初の対立は「中外医事新報」211号(明22・1・10)に掲載の「在独逸国医学士小池正直氏書翰」に端を発する。主文ではなく通伸が鴉外の反論を招くことになった。まず日本人に日本語で以って研究成果を発表すべきという小池の論に対して、森が「東京医事新誌」565号(1・26)で痛烈にその非なることを難じた。既に「戦論的啓蒙家」の面目は躍如としている。小池は「中外医事新報」220号(5・25)掲載の社員原田宛書簡で自説を繰り返している。これが第一回の契機である。

第二の契機はこれも森宛の小池書簡(「東京医事新誌」566号2・2)にあった。二人の共通の師であるベッテンコーフェルの七十賀の新聞記事の訳載を森に依頼したのが事の始まりである。いけなかったのは森が訳した「ベッテンコーフェルノ逸事」(「東京医事新誌」570号~572号、3・2、3・9、3・16)であった。その前書きで森は小池から送られてきた新聞の切り抜きが不完全なことを指摘し、「記録に漏れて知られずにしまった事柄」と掛ける「逸事」というタイトルを付けたように取れる説明をしている。嫌味な洒落である。小池は憤然として「与森林太郎書」(「東京医事新誌」583号、6・1)を書いた。書簡の日付は4月1日となっているので、今回、発見された書簡の二週間前ということになる。恐らく、この書簡か、あるいは殆ど同じ内容のものが4月16日付の石黒宛書簡に同封されていたのであろう。戦論的啓蒙家の慢心を諷めようとの思いもあろうが、語調から見て、森のやり方に腹に据えかねるものを感じていたのであろう。又、森がドイツや日本の新聞に記事を寄せ「新聞屋」を兼職していることも気に入らなかった。これが「天狗之鼻」の背景であり、小池の森に対する感情は悪化していた。

伝統的保守主義者としての小池の面目は書簡で明らかであるが、同期生とは言え七つ年上の友人に食って掛かる林太郎も相当なものである。戦論的啓蒙家は一切の私情を顧ようとはしない。このような森に小池が私事に渡ることについて、口を差し挟むような余地など全くなかったのである。第二段落と第三段落とは完全に切れていて、繋げられないことはこれで明らかであろう。この書簡からはエリーゼが「伯林賤女」であったという読みはどこからも出せない。

プリンストン大学東アジア図書館日本語コレクションについて

牧野泰子（プリンストン大学東アジア図書館日本語資料担当）

歴史

近年になって East Asian Library and Gest Collection と正式名称は変えたにも拘わらず、当館はゲストライブラリーとして知られている。Guion M. Gest は ゲストエンジニアリングという会社の社長で海外に出ることも多かった。貴重書の収集に熱心で最初に購入したのは光明皇后の願のため紀元740年に筆写された経典だったそうだが、その後はもっぱら中国の善本ならびに貴重書を元アメリカ海軍武官で北京に駐在していた I. V. Gillis 中佐に買い求めさせた。ギリスは満州族の皇女と結婚したため、中国の上流階級と接触でき、多くの善本や貴重書をゲストのために入手できる立場にあった。

大恐慌時代にゲストの会社は経営困難になり、カナダのマギル大学に置かれていたゲストのコレクションはプリンストン高等研究所に買い取られ、そこからまたプリンストン大学図書館に移管され漸く箱詰め状態から陽の目を見ることになったという。ゲストの関心の深かった宗教、本草学、漢方医学にはじまり多くの古典や参考図書なども含まれた善本がその頃までには十萬冊に達したコレクションになっていた。プリンストンに移ってから中国の教育家としても著名な胡適が館長を務めた時期もあった。

日本語のコレクションが始まったのは1950年代末に明治維新期、特に坂本竜馬の研究で知られる Marius Jansen 教授がプリンストンに赴任してからのことだった。ジャンセン教授は美術史の島田修二郎教授や Marion J. Levy 教授などととも常時二、三人の客員教授を日本から招聘しその教授たちにそれぞれの専門領域の基本的また重要な文献収集を依頼して図書館の蔵書の充実を図ったという。また博士課程の学生を雇って当時刊行が始まったばかりの *K.B.S. Bibliography of standard reference books for Japanese studies with description* 全冊を使って組織的な蔵書構築をした。ジャンセン教授の先見の明のおかげで、スプートニク打ち上げでロシアに宇宙工学の分野で先を越され、あせったアメリカ政府が高等教育とくに地域研究に多大な資金をつぎ込んだ1960年代に地域研究およびそれを支える図書館が雨後の筍のごとく乱設された時期に始まったコレクションとしては例外的にしっかりしたコレクションになった。ちなみにアメリカの日本コレクションの半数は1960年代にはじまっている。

本来のゲストコレクションや中国古代から前近代に重きを置いてきたプリンストン大学の東洋学部の中国学を強く反映して日本で出版されたこの時期の中国関係の本や本草関係や中国医学関係の本は殆どもれなく集められている。ゲストコレクションの貴重本はレアブックコレクションとして大学の貴重書図書館であるマッドライブラリーに収められており 中国の外では有数の貴重書のコレクションとして知られているため、国内ばかりでなく中国日本その他世界の各地からの研究者に利用されている。残念ながら17世紀後半の写本の平家物語（30巻もの）のほかには日本の貴重本と呼べるようなものは無い。そのほか地方史は特に四国九州沖縄が充実しているが、ほかにも全国にわたって広く収集されている。

現状および今後の問題

ジャンセン教授やレヴィ教授らが亡くなってからも教授たちが作り出された日本の大学関係とのコネクションは依然として引き継がれ、東京大学史料編纂所京都大学人文研究所をはじめとして多くの日本の高等教育機関から出版物の寄贈が続いているのは有り難い限りである。現在東アジア図書館の日本語資料は書籍が17万冊を越えた。そのほか現在刊行中の雑誌1100タイトル、マイクロフィルム、マイクロフィッシュが16000ある。東アジア学部の規模に比べて学生一人当たりの図書館の恒常予算が他の学部比べて多いのも初期に図書館の重要性を認識した強力な教授陣のサポートのおかげである。

にも拘わらず近年における日本研究の学際化と細分化は図書館にも大きな影響をもたらした。一次資料に対する要求、インターネットのスピードに慣れた利用者の図書館に対する要求は高まるばかりである。必要な資料をすべて自館で持てる時代はとくに過ぎ去ってしまった。グーグルにハーバード、コーネル、ミシガン、スタンフォード大学やニューヨークパブリックライブラリーなどの蔵書を全てデジタル化してのせ、無料で誰でもアクセスできるようにするという最近の大ニュースは画期的な時代を先取りしたものだと思う。日本だけでも7万タイトルの新刊書が毎年出版されている現在、そこでもまだ得られないインフォメーションを共有するためには国あるいは世界全体を視野においての電子化資料を含めての蔵書構築を進めていかねばならないと思う。

ドイツ・エルフルト大学東アジア史研究室の概要

— 人類の四分の一の歴史を学ぶ —

ラインハルト・ツェルナー(エルフルト大学教授/日本近世史)

ドイツ・エルフルト大学東アジア史研究室で扱う東アジア史とは、狭い意味での中国・日本・朝鮮半島・ベトナムの歴史を指すが、広く北東・東南アジアの季節風帯にあって中華文明の影響を受けた地域の歴史もその対象とする。

東アジア史は、人類のおよそ四分の一の歴史であり、紀元前2000年頃の中華文明発祥から現在に至る4000年の長きに及ぶ。すなわち、東アジア史は決して世界史の周縁分野ではなく、その研究は人類史全体の進展を把握するために不可欠であるといえよう。このような認識に立ち、当研究室では歴史学科の学士から博士課程の学生に授業と研究指導を行う他、世界史との関連について当大学の他地域史研究室と比較研究・授業を行っている。当研究室はまた、現在ドイツで唯一の東アジア史研究所として東アジア各国の史学界との交流を進めている。現在、交流協定先の大学は日本では早稲田大学、岐阜大学、横浜国立大学の3校、中国では南京師範大学と北京首都師範大学の2校、および中国第2歴史檔案館、台湾では国立政治大学、韓国ではヨンセイ大学である。

東アジアの文化・歴史的伝統は極めて多様であり、一つの研究室がその全ての側面をあらゆる見地から取り上げることが不可能である。そこで、本大学の東アジア史コースでは、主に以下の四項目に重点を置いている。

1. 東アジア全体の通史に関する基礎知識を概説する。このための教科書として、1999年研究室の設立に当たり初代主任教授に任命されたラインハルト・ツェルナーは2001年にドイツ語圏で75年ぶりの「東アジア史入門」を執筆した。この本は本学以外の各地の大学でも教科書として使われている。
2. 原始から現代に至る日本の歴史を詳しく学ぶ。ツェルナーの専門である日本近世史に限らず、日本文化の発展を特に社会史・文化史の立場から、日本史学の最新の研究成果に基づいてできる限り詳しく紹介する。
3. 中国史を専門とするスタッフを中心に、東アジア全体に重大な影響を与えた中国史上の事柄ならびに研究課題を取り上げる。
4. 東アジア各地に共通する歴史学上の課題を取り上げ、比較する。東アジア文明の諸問題を包括的に学び、古文書学などの歴史補助学を駆使しつつ、社会経済史・歴史人類学・文化史をはじめとする様々な歴史学的視点から論じる。

さらに、日本と中国以外の東アジア諸国の歴史に関わる重大な諸問題や、仏教、儒教、近代化、革命思想などの全地域に共通する現象を取り上げるケース・スタディも行う。

現在進行中の研究プロジェクトは、近世以降のビジュアル文化

をテーマにしている。また、長期プロジェクトとして「東アジアにおける絵と歴史意識」と題し、東アジアの絵画の概念や技術と視覚心像の成立に関する諸問題を取り上げ、西洋のビジュアル文化と比較する予定だ。ビジュアルスタディは現在欧米で盛んだが、理論と歴史家の具体的活動、特に絵画史料に関する方法論は未だに不十分かつヨーロッパ中心主義的で、東アジア史に応用した研究はまだ少数ない。こうした壁を乗り越えるため、ツェルナーはビジュアルスタディの文脈において日本の現代アニメ、特に宮崎駿と高島監督らの作品が日本人の世界観と史観にどのような影響を与えているかを研究中である。中国史が専門のトールルフ・クライン専任講師は、義和団の乱の絵画資料を調査し、個人と共同体が歴史的事件をいかにビジュアルライズ(視覚的に把握・記念)してきたかを研究するプロジェクトを行っている。また博士課程の学生の論文のテーマとして、近代写真が日露戦争の認識に与えた影響や、西洋の印刷技術と近代日本のビジュアル文化との関係を考える研究、また現代中国新疆ウイグル自治区における青少年のテレビ利用を研究するプロジェクトが現在行われている。

その他の計画中の展示企画としては、20世紀初頭に日本、韓国、中国を訪れたドイツ人ジャーナリスト、ゲンテ兄弟が遺した大量の写真を整理・展示し、ツーリストゲイズ(観光客のまなざし)の問題からのみならず、写真家とのコミュニケーションに関わった被写体＝日本人について考察するプロジェクトがある。

さらに作成中の博士論文には、明治初期の起業家の自己概念と植民地政策の関係、植民地時代の朝鮮におけるキリスト教の役割、1970年代の韓国独裁反対運動とシャーマニズムの復活、戦後日本の政治史と政治雑誌の関係、19世紀から第一次世界大戦に至る時代におけるエルフルト大学の地元テューリンゲン州と日本の文化的・人的交流をテーマとしたものがある。

なお、本研究室はミュンヘンのiudicium出版社との提携により叢書の出版を進めており、2001年からこれまでに「東アジア史入門」「義和団の乱とドイツ帝国の研究」「日本史太陰太陽両歴対照表」「広東地方におけるプロテスタント宣教師と住民」「ええじゃないかと明治維新」、ドイツ人として初めて朝鮮半島を遍歴したジャーナリストの遺稿をもとに創刊された「韓国紀行」(1905年初刊)の再刊書、戦後中国の人権政策に関する論文集など8冊出版した。

さらに、1999年に東京大学の吉田伸之教授、2000年に早稲田大学の李成市教授を客員教授としてエルフルトに迎え、「東アジアの比較都市史」、「伝統都市と宗教」、「関ヶ原合戦四百年記念」、「中国の人権と民主主義」をテーマとするシンポジウムを主催した。また、2002年には19世紀前半に中国、朝鮮、日本で宣教師、言語学者として活躍したカール・ギュッツラフを記念するシンポジウムを開催し、偉大なる東アジア学の実先者ギュッツラフの再評価を試みる論文集も今年出版した。

広野好彦（大阪学院大学助教授／日本政治外交史）

ロマノフ王朝最後の皇帝ニコライ2世は、その悲劇的な最後、あるいは怪僧ラスプーチンをめぐるスキャンダルなどから、古くから日本人の関心をひいてきた。彼が日記をつけていたこともよく知られていて、その方面の研究は日本では保田孝一がリードしてきた（『ニコライ二世の日記』朝日新聞社、1990年）。さらにロシアが生まれ変わった頃からは、彼の日記が書籍として手に入りやすくなり、最近ではインターネットでも閲覧することが可能となった（<http://militera.lib.ru/db/nikolay-2/>）。

それゆえ私も日露戦争の当事者の考えに触れたいと、ニコライ2世の日記をかつて読み始めたが挫折した。日記自体が簡潔な日常の記録にすぎず、彼の内面に触れる記述が少なかったからである。

例えば次のような記述を見てみよう。

「1904年10月14日木曜日（露歴）

7時半にほとんど同じ仲間と狩に行った。エゲルスカヤ村で列車をおり、トゥガニツァに向かった。巻き狩は非常に上首尾であった。大量の鳥が飛んでいた。天気はどんよりとして、穏やかで、快適であった。総計210羽を撃った。私に関しては、11羽のクロライチョウ、1羽のハイイロシヤコ、1羽のヤマシギ、1羽のエゾライチョウ、3羽のハイイロウサギと10羽のユキノウサギ、全部で27羽であった。

北に対する3度目の追込みのときに、艦隊とともにヴィゴに到着したというロジェストヴェンスキーの電報を受領した。6時半にツァールスコエに戻った。たくさん読み物をせざるを得なかった。」

この日の記述はある意味典型的である。日記の過半を占めているのが、ニコライが非常に好んだ狩りの記述であり、その後に重大な政務に関する簡潔な記述が続いているからである。すなわち、ロシアを出発して極東に向かっている第2太平洋艦隊は、ドゥガーバンクでイギリス漁船を日本の水雷艇と誤認し、砲撃をくわえるという事件を起こし、イギリスとの関係が緊張していた。まさにその艦隊が、スペイン領のヴィゴに到着したという報を受けたということが述べられているのである。

この日の記述だけからも、ニコライは政務よりも狩りの方が好きであったのではないかという仮説を立てることさえできる（この仮説は正しいと思う）。もちろん皇帝のこのような態度は同時代にも見透かされ、批判を受けている。

例えば、このときの内務大臣スヴァトポルク＝ミルスキーの妻は次のように日記に記している。

「すべての事件に対する皇帝の態度も、あまり心を慰めるものではない。情勢がもっとも緊張した木曜日に、彼は一日中狩りを行い、急使は電報をもって駆け巡ったが、返事は何もなかった」

この記述は厳しすぎるかもしれない。ニコライが夕刻まで狩をしていたのは事実であるが、その途中で電報を受け、帰宅後政務を執った様子が窺えるからである。ミルスキーの妻が、このように批判的であるのは、ニコライのもとではいかなる大臣も何もすることができないと懸念をしたからであった。

実は、スヴァトポルク＝ミルスキー内相は、体制内改革を指向していたのである。1904年8月25日の最初の謁見の際、彼はこのことを皇帝に述べている。すなわち、彼は先立つ二人の内相とは思想が違ふ。情勢の悪化にかんがみて、政府は社会と和解する必要がある。そして宗教の自由、自治拡大の必要性、辺境政策の変更、出版の自由などの必要性について述べている。そのうえロシアを正しく発展させる唯一の方策として、限定的な代表制の導入を主張した。ニコライは、異議を述べず、これに同意したかのようであった。そうして「母上のところに行ってください。そして母上を喜ばせて下さい」と述べた。そして新内相は、マリア皇太后のところに行きあつて祝福を受けた。

ミルスキーの任命には、力による秩序維持の政策が不人気であることを懸念した皇太后の影響力があつた。前任内相のプレーヴェはテロで暗殺されていた。ニコライは、皇太后のたつての願いをいれて改革派の大臣を任命した。しかし彼は、改革を真剣に考えていたわけでは必ずしもなかったのだ。

また日露戦争中とその直後には、ニコライが感情を明らかに表した記述も少しはある。

「1904年12月21日火曜日（露歴）

未明にステッセルから日本に旅順を明け渡したという驚くべき知らせを受領した。巨大な損失、守備隊の間の病的な状態、弾丸を完全に消費してしまったためである！それは予見されたのであるが、重苦しくかつ痛ましい。…」

旅順陥落は、ニコライにとってはものすごい痛手であった。しかしながら自制心の強いニコライは、この痛手を外面には表さないように努めた。君主たるべきもの義務は、かくあるべきと考えたのであろう。しかしこの努力が逆に、誤解を生んでいる。

ミルスキーの妻は次のように記している。

「ペプカ（ミルスキー内相）は（12月26日の）報告で、旅順の陥落が、皇帝に対して何らかの印象をも与えていないということに衝撃を受け打ちひしがれていた。皇帝は陽気であり、誰かの任命について話したとき、ついでに旅順について触れられた。もし皇帝が悔しがられているのであれば、意識せずとも何かを語られたでしょう。何もなかったのです」

折からの日露戦争百周年ブームに便乗して、またぞろニコライ日記を引っ張り出してきた。ありきたりのことであるが、ニコライ日記も同時代の関係の深い他者の文書と照らし合わせれば、読めないこともない。そして政務にあまり関心がないが、義務感に駆られて意固地に専制権力を維持しようというニコライの姿が見えてきた。まだ読み残した部分も多いが、それはまたロシア革命百周年のときのためにとっておこう。

市民と大学生にとって歴史展示の意味——「軍事郵便」の運命を危惧して

新井勝絨（専修大学文学部教授／日本近代史）

国立歴史民俗博物館を離れて大学へ転身をしてから5年目に入っている。通称「歴博」には11年在職した。その前が町田市立自由民権資料館であるので、ずいぶん長く展示をともなう仕事に従事してきた。専修大学に席を置くようになって、もう展示という仕事をするのではないと思ってきたが、最近その大学で展示を実施する機会を持った。

過去には博物館に席を置いていたことがあるという理由で、外部の組織から依頼されたことがある。三鷹市教育委員会主催の展示で、三鷹市出身の吉野泰三という自由民権家の家に所蔵されている資料を中心にして、ほかに東京都多摩地区のいわゆる「豪農」と呼ばれた家に残る近世から近代の資料も使って、昨年実施した。「新選組と多摩の民権展」である。NHKの大河ドラマが新選組をとりあげたこともあって、近藤勇や土方歳三という新選組創設者を生み出した多摩地区各地は相当盛り上がったし、注目もされた。なかには大河ドラマの人気にあやかうという意図で行われたイベントも数多くあった。多摩地域に住む人々から見れば便乗以外なものでもないとすぐに見抜かれてしまったお粗末な自治体もあり、行政体の歴史や文化認識の余りの低レベルに今更ながら驚いた。例えば東京都日野市である。すでに多くの実績のある既設の博物館を、その規模を縮小して市内の学校の空き教室に博物館ごと移してしまい、もとの博物館を、大河ドラマ放映中の一年と同様に多くの人が入ると見込んで新選組に特化した施設に衣替えし、名称も変えてしまおうとしているのである。これまでの博物館を支えてきた市民や周辺の博物館関係者が怒って存続運動を展開したが、聞く耳をもたず強行した。あきれてモノがいえないとはこのことだ。多摩の各自治体の首長や管理する行政マンの発想のなんと貧相なことか。

それでも町田を始め、地についたしっかりとした展示を行った博物館もあることを特記しておかなくてはならないだろう。それらの特別展は、多くの入場者を得た。私もいくつかの企画展を覗いてみたが、幕末維新期の多摩の歴史的な位置とその果たしてきた重さを十分に受け止めた展示だった。私が三鷹市で実践した展示は、駅前のビルのワンフロアを使っている美術ギャラリーを借用しての特別展示で、さまざまな条件や制約をかかえながらの展示となった。常設展示場を持たない自治体の展示（ということは専任の学芸員がいらない自治体という意味もあるが）という性格のものになったが、予想以上の入場者を得た。はたして新選組展として多摩地区のフィナーレを飾るものになったかは、とても恥ずかしくていえないが、それでも久しぶりに三多摩（南・北・西多摩）という地域を一つのくくりとしてとらえなおしてみる恰好の機会となった。

ところで大河ドラマでは「多摩の魂」という台詞を主演の香取慎吾扮する近藤勇の口から、しばしば出てきた。私のように多摩に生れ多摩で育ち多摩で学び多摩で職を得た、生粋の多摩

っ子としては、俳優(?)香取の口を通して「多摩の魂を忘れない」との台詞を聞くたびに、君なんかと言われたくないという感情がこみ上げてきた。ドラマの後半には近藤の役にそれなりにはまって風格も出てきた香取君には悪いが、多摩っ子の魂のようなものがそう感じさせたのかもしれない。多摩の自治体の首長もこの際、しっかりと本当の意味での多摩の魂を学びなおした方がいいのではないか。

このように博物館を離れても展示はすでに経験済みであるし、また私が関わる展示が現在二つも進行中である。しかし、博物館機能の施設をまったく持たない大学で展示を経験するとは思っても見なかったが、今年7月、私のゼミナール主催でごく小さな展示を試みた。ゼミの学生とともに企画準備し、実践した。わずか二週間という期間であったが、「戦没兵士のビルマ便り——故郷川崎に届いた百余通の軍事郵便」という展示である。ゼミの活動の一環としてここ数年、戦地と銃後を結ぶホットラインともいべき「軍事郵便」の解説に取り組んできた。8年ほど前に私が親しくしている業者から個人的に購入した複数の軍事郵便のひとつであるが、幸い大学がある川崎市出身の兵士の手紙が100通ほどでできたので、それを読むことにした。20代の学生には古文書同様で、解説も四苦八苦していたが、なんとか二年ほどで全文を読了した。解説途中で差出人は、インパール作戦に向かう途中のビルマのインダーギーというところで戦死した兵士であることが判明。現在でも同じ川崎市に在住の80歳を越えたお二人の妹さんを大学に招いて聞き取りを試み、戦死した兄の話を涙とともに話してくれた。それ以後はゼミでの手紙解説に臨場感が生れ、学生にとっていっしょに戦争が身近になった。自然の流れのようにゼミ員全員で墓参もしたところをかけた。解説文については専修大学歴史学会発行の『専修史学』に全文掲載した。そんな経験がきっかけとなり、はじめて展示表現を試みたのである。図書館の一角を借用し手作りのミニ展示となったが、反応はきわめて大きく、多くのメディアが取り上げてくれた。最も驚いたのは、「我が家にも軍事郵便があります。よかったですらどうぞ」という声が多数届いたことである。父の、夫の、兄の……。持主は捨てるに捨てられないという。戦地から届いた肉親の手紙は生を確認する唯一の証だったが、時の経過とともにその持ち場をなくし、流浪しはじめている。戦場からの悲鳴も生存を伝えるかすかな声も、銃後からの激励や慰めも、手紙を交わした人々の存亡とともに運命をともにしつつある。戦後60年という時代はまったくの私信である軍事郵便保存の岐路にあるといえる。いまこそそれらが歴史資料として、あるいは戦争の歴史を歴史の場でとり上げる時にいかに大事な資料であるかを声を大にして言わなければならない。今度の展示で、小泉博美という24歳で戦死した兵士の手紙が、あらためて蘇った。多くの人々に感動も与えることも出来た。

今年の夏は、1980年代生れのゼミ生とともに、これらの手紙が60年目に再び蘇生する実感を得た夏だった。そしてまた新たに蘇生を叫ぶ手紙に出会った夏でもあった。私の戦争研究の課題はますますひろがった。1946年に日本の軍事郵便制度は廃止となるが、再びこの制度が必要にならないことを祈るばかりである。

加藤邦彦(梅光学院大学専任講師/日本近現代文学)

昨年11月、『新編中原中也全集』全5巻・別巻1(角川書店)が完結した。わたしは1996年より行われていたこの全集の編集に1998年5月から参加し、以後6年半にわたってこの全集の編集に携わってきた。その6年半の間にさまざまな発見があったが、そのなかのひとつに、中原中也は新聞を読んでいた、ということがある。念のため断っておけば、ここでいう新聞とは、中原がしばしば寄稿した「早稲田大学新聞」「詩報」などの週刊・旬刊の新聞や、特定の分野に内容を限定した新聞のことではない。「新聞」と聞いて誰もがまっさきに想像するであろう新聞、すなわち日刊紙のことである。

新聞を読まない文学者などおそらく存在しない。にもかかわらずわたしは、中原が雑誌や単行本を読んでいる様子は思い浮かべることができても、新聞を読む中原の姿はなかなか想像できなかつた。中原は社会的な出来事にほとんど関心がなく、同時代の文壇・詩壇からも孤立していたという偏見が、中原は新聞を読んでいたかともわたしに思い込ませていたのだろうか。

だが実は、中原と新聞メディアのつながりは、中原の文学的出発の時点よりすでに示されていた。中原が短歌の創作から文学の世界に足を踏み入れたことはよく知られている。現在、小中学生時代に作られた107首の短歌が確認されているが、その大半は中原の故郷山口の地方紙「防長新聞」に発表されたものだ。もし「防長新聞」がなかったら、中原は文学の世界にのめり込まず、中原中也という詩人も生まれなかつたかもしれない。新聞は、中原を文学の世界に導いた、彼にとって非常に重要な役割を果たしたメディアなのである。

また、その後も中原が熱心に新聞を読んでいたことは、「何処へも行きません、電話もかけません 新聞を隅から隅まで読みます」(安原喜弘宛書簡、1933年5月25日)というように、ほかならぬ中原自身の手によって日記や書簡にしばしば描かれている。

そのことに気づいて以来、わたしは中原が生きていた時代の新聞を注意してみるようになった。『新編中原中也全集』の編集過程で、これまで知られていなかった新聞関連の資料をいくつか発見できたのは、その成果のひとつである。

たとえば、「我邦感傷主義寸感」という未発表評論の冒頭に、「新聞記事を読んだ私の記憶」として「京都の農林学校の生徒」30名のうち20名が「満蒙視察」の際に「イヤな病気に冒され、病気の重い5名が放校、他の15名は謹慎処分になった」という話が紹介されている。「京都」や「放校」といった言葉に反応している点、いかにも中原らしい。当該記事の発見以前、この評

論は原稿用紙の種類から1933年後半ごろの執筆と推定されていたが、それ以上の詳しい制作時期も、中原の「記憶」がどれほど正確かも不明であった。あるとき、1933年に「読売新聞」文芸部が行った「流行小唄『東京祭』懸賞募集」に中原が応募していたことを思い出し、この年の「読売新聞」のマイクロフィルムを頭から順に閲覧していった。10月7日の第7面「話の港」欄に当該記事を発見したのは、作業3日目のことである。「話の港」はこの年の1月31日に始まった、現存も続くコラム欄。この記事を見つけたとき、中原がずいぶん小さい記事まで眼を通していったことに驚くとともに、その小さい記事を見つけたことのできた自分の幸運を喜んだものである。中原の記憶は思っていたよりはるかに正確で、これによって「我邦感傷主義寸感」の制作時期を1933年10月ごろ、それも当該記事の新聞掲載日からそれほど遠くない時期、と新たに推定できた。

また、1935年2月18日には未発表評論「近頃芸術の不振を論ず」が執筆されており、そのなかに「例へば小松清氏によつて、行動主義文学といふのが提唱される」として小松清の文章が引用されている。引用の出典が「行動主義文学論」であることはすぐ目星がつく。しかし調べてみると、たしかにこれに該当する文章は同書の冒頭「行動主義文学の提唱」にみられるのだが、この本の発行は6月なのである。さらに調査を進めていくと、この小松の文章の初出が「読売新聞」1935年2月17日であることが判明した。この年、中原が「読売新聞」を読んでいたとすれば、ただちに次のことが想起される。それは、この年の9月ごろ、中原に読売新聞社への入社話があったということである。中原フク述・村上護編『私の上に降る雪は』によれば、母フクの親戚を通じて進められたこの話には、中原も「新聞社へお願ひにいつてちょうだい」と積極的であったという。フクが中原の第1詩集『山羊の歌』を持って就職を頼みにいったものの、その後同社からの連絡はなく、この就職話は流れてしまうが、あれほどまでに就職を嫌がった中原が同社への就職についてのみそれなりに積極的だったのは、もしかしたらこのころ、中原が「読売新聞」を熱心に読んでいたことと関係があるのかもしれない。

これから先、中原が眼にした新聞記事や両者の直接的なつながりを示す資料のさらなる探求ももちろん重要だが、中原と新聞メディアの関わりについて考えていく場合、中原の詩人としての感性と新聞にみられる同時代言説や時代的感覚との共通点および差異を探っていくことがより大切になってくるだろう。新聞とは、その時代がもっとも凝縮されたメディアである。そのメディアとの関わりはなかに、ひとりの詩人の感性はどのように形作されていったのか。また、紙面に表現された同時代への共感と反発は、彼の詩作にどのような形であらわれているのだろうか。中原と新聞メディアの関わりについて考えることは、中原中也という詩人を彼が生きた時代のなかから捉え直すことでもある。

熊本史雄（駒澤大学文学部専任講師／日本近代史）

平成13年（2001）4月1日に「行政機関の保有する情報の公開に関する法律」（以下、「情報公開法」と略記）が施行されて、すでに4年以上が経過した。以来、この法律の恩恵に与って、様々な研究成果が生まれている。筆者の専攻する外交史研究もその例に漏れない。この小文では、最近の学界動向や外交文書公開制度をもとに、「情報公開法」の功罪について考えてみたい。

「情報公開法」の施行以前、戦後期外交史を専攻する日本人研究者が公文書（外交文書）へアクセスする方法は限られていた。極言すれば、外務省外交史料館において実施される「戦後外交記録公開」事業での公開文書か、もしくは研究対象国である相手国の公開文書に直接アクセスするしか途はなかったのである。

ところが、「情報公開法」の施行によって状況は大きく変わった。この法律は、同法第5条1～6号に該当する文書については開示の制限を認めているものの、それ以外については開示を義務づけており、何より文書作成日からの経過年限という制限を開示基準に設けていない。たとえば、一週間前に作成された文書を同法に基づいて開示請求することは可能であり、理論的には開示される可能性もある。いわゆる「30年ルール」に従って公開対象文書が選定・審査される、従来の「戦後外交記録公開」事業とはこの点が大きく異なる。これによって、日本と相手国の外交文書を比較検討する機会が飛躍的に増え、政策決定過程における相互間の温度差やコミュニケーション・ギャップを明らかにすることが容易になった。こうした状況を、「情報公開法」によって「ダイナミックな外交史」が描けるようになったと捉え、歓迎するの当然とも言える。

このように「情報公開法」は多くの成果を生んでいる。しかし「情報公開法」がうまく軌道に乗り機能すれば、それで全てが解決されるのだろうか。この問題については、すでに多くの場において指摘されているとおり、請求対象文書が多く「行政文書」の状態にある点、すなわち史料保存機関での永続的な保存が確約された「歴史的な資料等」たる地位を得ていない点が懸念されている。「行政文書」は一文書ごとにその内容や案件の軽重に応じて「保存年限」が定められており、年限を経過する段階で文書の扱いが改めて判断されることになっている。保存年限経過後、行政は、①年限をさらに延長して次の期限が来るまで「保存」するか、②史料保存機関に移管し「歴史的な資料等」として保存するか、もしくは③「廃棄」するか、のいずれかを選択しなければならぬ。一度は開示された文書であっても、保存年限経過後に「廃棄」と判断されれば当該文書は「廃棄」され、以後、利用者は永久にその文書にはアクセスできない、つまりは反証可能性が確保されないという事態に陥るのである。たしかにこれも重要な問題であり看過し得ない。しかし以下では「近代史料学」の見地から、すなわち、史料「群」としての重要性に着目して検証を試みたい。

「近代史料学」とは、古文書学が古代・中世文書を対象として蓄積してきた成果や1980年代中頃から明確となる文書館学・記録史料学の成果を取り入れつつも、それらとは一線を画するものとして体系化が図られたつつある学問分野である（中野目徹『近代史料学の射程』弘文堂、2000年）。そこでは、文書の一件一件を読み解いていくのではなく、検討対象史料をひとつの「群」として把握し、その成り立ちや構造の分析を通じて史料作成機関の機能を解明することが目指される。そもそも公文書は、それが歴史的価値を有しているからとの理由で残されたわけではない。参照すべき先例事項として後日の執務参考となり得るため残されたのである。すなわち、どの文書をどのように分類して残したのかを問うことは、文書作成母体である組織の意思・内性・機能を問うことに等しいと言える。この点を前提に、「情報公開法」と「戦後外交記録公開」事業を考えてみよう。

「情報公開法」においては、その請求方法にもよるが、文書は概ね一点もしくは一案件単位で開示される。となれば、「群」としての文書構造を認識するのは難しい。文書群の構造は、「外務省記録」全体のなかでどこに位置づけられ、把握されるべきものだからである。むしろ、「群」構造の把握を目的に開示請求を繰り返すという方法もないではないが、現実的とは言い難い。

その点、「戦後外交記録公開」事業はどうだろうか。公開に際しては目録が必ず作成され、そこには「外務省記録」としての分類番号も情報として盛り込まれる。この分類番号の情報が重要となる。これをもとに、各案件・文書が「外務省記録」の中でどのように分類・整理されているかが確認できるし、そこから文書群の構造を把握し、それを基に組織制度論を展開して意思決定過程の解明へと遡上していくことは充分可能であろう。加えて、全19回にわたるこれまでの公開によって目録自体の蓄積が進んでいる点も見逃せない。目録を通読するだけでも文書群のおおよその構造は推測できる。

このように、「戦後外交記録公開」事業は、「情報公開法」では把握しきれない「群」としての史料構造を提供し得るのである。それに対して「情報公開法」による開示は、文書の群構造をむしろ分断して提供する、とさえ言えよう。とかくそのメリットに目を奪われがちな「情報公開法」にも落とし穴はある。ましてや、「情報公開法」の利便性が強調されすぎることによって、「戦後外交記録公開」事業の不要論が唱えられてはならない。それは、「近代史料学」的立場からの戦後期外交史研究の途を閉ざすことにつながるのである。

■編集後記 学術 mini 情報誌「PS JOURNAL」第7号をお届け致します。

◆早いもので季節は秋、今回二人の外国の研究者からも寄稿していただきました。題して「超境する日本文化」。また、新聞紙上でもご存知かもしれませんが、今話題の小論も掲載することができました。

◆次号は「女性学の現在」です。乞ご期待。(k)

PS Journal 2005 第7号 2005年10月10日 発行

●発行・編集：日本図書センター—P&S Journal 刊行委員会

PS Journal 編集部 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-10-6

TEL:03-5940-5474 FAX:03-5940-5476 e-mail:nps@nihontosho.co.jp

◎記事の無断複製、転載を禁じます。

●学術 mini 情報誌・・・フットワークで集めた学術先端情報●

PS

JOURNAL

2005

第 6 号



*PS
JOURNAL*

特集: 研究者の現在Ⅴ 経済史を中心に

- | | | |
|--------------------------|------------------|-------|
| ■綿業史研究の現状と問題点 | 大阪大学教授 | 阿部 武司 |
| ■二分法的経済社会認識の錯誤 | 大阪市立大学教授 | 大島真理夫 |
| ■もうひとつの研究活動 | 立教大学教授 | 老川 慶喜 |
| ■古書店で出会った資料や蔵書がおしえてくれたもの | 浦和大学教授 | 寺脇 隆夫 |
| ■カフェーと文化運動 | 関西大学助教授 | 増田 周子 |
| ■志士と由緒 | 仏教大学・京都産業大学非常勤講師 | 笹部 昌利 |
| ■イギリスでの出来事 | 龍谷大学助教授 | 佐々木 淳 |

綿業史研究の現状と問題点

阿部武司（大阪大学教授/日本経済史）

英国の産業革命以来、世界各国における工業化の始動時のエンジンとなってきた綿業については、長年、世界各国の経済史あるいは経営史の分野で詳細な実証研究が積み重ねられてきた。日本一国に関しても紡績業や織物業を中心に多様な視角から毎年多数の研究が外国人研究者のそれも含めて蓄積されてきたが、欧米や中国などの諸外国でも事情はまったく同じである。綿業に関心を持つ筆者はそれらにできるだけついていくように努めてはいるものの、世界的な研究動向を把握することは至難の業である。

その中で先日、D.A.Farnie & D.J.Jeremy(eds.), *The Fibre that Changed the World: The Cotton Industry in International Perspective, 1600-1990s* が Oxford University Press から出版されたことの意義は大きいと思われる。綿業史研究の権威である2人の英国の編者により取りまとめられた約600ページに及ぶ本書は、15名の寄稿者による4部18章から成り、過去4世紀間における綿業の世界史的展開が市場、経営、技術などを焦点としつつ詳細に考察され、スペイン、オランダ領東インド（現インドネシア共和国）、西ドイツ、ロシア、米国ニューイングランド地方、インド、中国、日本に関する各論も収録されている。全章ともたんなる概説の域にはとどまらず、最先端の研究成果が盛り込まれている。日本に関わる3つの章の内容を簡単に紹介すれば、まず阿部が戦間期における紡績を中心とする綿業界の組織力を論じ、桑原哲也神戸大学教授が工業化初期の鐘紡における武藤山治の労務管理政策について考察する。さらに杉原薫大阪大学教授が世界市場との関連で戦後の日本綿業の展開を論じている。同書の巻末には主要国の綿業史に関わる重要な著作のリストが掲載されている。

20・30年ほど前までは日本の経済史・経営史研究者は外国における綿業史研究の動向に敏感であった。角山栄、吉岡昭彦、毛利健三、中川敬一郎、米川伸一などの先学は主に英語文献を精力的に渉猟して当時の最先端の研究成果を消化し、それらを日本の学界に積極的に紹介していた。故米川氏などはさらに、イギリス、アメリカ、インド、日本の近代綿業の展開を経営史的に比較するという欧米の研究者もなしえなかった前人未踏の試みに挑戦し、*Business History Review*など欧米の一流ジャーナルにすぐれた英文論文を発表して、国際的にも高い評価を受けた。

しかし、それ以後、日本の研究者による外国における綿業研究の紹介は率直に言って途絶えてしまったように思われる。近年国際化が進んだ、とよくいわれるものの、英語をはじめとする外国語の文献を大量に読みこなせる日本人はそう増えていない。また、繊維産業史を研究していると、しばしば「そんな衰退産業を調べていて何の意味があるのか？」という質問を受けて閉口することがあるが、最近の日本では歴史研究者にすらそうした認識が蔓延しているの

かもしれない。あるいは、近年の「大学改革」で、教育や行政に力を入れすぎて、本来研究に向かうべきエネルギーを消耗させてしまった人が多いのかもしれない。色々な理由はあろうが、外国において活発に進められている研究に日本人研究者が無関心になってしまったのには憂慮すべきであろう。W.Lazonick, M.Rose, J.Singleton, N.Harley, G.Saxonhouse, G.Clark, T.Leunigといった綿業研究者が過去20・30年間に營々と積み上げてきた輝かしい業績が日本においてどの程度正しく把握されているのか甚だ疑問である。

別の角度からもう1つ重要と思われる問題点をあげたい。それは外国人による日本研究の受容である。昨年J.Hunter, *Women and the Labour Market in Japan's Industrialising Economy: The textile industry before the Pacific War* という書物がRoutledge Curzonから出版された。戦前期日本における綿紡績、製糸、織物という繊維産業を構成する3大部門全てを取り上げ、それらを支えた女性労働の実態につき、日本語文献も駆使して詳細に解明した大変な力作である。製糸業の労働事情に関しては最近でも東條由紀彦、中林真幸、神林龍、榎一江等の諸氏によってすぐれた研究がなされつつはあるものの、残る2部門に関する考察は不十分であり、さらに3部門全体を通観した業績は皆無に近いと言っても過言ではない。刊行後日が浅いという事情は考慮しなければなるまいが、同書に対する日本人研究者の反応は筆者のみどころでは、どうもよろしくない。そもそも同書の刊行自体があまり知られていないのである。こうしたすぐれた研究は、おそらく翻訳が出れば、日本人に広く知られることになるのだろうが、研究者が英語文献すら読もうとせず、翻訳がなければ名著も知られることなく埋もれてしまうのが現実だとすれば、世にいう「国際化」は本当に進んでいるのだろうかとか疑いたくなる。

経済的にははだれが見ても日本が先進国となった現在、約20年前には明らかに存在し、しばしば盲目的ですらあった欧米崇拜がなくなったことは好ましいのかもしれない。しかし、研究者までが、外国から積極的に学ばなくなってしまったのであれば、それは大変おそろしいことである。様々な分野で国際化が進むなかで、少なくとも学術研究面では日本はまだ未熟である。経済史、経営史の分野に限っても、ことは綿業史研究にとどまらないように思われる。欧米崇拜に戻る必要はまったくないが、諸外国における最先端の研究成果の摂取には、より貪欲になる必要があろう。

二分法的経済社会認識の錯誤

大島真理夫（大阪市立大学経済学研究科教授／日本経済史）

2005年1月10日付『朝日新聞』の小林慶一郎「経済早わかり」を、「『文明の衝突』と市場」という表題に惹かれて目を通し始めて、驚いた。「共同体」と「市場」が、あまりにも荒っぽく対立させられ、その荒っぽい同一の論理で、アルカイダの911テロ、援助交際やネット集団自殺、バブル後の不良債権処理といった、いずれも深刻な社会問題がきわめてあっさりと論じられていたからである。

共同体の倫理は、集団への忠誠を重んじ、目的のためには敵を欺くことが賞賛される軍隊の道徳、市場の倫理は、見知らぬ客や外国人に対しても正直を貫いて取引する誠実さ、というように対比される。そして、アルカイダについては、彼らは市場で資金や技術を手に入れたが、目的は市場そのものの破壊だったのであり、自分たちの共同体的な目的のために「市場をだました」、と言う。

しかし、「市場での取引相手をだます」ということは普通の感覚で理解できるが、「市場をだます」という言葉は理解しにくい。目的が何であろうと、正当な価格が支払われるならば、その取引は正当であろう。市場とはそういうものである。また、「見知らぬ客や外国人に対しても正直を貫く」のが市場の倫理と言うが、これは我々の実体験とかけ離れているし、経済学の教科書でも、制度派の市場分析を持ち出すまでもなく、通常のマクロ経済学の教科書に出てくるゲーム理論を思い出せば、小林氏の言うような、誠実な「市場の倫理」は想定されていないことはすぐわかるであろう。

小林氏は、市場を、財・サービスの取引システムとして限定的に理解するのではなく、「市場経済社会」という全体社会として理解しているように思われる。共同体についても同様である。二分法的な社会認識と言うことが出来るであろう。しかし、市場も、共同体も、全体社会ではなく、取引のシステムとして、限定的に理解することが重要ではないだろうか。取引の担い手は、どちらも、利己的であると同時に利他的であり、革新的に自由を求めると同時に保守的に何かに束縛されることに喜びを感じる、という相矛盾した本質を持つ人間である。それは、生命体としての人間の本質であり、変わらないものである（木下清一郎『心の起源』中公新書、2002年）。そうした観点から見ると、市場の場合は、取引が1回ごとに完結するということが最も重要な特徴である。したがって、見知らぬ相手でもお金させ払えば取引が出来るのであり、取引範囲はグローバルに広がる事が可能になる。ただし、その価格が正当であるかどうかは保障の限りではない。これに対し、共同体は、長期継続的な関係こそがその本質であり、必然的に狭い範囲に限定される。両者の取引システムは全く異なるが、背後にいる人間の本質が異なるわけではない。

経済学における「市場」と「共同体」にとどまらず、歴史学における「伝統」と「近代」、社会学における「ゲマインシャフト」と「ゼゼルシャフト」、「共同体」と「利益社会」、法学における「身分」と「契約」等々、社会研究において、二分法的な概念装置はたくさん存在した。私は、それらは、近代化論批判、「創られた伝統」批判、新制度派経済学の登場等々によって、すでに過去の理論となっているものと思っていた。しかし、

小林氏のコラムは、最先端の経済理論を身につけたと思われる研究者にも、このような二分法が意外に根強く残っていることを教えてくれた。

そのような観点から、私は以前から、マルクス派の日本経済史の退潮以後の研究水準を示す、岩波書店刊行の『日本経済史』全8巻（1989年～1990年）の第1巻が「経済社会の成立：17～18世紀」として、近世から開始されていることが気になっている。最小費用で最大効果という経済的行動が一般化し、経済法則が働くようになる「経済社会」以後が、経済史の本来の研究対象であるというメッセージが感じられるからである。「市場経済」は、この経済社会の集約的表現とされている（第1巻、15ページ、速水融執筆）。この考え方は、マルクス経済学の「経済外的強制」と「経済的強制」というとらえ方もよく似ている。

しかし、最小費用と最大効果という原則は、希少性が存在するところでは、普遍的に行われているはずである。たとえば、縄文時代の狩猟採集経済においても、資源に希少性が存在する限り、否応なく、この原則は働いていたはずである。また、市場については、ここにも、先ほどの小林氏とやや似たような意味で、市場経済を全体社会と見るという問題を感じる。要素市場が発達した現代の経済においても、シュンペーター的な経済のダイナミクスをもたらす原動力であるサプライ側の質的側面は、市場取引にはなじまない性質を持っている。土地や労働という本源的な生産要素の配分・利用のシステムは、非市場的制度が効率的に機能する場面も多い。市場システム以外の制度も、希少性に直面した、同じ本質を持つ人間が作り出している。経済の制度であることに変わりはないはずである。

もう一つ、気になっている二分法は、近代日本経済史における在来産業と近代産業という区分である。周知のように、中村隆英氏の「在来産業論」（『明治大正期の経済』東京大学出版会、1985年）の問題提起をきっかけとして、新たな研究分野として定着している。私が気になるのは、この議論には、「通常は近代産業の発展とともに在来産業は衰退する」という前提が置かれているように感じられるからである。

一体、「工業化の進行と共に、大工業が中小工業を駆逐する」というような考え方はそもそもどのようにして始まったのであろうか。言うまでもなく、マルクス経済学においては、そのような考え方が取られていた。『資本論』（第1部第4章「相対的剰余価値の生産」）に書かれているとおりである。日本では、マルクス経済学が影響力を高める以前においても、たとえば、戸田浩市の「固有産業論」（同『日本の経済』博文館、1911年）は、固有工業については、大工業によって駆逐されるとは言わないが、発展から取り残されており、保護育成策によって「学理や機械や資本の力を藉る所の大規模の工場工業に発達せしむることが必要である」（同書、25ページ）と述べている。これに対し、上田貞次郎は、1917年12月の、社会政策学会第11回大会の小工業問題報告において、規模の経済や取引費用問題を念頭に置き、工業経営には、大工業が合理的分野と小工業が合理的な分野があること、小工業は伝統的な産業だけではなく、機械工業の概念を誕生など、新たな産業分野でも登場していることを指摘し、閉鎖型に小工業を保護することに反対した（社会政策学会編『小工業問題』同文館、1918年）。

上田の議論をふまえるならば、「在来」対「近代」という対比ではなく、大工業と小工業という対比で、規模の経済や取引費用の点で、大工業が、さわい分野、小工業がさわい分野、その条件は何か、という問題を研究することが生産的ではないかと考えている。

もうひとつの研究活動

老川慶喜(立教大学経済学部教授)

私が大学院時代からの鉄道史研究をまとめて、日本経済評論社から『明治期地方鉄道史研究』を出版したのは1983年のことであった。ここで話題にしたいのは、この本の内容ではなく、この時期に『明治期鉄道史資料』(全20巻、日本経済評論社)の復刻出版が、野田正徳・原田勝正・青木栄一の3先生の編集で進められていたことである。鉄道史資料の刊行は、さらに『大正期鉄道史資料(第1期)』(全44巻)、『明治期鉄道史資料(第2期)』(全33巻)、『大正期鉄道史資料(第2期)』(全17巻)、『昭和期鉄道史資料』(全45巻)と続き、あわせて160冊にも及ぶ膨大な鉄道史資料群を形成することになった。私は、『明治期鉄道史資料(第2期)』の刊行から編者に加えていただいたが、その過程で資料の発掘と復刻のおもしろさを学び、以来資料の復刻出版は私の「もうひとつの研究活動」となった。

その後、しばらくしてから私は鉄道史研究の仲間とともに八朔社から『鉄道時報』(全9巻)を復刻出版した。『鉄道時報』は、鉄道協会内に設置された鉄道時報局から発刊され、鉄道史上のきわめて重要な情報が掲載されており、その資料的な価値についてはあまねく知られていた。ただ、それをすべて所蔵している機関はなく利用にははなはだ不便であった。比較的まとまって所蔵している機関は交通協会の図書館であったので復刻出版への協力をお願いしたが、営利的な出版には協力できないということで断られてしまった。それではということで、当時立教大学の助手をしていた渡邊恵一君(現・駒澤大学経済学部助教授)とふたりで『鉄道時報』を求めて全国の資料館や図書館を歩き回った。山口大学では『鉄道時報』を借り出して、近くのコンビニで一日中複写をしたこともあった。小樽鉄道記念館の調査で完璧にそろえることができるとわかったときは、感無量であった。

渡邊君とは、また『近代日本物流史資料』(全28巻)という商品流通にかかわる資料集を東京堂から復刻出版した。同資料集は、『東京市貨物集散調査書』、『横浜港湾統計年報』、『名古屋市貨物集散概況』、『大阪港勢一斑』、『神戸港大観』などの、五大都市における海運・鉄道・河川舟運・自動車輸送などの輸送統計を出版したものであるが、統計資料は調査方針を変えたりタイトルを変更したりすることがしばしばあるので、収集にはかなりの手間ひまがかかった。私と渡邊君は、このように資料を求めて全国各地を飛び回っていたので、当時結婚間もなかった彼は奥さんから「私よりも老川先生と旅行することの方がはるかに多い」と嫌みを言われていたと、のちになって聞いたことがある。

こうして資料の復刻出版を手がけていると、古書店の目録にも熱心に目を通す習性が身につくようになった。ある日、鉄道省運輸局が編纂した『港湾と鉄道との関係調書』という資料が日に止まった。これは、鉄道省運輸局が名古屋・神戸・仙台の各鉄道局が管内の港湾における第一次大戦後の貨物流動を調査したのをとりまとめたもので、どうも3冊刊行されているようであるが第2巻をどうしても探し出すことができなかった。

そのため、ある古書店の目録で3冊がそろっているのを発見したときは天にも昇る心地がした。その後しばらくたって、日本経済評論社から、資料価値が高くあまり大掛かりでない資料復刻をやりたいという要請を受けたとき、私は迷わずにこの『港湾と鉄道との関係調書』を推薦し、解題の執筆を引き受けた。

ところで、私は数年前から若い研究者と「戦間期交通史研究会」と称する小さな研究会を続けている。研究会の議論は研究会後の「飲み会」にまで続き、楽しいひとときを過ごしている。1970年代以降、戦間期における産業史研究は、鉄鋼業・電力業・化学工業・機械工業など、当該期に急成長を遂げた産業を中心に進んできたが、交通・運輸業に関する研究はこの時期に進展する重化学工業化や都市化と密接に関連しているにもかかわらず、ほとんどなされていない。近年、近代都市史研究も盛んになりつつあるが、交通・運輸の問題を正面から取り上げられることはほとんどない。戦間期における交通・運輸業に関する研究は、会社史や事業史を別にすれば、わずかに郊外電鉄に関する経営史的研究が存在しているにすぎず、この時期に発展をみた自動車や地下鉄などについては皆無である。また、鉄道や海運の輸送についての研究は一定の進展をみているが、その端末の輸送を担う小運送についてはまったく研究がないといってよい。このように考えて、何人かの若い研究者に相談をしたところ、思いのほか多くの賛同者を得られ、数年前に研究会を発足させ、2003年度からは「兩大戦間期における交通・運輸史の総合的研究」というテーマで科学研究費補助金の交付を受けることができるようになった。

この研究を進めていくなかで資料集の復刻出版を思い立ち、2003年から04年にかけて丸善から野田先生と私の監修で「戦間期都市交通史資料集」(全20巻)を刊行した。同資料集は、第1期「交通調整関係」(全7巻)、第2期「貨物関係」(全7巻)、第3期「旅客輸送関係」(全6巻)からなり、戦間期交通史研究会のメンバーが分担して解題を執筆した。また、2004年度からは、若い研究者と一緒に『明治期私鉄営業報告書集成』という資料集を日本経済評論社から刊行している。また、日本鉄道と北海道炭礦鉄道の営業報告書しか刊行されていないが、今後関西鉄道、九州鉄道、山陽鉄道、京都鉄道、阪鶴鉄道、岩越鉄道などの営業報告書を刊行していくつもりである。営業報告書の復刻は私の長年の夢で、すべてを発掘するのは困難かもしれないが、より充実したものにしたいと思っている。

こうして、私の鉄道史研究は資料の復刻出版と分かちがたく結びついて進められてきた。近年日本経済史の分野では、若い研究者を中心に流通や消費の側面に重点を置いた研究が活発になっているが、以上のような資料の復刻出版活動もこうした傾向にそれなりの役割を果たしたのではないかとひそかに考えている。

古書店で出会った資料や蔵書がおしえてくれたもの

寺脇隆夫 (浦和大学教授/社会福祉制度史)

大げさに言うと、大変ショックであった。某古書店の目標をみて、「これは……」とチェックし、連絡をとって石神井のその店に出向き、用意してくれていた現物を手にして、それを確認したときのことである。

その目録に掲載された資料のうち、特に注目されるものをいくつかあげて見ると、次のようなものがある。

a.浮浪児及不良児問題資料ファイル/昭22～ b.戦後住宅事情資料ファイル/昭23 c.青少年問題・社会事業資料ファイル/しょう/昭20～ d.戦災援護/創刊～16号、昭20～ e.厚生時報/創刊～4号、昭21～ f.保育問題研究会月報ほか保育関係ファイル/昭13～18年

それは、まぎれもなく二年半ほど前に亡くなられたHU氏(元日本福祉大学教授)の資料ファイルや多数の蔵書だった。右下がりの独特な角ばった字で、書き込みやタイトルがつけられており、中には自らの署名名であったからである。

聞いてみれば、古書店主が専門に取り引きする市に出されていたのを、自分が入札し手にいれた、とのこと。それも関係蔵書・資料の一部だったと言う。事実、他の書店にもHU氏蔵書というのが、まとまって出ているという話も聞いた。

それにしても、どうしてこんなことになってしまったのだろう、と言うのがその時のショックである。取りあえず、資料のうち重要と思われるもの何点かは、大枚をはたいておさへしたが、この古書店のものも、その一部(さきにあげたものではa、b)はすでにどなたかに買上げられ、なかった。

一般書籍などの蔵書類はともかく、氏が長年にわたって活動し、取り込まれてきた記録類や収集した研究材料などの貴重な史資料が、このような形で散逸してしまうのは、なんともやりきれない思いである。

所長をされていた保育研究所(資料室)やかつて学監(=学長)という職でも勤めた大学図書館などで、なぜ引き取れなかったのだろう。それに、自分も多少のお付き合いがあり、親しく接する機会があったのに、こうした流失をどうして防げなかったのだろう、などとアレコレ考えてしまった。

たまたま、私の属する社会事業史学会(HU氏は、この学会の名誉会員でもある)でも、おそまきながら昨年度の大会で、史資料問題特別委員会を設置し、社会福祉史関係の史資料の保存問題に取組むことになっていたのである。私自身もその委員として、本年5月の大会で報告するための原案を執筆していたさなかだったから、このショックは大きかった。

「社会福祉史研究における史資料問題の現状と課題」と題する報告では、史資料保存の危機的状況が広く存在しており、そのための敏速な対応を提起しようとしていたのである。そこでは、行政や団体・施設などの社会福祉関係者や研究者などの個人の所蔵資料についても指摘し、とくにその逝去後の処分の際の問題も取り上げていたからである。

私自身、HU氏とは断続的にはあったが、保育関係の研究会で一緒にしたことはじめ、児童福祉法制定時のことや社会事業研究所時代のことなど、何回もお宅にお邪魔し、聴き取りをしたり、資料を借用したりなど大変お世話になっていた。

今から丁度三年前(亡くなる三ヶ月前)には、贈呈した救護法関

係の拙稿について、ご自分の東京市社会局の方面館勤務時代のことに触れて、救護を受けていた人々の実態についてもきちんとしてくれるように、という厳しい批評をはがきにピシリと書いてくださったことがあった。

そのとき、直ちにお訪ねし、詳しくお話を聴くべきだったのである。方面館勤務の社会事業主事時代のことは、何らお聴きしていなかった。その頃、私は救護法については史資料や文献関係ばかりを追い掛けていて、方面館で現業で働いていた救護法施行の「生きた証人」からの聴き取りは、実施していなかったからである。

言ってみれば、そのことをいわば目の前に居るご本人から指摘されたのである。それなのに、その機会をみすみす逸してしまった。すでに、氏は九十歳半ばであったから、いくらお元気だったとは言え、先へ延ばす余裕はなかったのである。

歴史研究の場合、文献資料だけではなく、聴き取り(記録)も史資料の一つである。往々、重要な位置を占めることがある。ただし、それには時期を失くしてはならないということを、迂闊にも忘れていた。

私自身が、研究対象である1929年制定の救護法の立法からその施行過程について取組み始めたのは、たかだか十数年前のことにはすぎない。とはいえ、その施行に立ち会った方々でご存命の方は、わずかにせよおられたのである。

しかも、HU氏は聴き取りをする対象としては、記憶力も確かで、鋭い問題意識をお持ちの好個の人物であった。聴き取りをしたい、と言えは健康さえ許せばいつでも快話してくださったのである。

現場でその業務に携わっていた方々から(もし、いらっしやるならばの話だが)、実際のところをお聴きするというのは、調査や研究の鉄則である。にもかかわらず、その証人を10年余の間、見逃してきたのは研究者として情けなかった。

しかし、それは置いて、今から三年前に出現した好機は、わずかに1～2月でしかなく、突然の逝去で、断たれてしまった。こうして、私自身の研究にとっても、その貴重な証言を得る機会は永遠に失われてしまったのである。

私にとって、今回の古書店にあらわれた資料と蔵書は、史資料問題の危機と聴き取り(記録)の重要性を、改めて教えてくれた事件となった。

カフェーと文化運動

増田周子（関西大学助教授/日本近現代文学）

近年はカフェーブームである。各地にカフェーができ、多くの人のたまり場になっている。『日本古書通信』（第70巻2号、第70巻3号）でも青木書店店主の青木正美が『カフェー』文献の人気「もういちど『カフェー』文献のこと」で、古本業界でもカフェー関連の本がブームになっているというエッセイを記している。日本近代文学を研究する私にとってもカフェーは強い関心事である。

2005年2月24日大阪で直木三十五の記念館が誕生した。オープニングセレモニーは、直木賞作家藤本義一氏の直木賞にまつわる講演会、直木三十五著作権継承者植村靉音氏の直木三十五の思い出話などがあり、非常に興味深いものであった。その記念館は、小さいながら、植村靉音氏寄贈の直木三十五の幼少時の書道などもあり、未発表の資料も含まれている。今後さらに発展して欲しい。壁にかけてある直木三十五の芥川龍之介宛書簡には、東京の「カフェ・ブランタン」で芥川龍之介と『芸装時代』についての話をする約束の内容が書かれていた。直木も芥川もそしてまた彼らの友人の宇野浩二など文豪の多くは、カフェーの愛好者でもあったのである。くしくも、直木三十五の記念館は、大阪の長屋を改装し、カフェーや雑貨店を入れた「萌」という建物の一室にあり、いかにもカフェー好きの文士を彷彿させるかのようなたずまいで興味深い。

さて、わが国にカフェーというものが最初誕生したのは、いつなのか諸説あるが、明治41年東京日本橋の小網町に開業した「メゾン・鴻の巣」であるとも言われている。この「メゾン・鴻の巣」というカフェーは、この常連だった永井荷風の『摘録断腸亭日乗上』（1987年7月、岩波文庫）によると、大阪人だった鴻巣山人、本名奥田勘蔵という外国軍艦の料理人がはじめたもので、当時の新進の文士であった昴社の人々の眷顧を受け、忽ちに鴻巣山人の名前が世に知られるようになったという。このカフェーには、昴社の人々の他に与謝野晶子、鉄幹夫妻、里見などが集まったという。余り知られていないがこのカフェーから『カフェエ夜話』というPR誌が発行されていたことを紹介しておきたい。残念ながら創刊号と第一巻三号の二冊しか見ることができなかったのだが、いずれも鴻巣山人の表紙絵の雑誌でユーモアセンスにあふれている。日本近代文学館の稲垣達郎文庫に所蔵されている創刊号の『編集後記』には、春焦が「発行するに就て、与謝野先生御夫妻や、北原白秋氏、高村光太郎氏、長田幹彦氏、等其他の諸士に多大の御賛成と御助言とに預り、漸く創刊号を発行することの出来た」述べ、鴻巣山人は、パンの会の機関誌だった『屋上庭園』や『方寸』の印刷に尽力した伊上凡骨に、印刷についての知恵を拝借したという。パンの会の人々の力が大きかったようだ。

創刊号には、与謝野晶子の「鴻の巣の夜」と題した短歌10首が載せられている。いずれも『定本与謝野晶子全集』（1981年、講談社）『与謝野晶子全集』（1972年、文芸堂書店）には全く収録されていないので一つ紹介してみる。「夜の無し照日にまさり鴻の巣の鴻の少女の翅光れば」。とにかく様々な談義を文士や主人を交えて行っていたのであろう。ちなみに『カフェエ夜話』収録以外の鴻の巣関係の晶子の歌は、二首ほど先の二つの全集に収録されていた。晶子は通いつめていたようだ。創刊号には

フランス文学者、山内義雄の鴻巣山人の画の感想も書かれている。第一巻三号には、新居格が「うた瀬」の「夏の雨」と題する短歌4首を発表し、吉井勇が「枕々亭雑詠」の「夏」というタイトルで五首を、「枕々亭雑詠」の「影絵は踊る序」というタイトルで五首を発表している。

もう少しあとになると、堺利彦、片山潜、平出修、上司小剣らがこの「メゾン・鴻の巣」に集まるようになり、第一次「近代思想」の集会所ともなった。このようにカフェーと文化運動は切り離せず、多くの文芸雑誌や芸術家を生み出したのであった。

「メゾン・鴻の巣」のことばかり記したが、この間、私は東京の銀座にある「カフェー・パウルスタ」にも行ってみた。銀座のパウルスタは、創業は大正二年。パリの有名なカフェー「プロコック」を模したという。今では場所は移転しているそうだが、『創業90年 カフェーパウルスタ物語』なる独自のパンフレットを置いていた。パンフレットによると、当時「鬼の如く黒く恋の如く甘く地獄の如き熱きコーヒー」という宣伝文句をかかげ、道行く人にコーヒー試飲券を配ったり、家庭を訪問してコーヒーの入れ方を伝授したりもしたという。久保田万太郎が『三田文学』の仲間と通い話めたことや、小島正二郎の「パウルスタは、コーヒー一杯で一時間でも二時間でも粘っている、いやな顔をしなかつた。」というエピソードを紹介している。他にも、吉井勇、宇野浩二、菊池寛、水上淹太郎、芥川龍之介、佐藤春夫、広津和郎、正宗白鳥、『青鞥』の人々など常連の文士や、小山内薫、大谷竹次郎らの演劇人、藤田嗣治、吉田博などの画家も集まったという。文学や芸術が好きな私にとって、銀座パウルスタで飲むコーヒーは大正時代のわくわくするような文化芸術運動を想像させてくれ、格別に美味しかった。まさにモダニズム芸術運動の中核となる場所がカフェーだったのである。同じ時期に、関西でも多くのカフェーが出来、東京や大阪のどちらのカフェーにも出沒した宇野浩二らによって、カフェーに集まった人々とともに『シエネ』などの文芸同人雑誌が生み出された。

もう一度私の住み慣れた現代の大阪に話を戻す。直木三十五記念館一帯は、路地裏長屋を改装し、「美しい」「懐かしい」といったイメージを残す大阪の町屋再生をめざす場所となっている。癒しの雰囲気を感じ出すその町には、石畳、露地、長屋、坂道といった風情があり、アトリエが多く残され、再生された長屋には、カフェーがあり文化の活性化が行われている。アトリエでは多くの若い芸術家の卵やどんな可能性を秘めているかわからない若者が集まり、手作りの展覧会なども催しているという。この直木三十五ゆかりの場所近くには、井原西鶴や藤原家隆の墓もあるが、大阪を代表する作家織田作之助が代表作『木の都』を生み出した場所でもある。その界隈には、近年一心寺シアターなどという劇場も出来、落語、映画、演劇、コンサートなど多くの芸術文化公演を行っている。大阪谷町筋、長堀通りは、明治末から大正時代同様に、カフェーを中心とした大きな文化、芸術運動の拠点ともなっている。

カフェー、文学、芸術、切っても切り離せないこれら関係の中で、新しいカフェーや劇場がどんどん出来てきている今日、カフェーを中心としてどんな素晴らしい芸術家が生まれるのか大いに期待されるのである。

志士と由緒

佐藤昌利 (佛敎大学・京都産業大学非常勤講師/明治維新政治史)

「新選組！」と幕末維新

2004年はNHK大河ドラマ「新選組！」が放送され、ゆかりの地においては、さまざまな催しがなされ、幕末維新という時代が広く一般に受容されたのではないかと思う(ただ、学生に「視たか?」と問えば、その反応はいま一つだったのだが…)。

ドラマの始め、近藤勇や土方歳三がまだ武州多摩にいた頃、強調されていたのは、彼ら多摩の郷士が抱いた、武士になりたいと願う気持ち、すなわち徳川將軍を頂点とする近世身分制社会における上昇志向であった。ただ、近藤をはじめとする新選組の人々には、書簡、日記など資料が乏しく、若かりし日の彼らが世情をどのように認識し、考えていたのかは、実際のところ皆目見当がつかない。これをうまく説明するのは、研究者というよりむしろ、作家や脚本家の仕事なのかもしれないが、自分の壁に悩む郷士と、異国船にショックをうけ、政治への関心を募らせるという描写は残念ながらありきたりなものであった。

ドラマの城を出るといえばそれまでだが、人間が事を成さんとするときの心の葛藤の理由付けとして、現実の世情とともに、歴史的な背景をもふまえて、彼らの心理が描写できればよかったのではないかと。近藤、土方らにも、多摩の地における家それぞれの歴史があったであろうし、たとえその真偽のほどが詳らかではなくとも、「志」を立てるための証とするような由緒があるはずである。幕末維新という時代の見かた、捉えかたが、激動する政情のみに向けられ、分析が現状把握にとどまっていることを、丹波国のある郷士、湯浅五郎兵衛という人物を考え、特にそう思った。無論、これは自省の念でもある。

湯浅五郎兵衛とはだれか

湯浅五郎兵衛宗成という、「名もなき志士」と出会ったのは、京都府の日吉町郷土資料館が所蔵する「湯浅五郎兵衛家文書」の調査、解読の依頼を受けた折である。はずかしながら、湯浅五郎兵衛なる人物を私はよく知らなかった。五郎兵衛家の分家で、京都四条木屋町の薪炭商、枅屋へ養子に入り、湯浅喜右衛門を名乗り、政治活動をおこなうも、元治元年(1864)6月、新選組に捕縛され、六角獄舎で死んだ志士古高俊太郎のほうが幾分名は知れている。

そんななか、五郎兵衛を把握していく手がかりとなった情報は2つ。「勤王志士束簡」と名づけられた一幅の巻子と、湯浅家の先祖代々の歴史が認められた「乍恐由緒荒増書之覚」と題された、いわゆる由緒書であった。

「勤王志士束簡」は、湯浅五郎兵衛宛てに書かれた12点の書状からなる巻子で、河上彦斎、加屋栄太ら肥後藩勤王党関係者からの來簡がその大半を占める。明治初年のものが多く、幕末期に作られたであろう人間関係を頼りに、維新後までもない京都における肥後藩の代理人的な役割を委ねるといった内容である。

「乍恐由緒荒増書之覚」は、天保11年(1840)に作成され、園部藩小出家に提出されたもので、原本は存在しないが、昭和

32年(1957)に編まれた『湯浅五郎兵衛家由緒書』(旧世木村誌編纂委員会)により確認できる。

そこに書き上げられた湯浅五郎兵衛家の由緒は、12世紀初頭にまで遡る。紀州有田郡湯浅荘を本拠とする武士団湯浅党、その当主、湯浅有重の事歴を家の歴史のスタートとする。①元永元年(1118)閏9月7日、白河法皇の熊野山行幸の際に行宮を造営し、これを賞せられ天皇家の菊御紋を免許されたこと。②平清盛より「猶子」たる恩顧を受け、保元の乱の際、後白河院より四代にわたり北面の武士を勤め、その功を賞し、丹波国氷上郡竹田荘の領有を許されたこと。③梅尾山開祖として名高い明恵の実母を輩出したこと。④建武新政の折、大塔宮護良親王の令旨を奉じて挙兵し、南北朝講和の折、神器を奉じ供奉上洛したこと。万里小路副房の推挙により、家祖有重以来の由緒を称えられ、丹波国世木荘を下賜され、明德4年、同地に移り住んだこと。⑤山城国西岡および丹波国船井・桑田両郡を拝領した細川藤孝への加勢と、藤孝の子として生を受けた時哉(幼名、虎千代)が、天正3年10月、養子として湯浅家に入り、血縁関係が生まれたこと。⑥近世の肥後藩細川家と密接な関係を保ち、園部藩小出家支配においては、除地を許された郷士上席の家として勤仕してきたこと。

それでは、この由緒書がなぜ作成されたのか。全国的に凶作が打ち続き、また打ちこわしなどの度重なる民衆運動によって世の中が混乱をきたしていた天保期、作成者の五郎兵衛宗精は、いまだ幼年の又左右(のち五郎兵衛宗成)へ跡目を相続するに当たり、園部藩領の他の郷士とは「格別記述」を主張し、「同列」に扱われることを緊止しがたいとし、家にとってよりよい状況を次代の当主へと伝えるため、これが作成され、領主小出家に差し出されたのである。

久留島浩らにより近世地域社会における由緒は、「村の由緒」と捉えられ、危機に対する人々の運動性が強調され、地域内における中間層の理解へとつながった。しかし、湯浅五郎兵衛家や、その他、筆者が確認した幕末政治へと関わりを有する家は、19世紀初頭段階において、自己を地域・既存の組織から逸脱した存在であると意義づけることが多い。このことが、日本近代の公論形成へと結びつくのか、否かについては、別稿を期したい。

2つの情報から、湯浅五郎兵衛家は、天保期において、中世にまで遡る家の由緒を調べ、地域におけるアイデンティティを確認しており、戦国期から続く肥後藩細川家との親密な関係をその理由に、領主と同列に扱おうとする郷士層において、秀でた存在であると主張としたこと。また、湯浅五郎兵衛家の由緒は、肥後藩内においても認識され、特に勤王・義挙を志す人間が見いだし、大名家、肥後細川と丹波国のある郷士、湯浅五郎兵衛とが政治的に結び付いたことがわかった。

安政4年(1857)5月、丹波国世木を訪れた肥後藩士松田重助によって、湯浅五郎兵衛は、政治の場へといざなわれることになった。京都、大坂、堺、そして長州へとその居所を移し、その志の実現を目指して、動いていく。その詳細については冊子『湯浅五郎兵衛と幕末維新』(日吉町郷土資料館、2005年刊行予定)に譲る。参照されたい。

私は、2003年9月から04年8月までの1年間、勤務先の龍谷大学経済学部から国外研究の機会を与えられ、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)の日本リサーチセンター(JRC)でアカデミック・ビジターとしての研究生活を送ることになった。私の研究分野は近代日本経済史で、現在は、アジアにおける日本の工業化と在来綿織物業の発展との関連性を研究している。インターナショナルで開放的な雰囲気な満ちたSOASでは、関心のあるセミナーに自由に参加し、視野を広げながら自分の研究に没頭することができた。SOASの創立は第一次大戦中の1916年にまで遡り、創立の第一義的な目的は大英帝国のインテリジェンスを担うことにあったと言われている。附属図書館には戦前期からのアジア・アフリカ関連の文献が揃えられており、日本語で書かれた日本経済史関係の蔵書も多い。特にジャパン・セクションにある地方史のコレクションは立派なもので、まさかロンドンに来て「門真市史」や「岸和田市史」にお目にかかれるとは思ってみなかった。また、電子ジャーナルなどエレクトロニック・リソースに関しても「A-to-Z Electronic Journals」をはじめ40近いデータベースが取り揃えられており、効率のよい文献渉猟ができた。それに、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)の図書館利用やセミナー参加も許されたので、日本経済史家の研究環境としては恵まれたものであった。

ところで、私がアジアにおける日本の工業化との関連で注目している20世紀初頭の在来綿織物業の力織機工場化に関しては、従来、産地に集結して国内市場向けの小幅綿布を織る機屋への安価で簡便な国産小幅力織機の導入が旨視されてきた。すなわち、日露戦後期の1910年前後から泉南(大阪府)や播州(兵庫県)などいくつかの先進的な綿織物産地で工場制度の採用を伴って進化した豊田型をはじめとする国産小幅力織機の普及である。しかしながら、最近の私の調査によれば、この時期の在地における綿織物業の担い手には国内市場向けの服地用綿布を扱う業者がいて、彼らにおいても輸入広幅力織機の導入による力織機工場化がみられた。つまり、明治から大正にかけての力織機工場化した綿織物生産の担い手としては、これまで通説的に考えられてきた紡績兼営織布業(輸出綿布—輸入広幅力織機)と産地に集結した多くの機屋(国内市場向けの小幅綿布—国産小幅力織機)だけではなく、それらとは異なるタイプの業者(国内市場向けの服地用綿布—輸入広幅力織機)の存在がうかがい知られるのである。今回の国外研究では、こうした業者のひとつである合資会社義済堂(山口県玖珂郡岩国町、一八七三年創業)の広幅力織機の購入先を、部分的にはであるが、プレストンにあるランカシャー・レコード・オフィス(the Lancashire Record Office at Preston)で突きとめることができた。

この義済堂という合資会社は、明治から大正にかけての山口県の伝統的な綿木綿産地(いわゆる周東三郡玖珂・熊毛・大島)にまたがる地域で、国内市場向けの広幅綿布(小倉服地、広幅綿縮)を主に輸入力織機によって生産していた業者であり、もともとは小野田セメントなどと並んで土族授産の試みとして設立された会社企業のひとつであった。義済堂の明治期から昭

和戦前期までの事業に関する経営史料は、広島大学附属図書館中央図書館に『特別集書 義済堂文庫(日岩国藩義済堂旧蔵資料)』として所蔵されており、その史料目録が山口県史編さん室近代部会によって1996年に作成されている(『広島大学附属図書館中央図書館所蔵 義済堂関係史料目録』)。こうした経営史料のうち「機織工賃帳」などの帳簿から得られるデータと義済堂の社史(義済堂編『義済堂百年史』、1974年)の内容から、義済堂は機械織りへの転換に向けて1905年から14年まで広幅力織機64台をイギリスから順次輸入しており、そのうちの桿換式力織機6台(1907年購入)は帳簿の中で「プラット機」と呼ばれ、オルダムスのプラット社(Platt Bros & Co. Ltd of Oldham、19世紀末から20世紀初頭にかけての世界最大級の繊維機械メーカー)から購入された可能性が高かった。私は、この6台の桿換式力織機が確かにプラット社製であることを確認するべく、プレストンのランカシャー・レコード・オフィスに赴いたのであった。

この文書館にプラット社の経営史料が豊富に所蔵されていることは、イギリスの代表的な綿業史家ダグラス・ファーニー(Douglas A. Farnie)先生の論文で知っており、当地でも調査の前日にお会いして、留意点など事細かにサセクションをいただいた。その心のこもったレクチャーは、外国の一次史料の調査に不慣れな私にとって大変ありがたいものであった。こうして、満を持しての文書館訪問であったが、見るべき帳簿は全15冊、総計約5000頁に及び、丸2日、朝から晩まで、ひたすら帳簿をめくるという作業に従事した。半ばあきらめかけた2日目の夕方、私の探していた義済堂からの注文書(Platt Bros., Loom Order Books, No.21, April 1906-October 1909, p.97)を遂に見つけることができた。台数、購入年、桿換式であることなどもびったり一致し、6台の桿換式力織機は間違いなくプラット社製のもので、三井物産を通じて購入されていたことが判明した。日本側の史料で言われていることのウラがとれたわけである。こうした日本と外国の一次史料の突き合せは、今回がはじめてであり、私にとっては大変エキサイティングな経験であった。もっとも、アーカイブリストの温かい援助がなければ、これほどスムーズにはいかなかったであろう。よく知られたイギリスでのアーカイブリストの充実ぶりを実感した次第である。

■編集後記 ■ 学術ミニ情報誌「PS JOURNAL」第6号をお届けします。

◆今回、経済史プロバ4人と社会福祉史、維新史、近現代文学の人たちに登場してもらいました。鋭い問題提起あり、研究成果あり、史資料の大切さありとバラエティに富んだ小論エッセイになりました。(k)

◆戦後60年となり、個人が保管している貴重な資料も時折世代交代時に散逸してしまうこともあり、その意味でも寺脇小論は貴重な証言です。(n)

PS Journal 2005 第6号 2005年5月20日 発行

●発行・編集:日本図書センターP&S PS Journal 刊行委員会

PS Journal 編集部 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-10-6

TEL:03-5940-5474 FAX:03-5940-5476 e-mail: nps@nihonsho.co.jp

◎記事の無断複製、転載を禁じます。